タシチョ・ゾンの全景(ティンプーにある)

弓技大会(弓技はブータンの国技である)

マスク・ダンス(弓技大会の余興として行なわれる)

王宮内に立ち並ぶタルチョー（祈禱旗）

ガントクの商店街

シッキムの子ども

シッキムの人びと
（日本人によく似ている）

日本語版によせて

V・H・コエロ

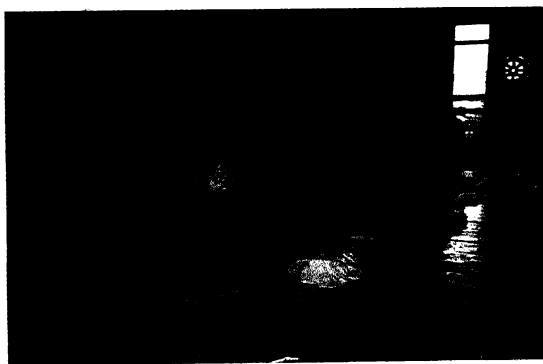
山々の呼声は、世界のすみずみにまで遠くひびき渡り、風雅で自然を愛する日本の人々には、たえず格別な魅力となって強く訴えるところがあった。重畳たるヒマラヤ山系にいだかれた二つの王国シッキムとブータンが、日本の人々の関心を呼ぶのは、きわめて当然のことといえよう。加えて、この二つの仏教国は、宗教上・哲学上にも、日本と共通する親しい関係を持っているのである。

私は、シッキム在勤のインド政府派遣の政治顧問として、一九六六、六七の二年間、任地にあって、興味深くも有意義な時を過ごし、この間、数回にわたりブータンを訪れる機会を得たのである。このため、私は、この二国について直接見聞して、その地政学的立場や生活方法、そして温和で平和を愛する国民の考え方などについて知ることができたのである。

さらに幸せなことに、私はこれに続く二年間を駐日インド大使として、日本で楽しく過ごすことができて、この間に、同国についていろいろのことを学びかつその真価を知る機会をえたので

チョルテン（仏舎利塔）

ウォンディ・ゾンにある壁画

ウォンディ・ゾンで修業中のゲロン（見習い僧）

うだ。一般的に、彼らは友好的で親切で、悪だくみなどしない国民である。

今日、諸障壁はしだいに除去されている。すなわち、新しい道路が開通して交通が便利になり、これとともに外部の進歩や技術開発も国のまっただ中に入りこんできている。うたがいもなく、ブータンは一六世紀の姿から突然目ざめて、いきなり二〇世紀の世界に入りこんだのである。これらの根本的な変革に対するブータン人の反応はどんなものになるのだろうか? 彼らの多くは無数の精霊の存在をまだ信じているのだ。ゾンは、宗教と統治に対する昔からの象徴であったが、進歩とエネルギーの新しい象徴である工場の煙突と、どのようにして張りあって行こうとするのだろうか?

過去一〇年間、ブータンを訪れた人の数は、一年に一二人を越えたことはなかったし、それに前の四世紀の間、この国を訪れた外国人は、せいぜい一〇人か一五人にすぎなかった。いくつかの言いつたえ、一、二のできごと、歴史のごく一部分そしてブータンに旅した人々の日記といったものが、この国に関するこれまでの記述のすべてであった。ブータンはこれまでも、また現在でもよく開けていない国ではあるが、外界との接触が重なるにつれて、その中世的な歴史や伝統的なきらびやかさは、しだいにその勢いをうしなうようになるだろう。

この中世から近代への移行に当たって、ブータンとシッキムは、自らの諸事を進めるのにきわめて細心かつ慎重で、現在および未来に進歩と利益を期待するあまり、絶対的な価値のある過去のよさを没却しないようにつとめている。ブータン人およびシッキム人は、この仕事すなわち再

ある。それゆえ、本書の日本語版の発刊に、慶応義塾大学山岳部が関心を持っていると聞いたとき、私は心からこれを歓迎しかつその計画性を承諾したのである。

われわれが世界地図をながめるとき、シッキムとブータンはヒマラヤ山系のかげにかくれてしまうように小さく見える。にもかかわらずこの二つの国は、地図の中でひときわ目立った存在を示し、この地への訪問者、行きずりの旅行者にも種々の印象を与えるが、この国々を文化的・人類学的・宗教的により深く研究した人々に対し、その与えるものははるかに大きいのである。

数世紀にわたって、シッキム人は自らの土地を死守しつづけ、自らの生活方法を頑固に維持しつづけてきた。このためシッキムらしさが特に目立つということになるのである。加えて大自然の美観にめぐまれ、雪をいただくヒマラヤの大きな山なみが、北と北西の国境を形成している。この大景観は、これを仰ぎ見たものすべて、その心がふるい立つような偉大さがあり、一見忘れることができないものである。

ブータンも自然美にめぐまれた国で、南部には泡立つ激流と切り立った山々がある。北方雪を頂く大ヒマラヤ山系に向かっては、森と牧場という一連の風景が、渓谷ぞいに高地のほうまでつづいている。素朴な人たちがこの山地に住んでいるが、またここには精霊と悪霊が住んでいると信じられている。この二つの霊は、現実と神秘の世界を描いた古風な絵画の中に見られるのである。その服装・伝統・習慣に特に明らかなように、ブータンにも珍らしいものが多い。ブータン人は外部の世界の動きにはほとんど関心を示さず、むしろ隔絶されていることを求めているよ

私はここに、この日本語版を刊行するにあたり協力いただいた慶応義塾大学山岳部に謝意を表したい。また併せてインド政府文化広報部にも感謝したい。同部は本書の出版元であり、かつ日本版によって日本の読者に本書を紹介する労をとられたのである。

この機会に強調しておきたいことは、本書に出てくる私の見解は、全く私個人の考え方にもとづくものであり、インド政府あるいは私がその名前を引用したいかなる人々の見解をも表明したものでないということである。

一九七三年八月　コロンボにて

建の事業に専心するに当たって、自らはその土地をうしなうという根本的な変革は何らおこさず、しかもその不可欠の天性を保持しながら、この事業を達成するにちがいない。そこで日本の読者は、その見通しや関心とするところが、シッキムやブータンの人々の目的や抱負と同じものだと気づかれることだろう。

このシッキムとブータンに関する実録を書きながら、私がずっと抱いていた心からの願いは、大きなへだたりを埋めるため、簡潔な記述の中に、二国の土地・人民・風習・統治形態などに関する情報を提供することであった。この本は、おそらく行政・報道・旅行関係者および一般読者に役立つことと思う。誰もが、世界の中でたやすく近づけない未知の国のことをもっとも知りたいと思っているからだ。この本の内容は、現存する確実な文書からえられた集録であり、ある部分は、私がシッキムに勤務し、ブータンを数回訪問したさい、私自身が観察しかつかわした数多くの会話からえられたものである。

本書は一九六七年六月ガントクにおいて執筆されたものである。公表されて引用可能な若干の条約文および公文書などは、その歴史的価値から、読者の便宜のため巻末に集録した。

本書の読者は、末尾に追録された三田幸夫氏の紀行文に大いに興味をそそられることと思う。氏は前日本山岳会会長で慶応大学山岳部のＯＢでもあり、氏の三〇年前のシッキム旅行を思い出して書かれたものである。わざわざ本稿をよせていただいた氏に、私は深甚の謝意を表したい。

目次

日本語版によせて 1

シッキムとブータン

第一部　シッキム

第一章　国土と人民 15

ラマ教　僧院　首都ガントク

第二章　前　史 35

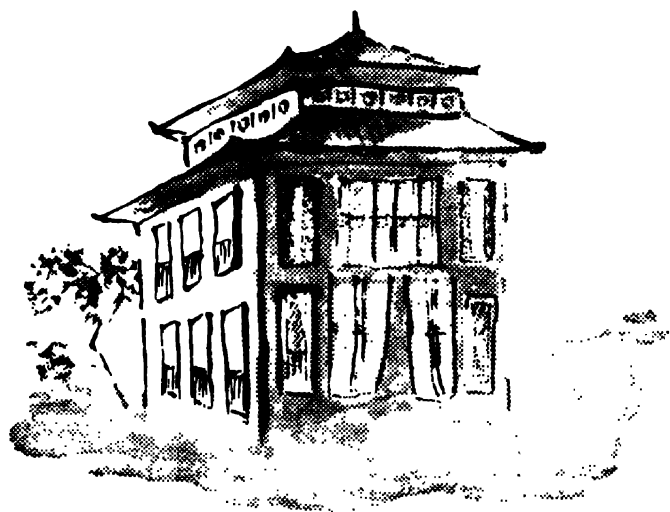
第三章　一九世紀 43

第四章　最近五、六〇年の時期 56

インドとの条約締結とそれ以後

第六章　人民についての詳報　158
宗教　服装　食物と飲用　誕生・結婚・死亡　労働制度　美術工芸　音楽と舞踊　他の民衆風俗
第七章　政府と一般行政　171
司法制度　財政収入行政　教育　公衆衛生　交通事情
軍隊　貨幣と郵税　貿易　著者の自由な見解
第八章　天然資源と開発計画　182
開発計画
第九章　将来の展望　191
付録　195
シッキム雑感（座談会）　223
シッキムへの憧れ他　三田幸夫　233
あとがき　250

第五章　天然資源と開発　81
シッキムの開発計画
第六章　政府と行政　92
政党　インドの特別責任
第七章　前途の見通し　103
第二部　ブータン
第一章　国土と人民　112
地理的特徴
第二章　前　史　121
第三章　英国統治時代　132
第四章　インド独立以後　139
第五章　北方の隣邦との関係　151

シッキムとブータン

装幀　長谷川正

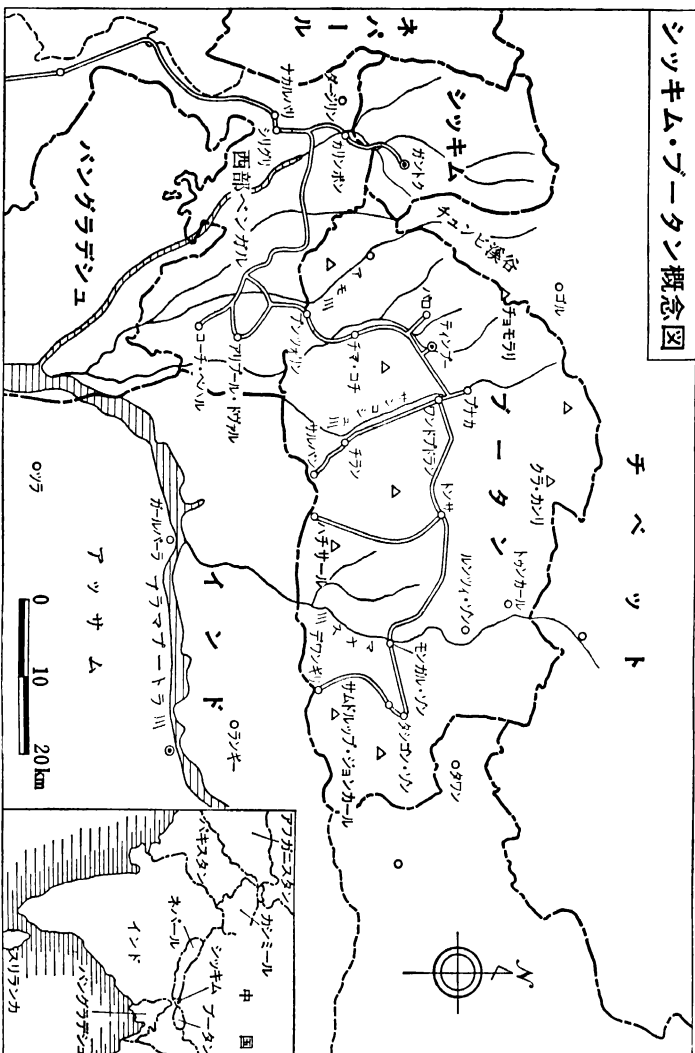
地図作製　神戸常雄

カット　辰沼廣吉

写真協力
鈴木聰
山と溪谷社
茗溪堂

ケース写真／インドのダージリンから見たカンチェンジュンガ

第一部　シッキム

シッキム・ブータン概念図
チ ベ ッ ト
ブ ー タ ン
シッキム
ネパール
西部ベンガル
バングラデシュ
イ ン ド
ア ッ サ ム
ゴル
クラ・カンリ
トゥンカール
チョモラリ
チュンビ渓谷
プナカ
ルンツィ・ゾン
タワン
ティンプー
トンサ
ワンドプドラン
パロ
モンガル・ゾン
タシゴン・ゾン
ガントク
サンコシュ川
アモ川
チマ・コチ
チラン
マナス川
サムドルップ・ジョンカール
ダージリン
カリンポン
ハチサール
デワンギリ
サルパン
プンツォリン
ナカルバリ
シリグリ
アリプール・ドゥアル
コーチ・ベハル
ランギー
ガールパーラ
ブラマプートラ川
ツラ
0
10
20km
アフガニスタン
カシミール
中 国
パキスタン
シッキム
ブータン
ネパール
インド
バングラデシュ
スリランカ

第一章　国土と人民

西ベンガルの北部国境沿いに、ヒマラヤ山脈の連峰は南の方に延び、それはまた二つの巨大な支脈に分れる。これがシンガリラ山脈とチョラ山脈である。このほとんど踏破できない山々の障壁は、平原の方に向かって下降傾斜面をなしつつ、ヒマラヤ山脈からちょうどえぐりとられた形の規模壮大な円型劇場の三側面をとりかこんでいるのである。この山国の占める土地は、織りなす山の背の重畳たる山なみであって、山また山が聳え立ち、それは彼方の「雪のすみか」——ヒマラヤ——の峰や峠の山裾までつづいているのである。

これがシッキムという領土である。北東の峰や峠をとりかこんでいる連山は、チベットとの国境を形づくっているが、それはまた西と西南の方でシッキムとネパールとの境界をなしている。南東の方は、ティチュ山脈の分水嶺がひと筋になって、シッキムとブータンの間の自然国境をなしている。

ティスタ川は、シッキムを曲がりくねって流れている。その主な支流はランギット川、ロンニ

シッキム概念図
昭和48年10月25日
神戸常雄 製図
チベット
コングラ・ラ
5133
チュルン・ラ
5447
ナク・ラ
5270
チョルテン・ニマ山稜
カンチェンジャオ
6889
パウフンリ
7125
6927
ジョンソンピーク
7459
ネパールピーク
7168
タングー
チョムブ
6362
ユメサムドン
カンチェンジュンガ氷河
テントピーク
7365
ゼム氷河
ティスタ川
ラチュン川
ゼム川
トウィンス
7350
シニオルチュ
6889
チュガルン
5759
カンチェンジュンガ
8585
シムヴ
6811
ラチェン
5276
タルン
7363
シッキム
タンカール・ラ
4895
ヤルン氷河
カブルー7338
ペミカンチェン
4483
ネパール
カン・ラ
5084
タルン川
ラチュン
ナルシン
5825
マンガン
ドンキャ山稜
アモ川
シンガリラ山稜
カルサン
3725
ガントク
ランポ川
ランギット川
シンタム
ランポ
ラドゥ・カイエッリ川
ブータン
カリンポン
ダージリン
ティスタ川
ジャルダーカ川
N
0 10 20 30 40 50km
縮尺 1/1,200,000

ン川とラチュン川の水の少ない上流峡谷でさえも一二七ミリの降雨量がある。モンスーンは実際深い谷に沿って北の方に侵入して行き、湿地帯はほとんど雪線にまで達している。

シッキムのもっとも古い先住民族は、レプチャ族といわれているが、自称「ロンパ」族、文字通りに訳すならば、「谷間族(ラビーン・フォーク)」である。彼らは、アッサム、ビルマの方から山の麓沿いに東から移住してきたと信ぜられている。彼らは体の作りが小さく、きゃしゃで、髪の毛をきれいにカットしている特徴があり、チベット人と似ているところは少ない。隠和で静かな性格の人民は、やや怠惰なきらいがあるにせよ、孤独を好み、その土地の動物や植物に関しては、驚くほどものしりである。

今日のレプチャ族は仏教徒で、かつてそのまわりにある自然的にできたもの、山や川や森などの精霊を崇拝していたのであるが、一般にきわめて信仰深い人たちである。大雪、激流、風や霧、ゴロゴロいう雷、疾風疾雨の稲妻などが、自然の暴威の真只中で生活してきた彼らの性格の中に深刻な印象を残したことは疑いない。

レプチャ族とはっきりちがっているのがチベット系の人民であるブティア族で、体格もよく、蒙古族的な特徴を備えている。ブティア族は、シッキム各地に住みついていて、北の方では、農民としてよりも、商人や牛飼いとして彼らは生計を立てている者が多かったが、現在でもそうである。彼らは、暑くて湿気の多い峡谷地帯よりも、涼しい高地に住むのを好む。ブティア族の宗教は仏教の一種であって、とりわけラマ教と呼ばれており、その言語はチベット語から由来して

川、ラチェン川、ラチュン川で、すべて北の高稜から落ちてきた雪どけの奔流である。本来シッキムは、ティスタ川を水源地とする山のふところである。チベットとの境界線は、一八九〇年三月一七日の英支協約で次のように規定されている。

シッキムとチベットとの境界線は、シッキムのティスタ川に流れこんでいる水源と、その水源からチベットのモ川に流れこんでいる支流と、北に向かってチベットの他の川に流れる水流との分水嶺をなしている山の尾根である。この稜線は、ブータン国境にあるジプモチ山にはじまり、上述の分水嶺を伝ってネパール領土に相会する点まで及んでいる。

主な山脈は、シンガリラ山脈で、それは有名なサンダプー、ファルートという峰のあるカンチェンジュンガから走っているが、チョラ山脈は、パウフンリから下ってドンキャ峠の東に向かいティスタ川とアモ川との分水嶺を形成している。シンガリラ山脈の主な峠は、ネパールに通じるチイアバンジャン峠であるが、チョラ山脈は、そのほかにジェンプ、ナトゥ、ヤク、タンカなどの峠をかかえている。北の方、チベットに通ずる主な峠は、コングラ、バンチョー、セセなどの峠である。

シッキムはモンスーンの直接通路に当たっているので峡谷がせまり、カンチェンジュンガに近いという地理的状況から、ティスタ川が流れる低地帯では年間降雨量三五五ミリに及び、ラチェ

政政治機構にも反映している。こうした諸原因があるにもかかわらず、民族意識というか民族感情というようなものがだんだんひろがってきて、歴史的文化的統一性も高められてきている。

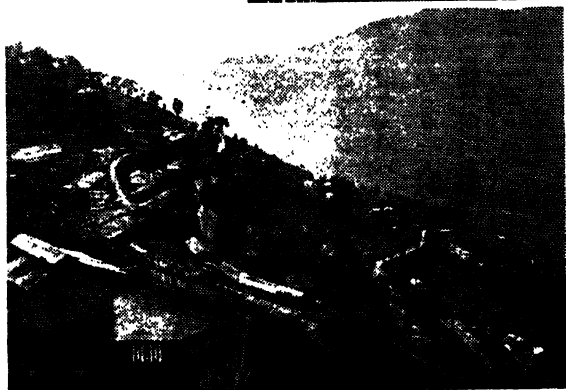
ラマ教

シッキムのレプチャ族、ブータンのブティア族の原始宗教は、一種の自然崇拝教で、ポン教またはシャーマン教ともいわれる。これは精霊と妖怪の崇拝と魔法魔術との奇妙な組合せである。こういう精霊は森羅万象どこにも存在し、善悪さまざまの精霊は、木や岩や山頂や空の中にも宿っているというわけである。これらの諸霊は拝まれるだけではなく、石や布切れや枝などのような捧げ物をして御機嫌伺いを受けなければならなかったのである。魔法使いや女魔法使いは、悪意よりも善意を呼び起こすものとされたのである。このように、病気や不幸をもたらす悪霊を追い払い、動物やときには人間さえも犠牲（いけにえ）として捧げ奉るということは、ポン教の重要なならわしの一つであった。

導師リンポチェとして知られているロータス・ボーン（蓮華の生れという意味）のパドゥマ・サンバワは、仏教をシッキムとブータンに八世紀頃チベットを通じて伝えた。彼はインド北部ナランダ大学の神秘教の教師であったが、当時インドではやっていた仏教と原始信仰や自然崇拝の混り合ったタンタリ教によく通じていた。当時ヒマラヤを越えてチベットまで名が広まっていた秘教教授の導師リンポチェは、チベット王のティスロン・デツァン（西暦七四二年から八〇〇年まで統治）の信奉おく能わないところで

いる。
シッキムのもっとも多数の民族集団は、ネパールから移住してきて、次第にこの地に根をおろしてきたネパール族であるのは実に興味あることである。彼らは勤勉で吝嗇な人民であるが、移住民としては抜群で、商売や役所仕事で重要な地位を占めるにいたっている。シッキムの西端に主に住みついているシェルパ族とタマン族は、いずれも仏教徒であるが、これを別とすれば、ネパール族は今日全部ヒンズー教徒で、通常階級制度がきびしい。
そのほか第四番目のグループとして、ツォン族として知られている小さいが目立つ人種がある。この人種はかつて西シッキムの一部で、今日のネパールのリンブワナ地方にあるチベットのツァンポ峡谷からの移住者である。ツォン族のあるものはシッキムに流れこんで、住みついている。それからまたこれよりずっと少数だが、経済的には安定して勢力のあるインド商人の集団がある。現在一八万人（最近の人口調査は一九六一年に行なわれ、一六二、一八九人となっている）の人口の中で、七二パーセントはネパール族で、そのほかはツォン族の少数を除けば、レプチャ族とブティア族とにちょうど半分ずつくらいに分かれている。
ちょっと見たところでも、シッキム人の中には根っから毛色の変わったものがあり、その起源も三つか四つあるし、言語もレプチャ語、ブティア語、グルカ語があるし、宗教も二つあるが、しかしどことなく一つになって行く傾向がある。第一、シッキム人ということ自体、単一で共通の言語的人種的解釈があるわけではない。人民の間に違いと分化があることは、後述する通り行

シッキムとイントの国境を流れるティスタ川（右側がシッキム）▶

丘陵地帯にあるシッキムの部落▼

あったのである。

このチベット王ティスロン・デツァンは、ある中国王妃の子息で仏教に強くひかれていた先祖の後裔であった。彼はインドに書物や教師を求めて使節団を送り、サンスクリット語から、ときにはシナ語の経典からチベット語にきちんと翻訳することを始めたのである。彼はまた仏教の寺院や僧院を建てようとしたのであるが、その努力は、よく悪霊のせいにされていた、その頃つづいた地震のために水泡に帰してしまった。そこで彼はパドゥマ・サンバワという秘教僧の助けを借りて目的を達しようとしたのである。

パドゥマ・サンバワは、西暦七四七年頃ネパールのカトマンズからキロンを経てサムイェ（サムヤともいう）に着いた。彼は悪霊を平らげ、説得をつづけてラマ教の最初の集団をうちたてた。彼はまたサムイェで最初の僧院を建てるのに国王と協力した。当時行なわれていたラマ教は、大乗仏教と地元の神話、秘教、魔術とが渾然と混り合ってできたものであった。ポン教の遺物とプラナヤマ、アサナ、マントラに関するタンタリ教のしきたりはなくてはならない要素である。魔術から儀式にいたるまで、祈禱師や集団崇拝を通じてラマ教は、利他主義(菩薩の理想)及び自己否定（スンヤタの目標）を教えこんだのである。

導師リンポチェは、チベットならびにその西方地域を旅行中にシッキム、ブータンを訪れたと信じられている。しかしながら、仏教がこの地方にすでに伝っていたけれども、シッキムにラマ教の地盤が確立したのは、もっと後のことで、ラツン・チェンボが着いた一七世紀の半ば頃であ

ときあたかも東チベットのカームという勇敢な先祖の後裔であるプンツォークと呼ばれる人物が東方にいると聞いている。そこで、導師の予言にしたがって、われわれはその人物をわれわれの仲間に入れようではないか」と。

使いの者が出されて、プンツォークが探し出され見つかった。そして東方からきた第四の優れたラマ僧として、三人のラマ僧により支配者にまつりあげられたのである。彼はナムゲェ（ナムギャル）というラツン自身の姓（サーネーム）とチョギャル（すなわちダルマ・ラジャ）の称号を与えられたのである。彼は当時三八歳であった。このことは、西歴一六四二年の出来事であると信じられている（ジョン・クロードの『シッキムとブータン白書』による。プンツォークの先祖はラマによる神格化に先立つ三世紀間、シッキムの支配者であった。プンツォークは最初の神格化された法王であった）。

すでに述べたように、ラマ教は一七世紀の半ばまでにチベットで広まって盛んな宗教になっていた。一六一五年から一六八〇年までの生涯を送った第五代ダライ・ラマはまた、モンゴル首長のグスリ・テンジン・チョギャルによりチベットで現世の支配権力を与えられた。チョギャルは一六四二年に当時のツァン王を打ち破りチベット全域の領主として権力を樹立した人である。霊界と世俗界との権力を併せ備えて、ダライ・ラマは、実際にこの国に類（たぐ）いない支配者になったのである。第五代から現在の一四代にわたる歴代のダライ・ラマは、霊界の首長であるのみならず、世俗界の支配者でもあるのである。

ダライ・ラマの霊界の支配力は、ただ単にチベットだけでなく、ラダック、シッキム、ブータンにまで及んでいる。彼は、地上におけるチェンレジ、すなわち慈悲の主の再来の化身であり、

った。事実、ラマ教がチベットで強力な階級制度をきずきあげたのは、一七世紀の後半であった。

このラツン・チェンボは、ツァンポ川の下流峡谷のコンプの生まれで、西歴一五九五年に相当する六年回帰年度の一〇年目の火鳥の年に生まれた。彼はさまざまの僧院で幾多の年月を過ごしたが、その学の深さと英知とで非常な名声を博するようになった。彼はカングラナンマ峠を越えたが、カンパ・カブルク洞窟の向こうに道がないと知るや、奇跡的にもカブルーの上部地方まで一飛びしたといわれる。そこで二週間ほど滞在して後、またそのあとを慕う弟子たちが集まったところまで飛んだということである。彼はそれから弟子たちをヅォングレへの道を経て、シッキムのノルブガン（ヨクサム）まで導いて行ったのであった。

ラツン・チェンボは、当時流行していた仏教の多数派の一つであるニンマ派の二人のラマ僧と一緒にシッキムに着いた。シンギレ峠の西門からいま一人のラマ僧セムパハ・チェンボと呼ばれる（カルトク派）と、リグジン・チェンボと呼ばれるヌガダク派のもう一人のラマ僧が訪れきたが、この方はダージリンとナムチ（ダージリンはインドの北ベンガル地方に、ナムチは西シッキムに位置する）を経て南門を開いてやってきたのである。この三人のラマ僧が会った場所はレプチャ族によって、「三賢者（スリー・スペリオール・ワンズ）」という意味のヨクサムと名づけられたところであった。

この三人のラマ僧は、相談会を開き、第四番目の僧を探そうときめた。ラツン・チェンボはいっている。「導師リンポチェの予言によれば、四人の高貴な家柄の兄弟がシッキムで会って、その統治をはかるであろう。それゆえに、われわれは、北、南、西からきた三人なのだから、この

いわゆる伝統的流派であるニンマ派はラマ教の厳格な形式的スタイルを代表しているが、その下に三小派、すなわち、ペミオンチを首長とするラツン派――それに大部分の僧院は属す――と、カルトク及びドリン僧院を保有するカルトク派及びナム・ツェ、タシディン、ジルノン、タン・モチェンの僧院を握っているヌガダク派の三派がある。

カルマ・カルギュは、カルギュ派のもっとも初期の派の一つであって、マルパとその弟子ミラレパによって創立された。シッキムの最初のカルマ派僧院は、一七三〇年の頃その支配者ギュルメド・ナムギャルによりラランで建立されたが、それはチベットへこの支配者が巡礼に行っている間、第九代カルマ派の大ラマに対する敬意を表するためのものであった。ほかのカルマ派僧院は、ルムテクとポドンとにあった。

シッキムで犠牲(いけにえ)をささげ拝む特別めだつ場所は、文字通りに岩窟（導師リンポチェを祀(まつ)る）であるタクプ、僧だけが拝むゴムパ、いま一つは普通はゴムパで通っているけれども、正しくいえばマニ・ラカンがあり、これはよく村々に見られる。このマニ・ラカンは、村々の宗教的になくてはならないものになっているのである。

僧院への通路は、祈禱旗がくくりつけられている長い竹棹の列が両側にあって、そこにはまた苔むしたチョルテン（献台）と長いメンダン（記念碑）が並んでいる。チョルテンは、文字通りには捧げ物受けであるが、もとはといえば家の燈籠用の固型の円いつくりであったけれども、いまは仏陀とその弟子のために建てられたものが多い。チョルテンの形や細部はそれぞれ山くつき

チベットの守り神でもある。ダライ・ラマは、死ぬ前にどこで再生するかをさし示すことがしばしばある。しかし、彼が死んで三年以内にそれが実現しないと、ネ・チュンとサムイェにおける神託は、後見役の役割を演じて、後継者の確認選抜などの詳しいことはいわずもがな、その場所、住居までも予言するのである。

当時チベットの三主要僧院の中でもっとも学識あるラマ僧は、再生化身のラマ僧を見つけるために出立していた。変わった環境に生まれた男の子は探し出され、皮膚や身体にある特徴があり、チェンレジの特徴に似ためだった印しが目をつけられたのである。最終的な宗教儀式が行なわれて後、選ばれた少年は、その前任者に所属していたさまざまなものを彼が真の再生化身であるということの証拠として、それを証明することを要求されるのである。この再発見と同一確認の特別な手続きは、歴史上珍しいものである。それは、ラマ教の第二の柱であるパンチェン・ラマにも、また他の高位の聖職にあるラマ僧にも適用される。

僧院

上述の三ラマ僧は、シッキムに宗教をもたらし、その国の支配者を定めた。年を経るにつれて次第にラマ教は国教になり、その成長に伴って数えきれないほどの僧院が各地に建てられた。シッキムには、ラマ教が二派あり、ニンマ派と、今日ではカルマ派によって代表されているカルギュ派とに分れている。第三番目のデュク派は今日では代表として扱われていない。

の名誉権限をもっている。

ペミオンチ僧院は、他の多くの寺院たとえば、リンジン、シミク、ファギエなどの寺院を監督する。シッキムでもっとも活動的で栄えている僧院は、ペミオンチとポドンである。

僧院の中でもっとも重要なところは、寺またはラカンである。それは二つの目的、すなわち、集会場と遺物や彫像のある礼拝場とのためのものである。普通それは、宗教行列の際敬虔なラマ僧や信者達がそのまわりを動けるように石をひいた小路でかこまれている。

僧院の正面入口を入ると短い石の階段がある。この階段を上ると、入口はつねに上の欄干から垂れ下っているヤク毛又は羊毛からできた大きな幕で蔽われているのが見える。広間の中に入ると、通路は悪魔の絵姿でかこまれているが、それはその地方の悪鬼である。それから次に、赤と青黒くぬった一対のぞっとするような小鬼が出てくる。これらの描かれたものの中には、チベット特有の一二の「タンマ」すなわち空の妖精があり、これらは病気の種を蒔いたり、導師によって征圧された主だった悪魔の仲間のものだったと信ぜられている。

控えの間には、外界の悪魔から宇宙天地を守る四方の王が壁画法で描いてある四つの大肖像画がある。それは戦闘の装いでまとわれており、威圧する感じがするものである。それは入口の両側に各二つある。東を守る白いのが、ガンダルバ王、南を守る緑のがクンバンダ王、西を守る赤いのがナガ王、北を守る黄色いのがヤクシャ王である。

村にある小さな僧院には、マニ・ラカンすなわち祈り樽が寺の中に入れてあり、普通の信者が

で、死ぬと身体の分解される五要素、土、空気、水、火、エーテルを象徴している。
下の部分は、固い矩型の台盤で、それは大地をあらわしている。その上に、水をかたどった球がある。火の要素は三角の部分であらわされ、空気は青天空を逆にした型の三日月で象徴されている。その全体はエーテルをあらわす円錐形冠をつけた形になっている。
シッキムでもっとも貴いチョルテンは、タシディンのもので、それが特別神聖にされるのは、シャカムニの先祖たるかの神秘の仏陀の遺物の一種を保存しているからである。それは巡礼のためにはまたとない名所で、このチョルテンをよく眺めて拝むということだけでも、諸罪の一つを償うことになると思われている。
僧院の近辺によく見られるのは、石の台座で、ラマ僧の筆頭が公開でその弟子達に最初に教えるときに使う玉座（スローン）と呼ばれている。このように名高い玉座の一つはペミオンチ・チョルテンにあるが、その近くに巡礼団の宿泊所があるのがつねである。
シッキムでもっとも古く最初に建てられた僧院は、リンジン・ゲ・デムによって創設されたフングリである。神社は順次にタシディン、サンガ・チョリン、ペミオンチの導師リンポチェに捧げられた場所に建てられ、これらは後に次々と僧院の所在となったのである。ペミオンチ僧院は、独身で生まれながら形を変えないタ・ツァンすなわち純僧のために建てられたものであった。それは、今日も依然終生独身で、僧位最高の栄誉を保っている。シッキムでは、タ・ツァンという称号をもつのはこれらの僧院だけであって、そのラマ僧長は聖水で支配者をきよめる特別

ガントクにある酒屋、シッキムには酒屋が多く、特にシッキム・ラムはうまい▶

◀ガントク・ランポ間を走る乗合自動車

▼ガントクのメイン・ストリート

手で回せるようになっていて、回転し終わる毎に梶で鐘をたたいて知らす仕組になっている。

僧院には、二つの回廊で側面をかこまれて外陣を形づくっている二列の柱の立っている大広間がある。外陣の下の端には祭壇がある。その内部には明るい色をした本尊があり、その壁は聖人や悪魔の壁画でいちめん蔽われている。天井の梁は、蓮の花飾りや他の紋章の模様で赤くぬられている。

三つの大きな座像が祭壇を飾っている。この三つは、ラマ教の三位一体を示す三至宝である。仏陀であるシャカムニは中心に座を占め、その左に導師リンポチェ、その右側に慈悲の主たるチェンレジが座っている。シャカムニは青いちぢれた髪の毛で、黄色い色合いに塗られているが、それは二人のもっとも近い弟子の侍僧にかしずかれていることもある。導師リンポチェは、右手にドルジュという雷石(サンダーボード)を握っている。左手には、血の入った盃(カップ)として使われていた頭蓋骨がある。人の頭で飾られた三つ又のほこが左肩にかかっている。それに加えるに、彼はほとんどいつも二人の世話をする侍女(ミニスタリング・ワイフ)にかしずかれている。チェンレジ、すなわちラマ教の守護神という重要な役割を果たしている慈悲の主は、四つの腕をもち、前の両手は祈りで手を合わせているが、右上手は水晶の数珠をもち、左上手は蓮の花をもち、色は白い。

肖像画の組合せ工合は、どの寺院も同じというわけではない。たとえば、カルギュト寺では、カルマ派の亜流の開祖カルマ・バクシに特別な場所が与えられている。シッキムでよく見られるいま一つの肖像画はカンチェンのゾンガであるが、これは「大雪の五つのたまりまたは岩棚」と

首都ガントク

ラジャ、最近ではマハラジャといわれる藩王の居城でもある政府の所在地は、年が経つにつれて変わってきた。一六四〇年頃にさかのぼる最初の記録は、シッキムの西方にあるヨクサムにそれがあったとしている。その後一六七〇年頃には、そのさらに南東地方にあるラブデンツェに移ったのである。それから数年後には、シッキムの首都はふたたびまた峡谷の中心に近いトムロンに移されたが、それはラブデンツェが首都としては敵対するグルカ族にあまりに近いと考えられたからであった。安全ということは、支配者及びその政府の本部の立地条件中もっとも決定的な要素であった。支配者の夏期別荘はしばしば、チベットのチュンビ峡谷のほとりにあった。

一八九四年頃から、マハラジャ（今日その称号はチョギャル）の居城はガントクになったが、地理的にも、また外界との交流という点からも、中心部に当ったからである。中央行政官吏、首席閣僚（チーフ・セクレタリ）及びいろいろな政府機関の首長を包含する行政官庁は、ここに位し、また今日でもこの称号で呼ばれている政治官吏であるインド政治代表の公邸もここにある。

首都ガントクは、人口約一五、〇〇〇の絵のように美しい町である。それは山脈の中でもチョラ山脈の峨々たる突出部分の一つの南の尖端から伸びているところに位している。あまり遠く離れていない二つの丘の頂上に国王の宮殿とインド代表の公邸とがある。この丘から下の方へ下った二、三〇〇〇フィートのところに、バザールや市営住宅地帯がある。主要な国道はこの居住地域

いう意味の土地の守り神である。この神様は本来性善で、ものをぶちこわすのではなく大事に守ってくれるということで名高い。もう一つの狭くてむしろ急な階段で行かれる僧院の二階には、二番目に重要な肖像画がある。それはたいていゴンポすなわち大乗仏教の守護神の壁画で、それを恐ろしく感ずるのは、それが人間や虎の皮で衣装され、のたうちまわっている蛇や人間の頭蓋骨や骨で飾られているからである。またこうした壁画の中には、地獄の亡者たちが再生したり、恐ろしい虐待を受けたりする過程を示す輪廻の姿をあらわしているセパイ・コルロがある。

再生は、因果応報(カルマ)というインドの教えでも説かれているように、ラマ教によれば、信仰、呪文、儀式で善行を補うことができるにせよ、人の品行と行為によって決定されるものである。もし美徳が罪をうわまわれば、霊魂は神として再生する。もし日頃の行ないがあまりよくないと、その人は神以外の霊として再生し、ときには人間以下のものとなることとすらあるのである。罪の方が多くて堕落した人は再生のとき下級の方に落ちて、動物や幽霊となり、もっとも悪い者は灼熱の地獄か氷寒の地獄かのどちらかに落ちこむことになる。その裁決は、「死の王」ときには「宗教王(リリジャス・キング)」といわれる王によって下される。

ほかにも多くの捧げ物が祭壇におかれる。たとえば、下の棚には、米、菓子、花や聖燈の捧げ物がある。上の棚には、楽器や儀式の道具などがおかれている。寺の燈は短い脚台の上に立っている。綿糸の燈心は、点火される受軸の真中におかれ、溶けた乳酪(バタ)でしめされている。点火された火皿の数は、その寺の富と信者の数を表示する指標である。

ることは決してなく、夏の最高気温も摂氏二四度をこえることはない。雨量は隣接地域に較べて多量で年約三五五ミリである。十一月から二月にいたる冬季は、全く快適なもので、寒くて乾燥していても太陽はさんさんとしていて、爽快である。

このような変化に富んだ気候なので、ガントクは植物群が豊富で、実に比類なく名状し難い草木の群がある。花の咲く木、灌木しゃくなげ、もくれん、アカシア、竹などだけでなく、変わった種類のしだなどがたくさんあるのである。何百種類の野生の蘭の花が田舎道や聖所に咲き乱れ、そのほか野生の花が一年中見られるが、それは熱帯植物と温帯植物の両方なのである。あまり多くの植物の種類があって確認も命名もされていないので、植物学者ならば誰でも、それに取り組んだら興味がつきないであろう。

宮殿も一群の高等裁判所を含む官庁の建物も、伝統的なシッキム・スタイルの建築でできている。そこにはまた、チベット学研究所すなわちチベット文献の図書館、博物館及びチベット学研究センターがある。ギャルモによって手がけられた手工業研究所(コテイジ・インダストリー)は、伝統的な芸術品、工芸品を教導製作することを奨励している。それからまた美しい色の手織毛布や木彫工芸品や陶器類を売っている露天市場(エンポリウム)もある。農場、牧場のほかに、竹のパルプの残りくずを使って、いろいろな用途に向けられる立派な耐久性のある紙を作っている工場もある。学校は四種類あり、その一つは大学志望コース向けの小学校で、そのほかにいくつかの小学教育機関もあるし、病院が一つ、臨床医院一つと薬剤店がいくつかある。

を抜けて北方へ通じているが、ここに個人が建てた家屋から成る居住地帯がある。この国道からまた道路はジグザクになって急な坂を上ってバザールに至っている。もし五〇〇フィートほど下の方に下って、二マイルほど道路を行くと、新しく建てられた兵営にぶつかる。

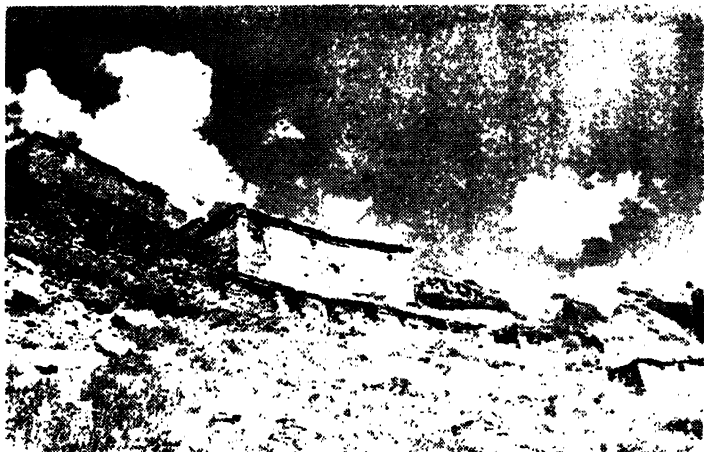
日曜日は毎週立つ市場の日で、お祭のように活気のあるバザールがひしめいている。めいめい色とりどりな着物を着て伝統的な衣装をつけ、イアリングやネックレスやお守りで飾りをつけた男女が、近隣村落から農産物をガントクへもってくる。売買の仕事が通常午後過ぎまでつづいて、これが終わると、村の踊りが始まる。バザールや脇道のいつも開いている小さな店は、多くはインド製の日常品を売っている。

舗装された国道は、ガントクとほとんど人口が同じの町ランポまで続いているが、ここはシッキムと北ベンガルとの境界に接しているところである。首都ガントクはこの町から二六マイル離れている。ガントクを越えて、国道は六三マイル続いて、北部ラチェンとラチュンに通ずるチュンタンに達する。東の方には、別の国道が、二二マイルはなれたカルポナン、チャンギュ、ナトゥ峠へうねりながら通じている。海抜一四、七〇〇フィートの高さの峠であるナトゥ峠は、チベットのチュンビ峡谷への主要関門である。これを越えると小さな間隙だが、道路はヤツン、ギャンツェを経て遂にはチベットのラサに至るのである。

ガントクは標高五、五〇〇フィートのところに位し、六月から九月にかけ三、四カ月モンスーンがつづくのを除けば、体によいさわやかな山の気候の土地である。冬の最低気温は氷点下に下

第二章　前　史

伝説によれば、ニンマ派すなわち仏教赤帽派の三ラマ僧が、幾多の遍歴を経てカンチェンジュンガ山の側にあるシッキムのヨクサム峡谷で、どうして落ち合ったかの由来が物語られている。ここから、三僧は、当時ガントクに居を構えていた勢力のあるブティア族のプンチョ（またはペンチョ）・ナムギャルという名前のシッキム王の先祖を探しにやったのである。プンチョ・ナムギャルは、北インドで今日ヒマチャル・プラデシュと呼ばれる支配者でかつてあった藩王インドラボディから出た子孫であったとされている。この王朝の伝統によれば、キエ・ブム・サルというチベットの英雄にまた関係があったとされている。プンチョ・ナムギャルは、一六〇四年に生まれ、一六四二年にチョギャル（ダルマ・ラジャ）の称号を受け、程なくデンジョン・ギャルポとして知られるようになった。彼は数年でその国全土に蔓(はびこ)っていた小部族の指導者格の族長(チーフテン)を平定し、今日のシッキムの何倍もある広大な地域を支配したのである。その権威はチベットのファリを越えたタンラの北まで及び、東は、ブータンのパロ近くのタゴン峠に、南は、インドの

ガントクの下方へ約四、〇〇〇フィート下りると、ロンネック川が北方からひな台状に耕された庭がついたすばらしい谷間を通って貫流している。それはティスタ川のたくさんある支流の一つである。天気のいい晴れた日には、この谷間越しに眺められる自然の絶景、雪をいただいたヒマラヤ山脈の連峰すなわち、ナルシン、カブルー、それに標高二八、一六八フィートの塔のようなカンチェンジュンガ山がシムヴ、シニオルチェ山を従えて聳え立っている。ガントク周辺の自然の美は、崇高そのものである。

辺境ブティアの家々（屋根の上に呪文幟が見える）

ブティア族の一家、辺境地帯の近くに住んでおり、その生活はいたって貧しい

ビハールとベンガルの境界近くのティタリアに及んだのであった。それはまた西は、ネパールのティマル川の岸にあるティマル・チョルテン地方をも治めたのである。彼はその後中央集権を確立して、全域を一二ゾン（県）に分け、その各県に知事たるレプチャ・ゾンポンをおいた。彼は一二人の大臣から成る委員会を組織した。ブンチョ・ナムギャルは、ヨクサムをその首都に選んだ。

この支配者は、一六四四年に生まれ、一六七〇年にあとを継いだテンスン・ナムギャルというひとり息子があった。テンスン・ナムギャルは首都をラブデンツェに移した。テンスンは三回結婚した。最初の妻は一人娘のできたヌンベ・オングムというチベット人であった。その娘ペンデ・オングムは、シッキムの歴史で重要なしかし悲惨な役割を演ずる運命にあったのである。二番目の妻はデバサム・セルパというシッキム人で、チャクドルという一人息子があった。三回目の結婚は、リンブ・ラジャの娘とした。このリンブ族の王女と結ばれてシャルンゴ・グルという王子とペンデ・シェリン・ジェムという娘との二人の子供を儲けた。その統治は夫婦の統治だといわれたが、とにかく泰平無事であった。

その母はシッキム人であったテンスンの息子、チャクドル・ナムギャルは、一六八六年に生まれた。彼が一七〇〇年頃支配者として父のあとを継いだのは、年わずか一四のときであった。彼と王位を継承する権利があると考えていた姉のペンデ・オングムとの間に争いが起こった。そこで彼女は、弟を放逐するため、ブータン兵を傭ってシッキムに侵入させたのである。藩王顧問の

る。チベットのラマ、ジグメ・パオは一時摂政となった。

暗殺された藩王チャクドル・ナムギャルは、チベット人と結婚していたが、一七〇七年にギュルメド王子が生れた。ギュルメドは、ミンドリンからきた僧院長の娘のチベット人と結婚した。昔話によると、彼女は容姿頗る上らなかったので、彼は彼女を残してデ・チェンリン僧院に隠遁し、ただ一人になってしまったという。その国のいさかいは、さらにつづいて、リンブアナが失われてシッキムの統治から離れてしまい、後にそれはネパールの領土に合併されてしまうのである。休む暇もない支配者ギュルメドは、宗教托鉢僧に身をかくして日を送ったのである。彼はチベットへ巡礼に旅立ち、結局シッキムに帰ったが、その行動は常軌を逸するようになってしまっていたのである。というのは、その間に最初の妻はチベットに逃げていってしまったが、二度と妻を娶ることを拒んだのである。この頑として独身をつづけることは、宮廷とその部下にとって大きな心配の種であった。なぜならば王位に直系の後継がなくなるからであった。

一七三四年に、藩王ギュルメドは重病にかかり、その死の床でその後継を指名するようにいわれたとき、サンガ・チョリンにいる尼僧の名前を告げ、その尼は子供を宿しており、生まれたならばナムギャル・プンチョ（一名ペンチョ）と名づけられるといったのである。これは一七三三年に実際起こったことであるが、しかしそれはシッキムの争いの種をつくったのである。ゾンポン（知事）の一人は、カジ族から伝統的に選ばれることになっていたが、そのチャンゾォド・タムディンは、その尼僧の子孫を正統と認めることを拒んだ。彼は自ら藩王となったのである。タ

ユグチン・テシュは、支配者チャクドルをたすけにきて、当時は西シッキムの一部で今日では東ネパールにあるエラムとワロン経由でチャクドルを牛車にのせてラサへ連れてきたのである。ラサでは、この若いチャクドルは仏教学とチベット文献研究で名高くなった。とうとう彼は、第六代ラマのお気に入りの公式の占星家となった。この功績によって、ダライ・ラマは彼に中央チベットに封土を与えたのであるが、順々にその後継者に受けつがれ、一八世紀の末までひきつづきその封土となったのである。チベットは、ネパールとの戦争で混乱時代がつづいた間に、ツグフド・ナムギャルの少数派統治の時代、この封土を再び手に入れた。

しかしながら、その間にブータン軍は侵略に成功し、ラブデンツェの宮殿を占領して、八年間も放さなかったのである。一七〇七年頃、第六代ダライ・ラマの薨去と共に、チャクドル・ナムギャルは、早々にジグメ・パオというチベット・ラマに伴われて、シッキムに帰ってきた。彼が帰ってくると、ブータン兵は撤退し、ティスタ川の西部のシッキムから引揚げたが、いぜんとしてドムソン要塞は確保していた。これは後になっても遂にふたたび戻らなかったという点で、シッキムにとってとり返しのつかない損失であった。

弟姉の間のはげしい争いはひきつづいて、一七一七年頃、ララン温泉に滞在中、チャクドルが暗殺された危機にまでなったのである。チベットの医者は、大胆にも彼の主動脈を切開して出血により死に至らしめたのである。藩王を支持する兵士達はナムチに送られ、かの医者は処刑され、その姉ペンデ・オングムは絹の襟巻で首をしめられ、その死体は焼かれてしまったのであ

ルカ族は西シッキムのエラムとトプゾンを占領し、さらに、その地域を前進しつづけたのである。

ナムギャル・プンチョは三回結婚した。その三番目の夫人デバ・シャムシェド・キティ・プクパは、一七六九年頃テンジン・ナムギャルと名づけられた男子を生んだ。テンジン王子は、一七八〇年父の後をついで王位についた。彼は忠義なレプチャの指導者であるチャンゾォド・カルワンの娘アンヨ・ギェルムと結婚した。その子息ツグフド・ナムギャルは、一七八五年に生まれた。断続的な戦争は、まずはじめのはグルカ族との戦い、次にはブータン族との戦いとやむことがなかった。チャンゾォド・カルワンの子息、チャンゾォド・チョトゥプは、この数年の間に有能な軍事指導者たる術を修得して、その仲間のデバ・タカルポと力を合せて、グルカ族をエラムから追い出したのである。このシッキム軍は、ネパールのチャインポレあたりまで進出したのである。しかし、それから運が向かず、一七八七年頃ビルンジォン近辺の戦いで敗れ、デバ・タカルポは殺され、チャンゾォド・チョトゥプは退却を余儀なくされたのである。

それからさらに激しい戦闘はしばらくつづかなかったが、シッキム軍は、はかない安全感に甘んじていたのである。一七八八年から八九年にかけて突然に、グルカ族の将軍ジハル・シンが軍を率いてシッキムに越境してきて、あっという間に、首都ラブデンツェを占領してしまった。藩王テンジンとその息子はラブデンツェから逃れてチベットのラサに至り、たすけを求めた。その間に、チャンゾォド・チョトゥプとその忠義な郎党は、グルカ族の侵入軍を追い散らし追い返す

ムディンは数年間統治したが、結局レプチャがギュルメドの忠実な支持者であるチャンゾォド・カルワンの指揮下に、尼僧の子プンチョに味方して決起し、自ら即位した藩王であるタムディンをしてラサに走らせ、チベットにふたたび支配者として再任されるように援けを求めるに至らせたのである。

チベット人はその使臣ラブデン・シャルパを遣して、プンチョとタムディンとの間の紛争を調査させた。彼はシッキムに着き、数年間自らは摂政の地位に立ったといわれている。しかしながら、彼は遂にプンチョを正として宣言し、彼が藩王の正統な後継者として王位に正式につくのを見届けてから、チベットに帰ったのである。

ナムギャル・プンチョの治世中、幾多の紛争が相次いで起こった。ブータンのデブ・ラジャはその国の南東に住んでいるマンガル族と共謀してシッキム侵入を企てたのである。その侵入は成功しなかったが、しかし、マンガル族のシッキムに対する忠誠心は失われてしまった。一七五二年の頃、ツォン族の叛乱が起こったが、その騒ぎはチャンゾォド・カルワンによって鎮圧されてしまった。その次にはネパールの藩王プリティビナラヤン・シャーが、暫時シッキムの叛乱的要素を支持するに至って、グルカ族の叛乱が新しい脅威となった。ブータン兵はシッキムに二度侵入したが、東シッキムのレーツクにおける交渉の結果、現在の国境まで退いた。ネパールとの条約はまた一七七五年に締結され、サンゴ川、サンディ・ゾン、マリーヤンとラ川を結ぶネパール・シッキム国境線を相互に同意して確定した。この条約はグルカ族には遵守されないで破られ、グ

第三章　一九世紀

一九世紀の前期、インドの政治情勢は全面的な変化を遂げた。インドを制圧するや、英国勢力は虎視たんたんヒマラヤを越えてチベットのラサに至り、陸路貿易ルートを開こうとする衝動にかられ、それから中国の北京に向かうという野心に燃えていたのであった。シッキムもまた、英国の戦略とその政治工作の一部に好むと好まざるとにかかわらず、かかわりをもたざるをえなかった。他方、シッキムの伝統的な役割は、今まで通りチベットと中国との間の動きに介入することであった。

一七九一年、ネパールのグルカ族は、チベットと戦いを交え、タシ・ラマの居城タシルンポを奪取した。その翌年、ネパール軍はカトマンズ近くで敗れ、不名誉な条約を受け入れるのを余儀なくされた。この条約は、ネパールとの国境線がティスタ川の左岸に向けられていたから、シッキムに有利であるわけはなかった。数年の間、一八一五年までペミオンチと南ティスタ流域の住民はネパールに貢物を捧げねばならなかった。この時代に、チベットはまたほとんど一世紀前に

のに成功した。藩王テンジンは一七九三年ラサで死んだ。チベット政府は、その年若い王子シグフド・ナムギャルをシッキムに送り返した。シグフド・ナムギャルは首都ラブデンツェに帰還した。

▲ラマ教寺院の代表的な塔

◀ラマ教の貧しい芸人僧（後に立っているのはブティアの女）

第六代ダライ・ラマによってチャクドル・ナムギャルに譲渡された中央チベットの封土を奪回した。

シッキムはまた一八一四―一五年の英国とネパールとの戦争に介入し、この紛争では英国に味方して参加した。西のナグリ・ゾンは一八一四年頃英軍によって奪還され、一八一五年には、グルカ族は南西シッキムの各地から追い出された。一八一七年結ばれたチタリア条約では、シッキムとネパールとの間の国境線は、マハヌディ川とミチ川及びシンガリラ山脈沿いに決められた。ヒマラヤ山脈の南麓のテライの一部は、そのときシッキムの国王に戻された。

ネパールとは頻繁に戦いがあり、首都ラブデンツェがネパール国境に近寄りすぎていて不安なことは、藩王ツグフドに、政府所在地をトムロンに移す決心をさせた。藩王ツグフドとその首相チャンゾォド・ボレクとの間の抗争が起こったが、これは一八二六年に首相とその家族の暗殺という形で悲劇的な終わりを告げた。ボレクの忠実な支持者たるコタパは、シッキムから逃れてネパールに庇護を求めた。このさわぎのあとにひきつづいて、シッキムとネパールの間に紛争が起きた。今度はインドの英国政府がこの事件をよく知っていて、一八二八年この紛争の事実を審査し報告するために、将校のロイド大尉が派遣されてきたのである。この当時、英国人はダージリンに役人の保養地として目をつけていたので、この紛争終結のための交渉が始まった。しかしながら、そのけりがついたのは、ネパール人に支持されたコタパ族がシッキムのテライに侵入したのを防ぐため、英国の援助が求められたときの一八三四年から三五年にかけてであった。一八三

いられるようになったのである。

ツグフド・ナムギャルの治世は、一七九三年からほとんど七〇年もつづいて、シッキム史上もっとも長くつづいたものであった。彼は五度結婚した。その二度目と三度目の夫人は、チベットのタシ・ラマの姉妹であった。その第一王子で長生きしたシドゥケオンは、一八一九年二番目の夫人から生まれたものであった。メンチといわれた五番目の夫人はまた、トトゥブ・ナムギャルと名づけられた王子を生んだ。何はともあれ、シドゥケオンは一八六一年、国王となったが、その父の方は二年後にチュンビで死んでしまった。一八五〇年に打ち切られていた年六、〇〇〇ルピーの支払いは一八六二年に再開され、その支払いは国王シドゥケオンに対してなされたが、その額は後になって英国配慮のジェスチュアとして増額された。総じて自分の国の統治には無関心であったけれども、国王シドゥケオンは英国と友好関係を維持増進することに努め、その努力はある程度酬いられたのである。一八七三年彼は、当時ダージリンに在ったベンガル副総督のサー・ジョージ・キャムベルを友好訪問した。

国王シドゥケオンは一八七四年四月に死に、その第五番の夫人から生まれた腹ちがいの弟ツトブが支配者となった。

このあたりで、一九世紀の初めにシッキムの人口を構成していた種々の人民についてある程度の概念をもっておくことはむだではあるまい。一八九一年の人口調査では、全人口三万ということになっている。その三分の一は、レプチャ族とブティア族であり、その残りが、リムブ、グル

五年付でツグフド・ナムギャルによってダージリン譲渡許可証書が英国に与えられた（付録Ⅱを参照）。一八四一年以後、英国側はダージリン割譲に対する補償のしるしとして、藩王ツグフド・ナムギャルに年々三、〇〇〇ルピー（後に六、〇〇〇ルピーまで増額）支払うことを申し出た。

ダージリンの割譲は、その後ダージリンの監査官とシッキムの首相ナムガイの間にいさかいを招いたが、それは英国臣民が人質にとられて隷従させられたからだということであって、犯人を逮捕し引渡すために補助金はしばしばとめられたのであった。一八四九年、ダージリン監査官のキャムベル博士と、インドの英国総督府付の著名な植物学者フッカー博士とが、シッキム旅行中に突如シッキム官憲により捕えられ、捕囚の身にされた。英国が最後通牒をつきつけた結果、シッキムは二人の捕虜をその年の一二月に釈放したが、その後一八五〇年二月懲しめのため英軍はランギット川を渡ってシッキムに入った。この派遣軍はさまざまの処罰を要求した。たとえば補償金六、〇〇〇ルピーの打ち切り、ナムガイ首相の解任要求、シッキム・テライ及び北方はルマン川、東はランギット川及びティスタ川、西はネパール国境により境界線を画したシッキム丘陵の部分の併合などであった。つづいていま一つの派遣軍は一八六一年に出され、そのときシッキムは英国が提示した条件を受け入れることを余儀なくされたのである。二三条から成る条約の細目は、英国の特使アシュレー・イーデン卿と王子シドゥケオン・ナムギャルにより一八六一年三月二八日に実施されたのである（付録Ⅲを参照）。藩王ツグフド・ナムギャルはチュンビにいて、シッキムに帰ることを断った。ちょうどこの頃、マハラジャ（国王）の称号がシッキムの支配者のために用

し、ふたたびシッキムを訪れ感謝のあかしとしてレプチャ族とブータンとの不変の友情を誓った）。テコン・テクは、天孫から直接流れをひいた第六代目だということであった。五、六世紀後に、テコン・テクの子孫の一人は、藩王テンスン・ナムギャル下の指導的なレプチャ族の管掌者（ミニスター）になった。他の同じく頭角をあらわしたレプチャ族は、ナムギャル・プンチョの忠実な支持者であるチャンゾォド・カルワンである。アンヨ・ギェルムという名前のその娘の一人は、藩王テンジン・ナムギャルと結婚したが、それはツグフド・ナムギャルの母であった。他のレプチャ数家族は、タルン川の両岸とその近くに住んでその名前を住みついた場所からとったのである。レプチャ族は、その土地を耕したが、時が経つにつれて、ブータンやネパールから入りこんできた移住者にはみ出されてその大部分の土地を失ってしまった。レプチャ族は正直な平和好きで人柄のいい人民である。しかしその小心で、はにかみやで、あどけなく、自分たちだけで固まろうとする傾向があることは、後から入ってきた移住民に対していい結果にならなかった。

　リンブ族の起源は、カシ（バナラス）から祖先は出ているといわれているけれども、はっきりしない。リンブとは、ネパール人によってつけられた名前であるが、自分達ではヤクツンバ（ヤクの牧人）と呼んでいる。レプチャ族やブティア族は彼らをツォンと呼ぶが、商人という意味である。リンブ族は、牛を主に売買していたので、その当時の商人であったといってよい。アルンとカンカエの間の田舎の地方は、はじめ自分達の首長をもっていたリンブ族が住んでいた。グルカ族は、自分の方から従属した代わりに特殊権益を保有したので、平和好きなリンブ族を征服し

ン、ムルミ、ライ、カムブ及びマンガル族とその他少数グループであった。一般的にいって、人口には三大分布があるといわれよう。

その一つは、最古でおそらく原始住民たるレプチャ族またはロンパ族。

次に重要なのは、普通ブティア族と呼ばれ、チベット地方カムからの移民であるカムパ族。

第三には、ツァンポの南、チベット地方ツォンの各地、シガツエ、ペナム、ノルブ、キオンツエ、サンドゥブリン、ギャンツェなどからシッキムに移住してきたと信じられているラサ・ゴトラに属しているグルング、ムルミ族などと同盟していたリンブ族。

シッキムの支配者である王朝は、第二のグループに属している。その祖先は、伝説的なチベットの英雄たるキエ・ブム・サルであった。彼の後裔の合計六つの親類はこの出所が同じである。他のカムパ族は、正確には一時期「八つそれぞれの名前」があるという種族として知られている八家族から成り立っている。シッキムにいる総計この一四家族は、すべてもとがチベットの家族であった。後になると何度か、もっといろいろのチベット系の家族がシッキムに入ってくることになった。

レプチャ族の中で有名なのは、テコン・テクで、キエ・ブム・サルの伝説的なシッキム訪問の当時の古代レプチャの首長である（伝説では、キエ・ブム・サルは彼の息子の誕生を祈ってもらうため、レプチャ教祖と魔法使いのテコン・テクを探しにシッキムを実際に訪れたとされている。そして実際に息子が誕生

チャンゾォド・カルポは一八七九年に死に、ラニ・ペンディンは一八八〇年に死んだ。この二人が死んで、この国の権力はラニ・メンチとデワン(首相)のナムガイ(その間にラニの庶出娘と結婚)とに渡った。このデワンは、実に三〇年前に英当局が放逐を要求した人物である。長い間チュンビに在住し、チベット官憲と親密になったために、ラニとデワンは自然にチベットびいきになったようである。彼等は、何としてもチャンゾォド・カルポによってラニ・メンチの息子ティンレイが相続するようにさせたいとしたのである。

ティンレイの人気と勢力は高まって、彼は国王トトゥブにチュンビへ行くように説き、ダライ・ラマの大臣であるシャペ・ラムパに敬意を表させようとしたのである。そのうちに、英当局は、チベットとの貿易に熱を入れて、マッコーレー使節団(一八八六年、ベンガル財政事務官コルマン・マッコーレーによって支配された)を送ったが、その途次シッキムに入ったのである。チベットに関する英国使節団にチベットは喜ぶどころか、かえってシッキムに侵入して、国境近くのルングトゥに要塞をつくることの前ぶれとして考えたのである。マッコーレー使節団は事実上チベットの感情を考慮して差控えたのであるが、英国の陰謀に嫌気がさしたトトゥブは、チュンビに居残りつづけて、シッキムに帰るようにという英国の勧告をまったく無視したのである。英国側の報復措置は、一八六一年の条約による補助金をやめるという処罰を課すことであった。

国王は、ガリンで行なわれたチベット人との協定を締結して後に一八八七年一二月チュンビから帰国した。一八八八年三月、英国遠征隊は、チベット人が地盤をつくっていたルントゥでチベ

なければならなかったわけではない。

他の種族には、数は少ないけれども、ネワル族があるが、これは仕事好きで勢力があるので有名である。グルン族は多くはシッキムの西部に住み、マンガル族は、カンパ・チェンとタムール峡谷にその家をつくっていた。しかし、彼らはその敵手シェルパ・ブティア族によってその谷間から追い出されてしまったのである。

さて今度は、シッキムの支配者のところに戻ることにしよう。トトゥブ・ナムギャルは一八六〇年に生れた。彼は一八七四年に国王になり、腹ちがい兄弟の末亡人ペンディンという婦人と結婚した。彼女は一八八〇年に産褥中死んだが、トトゥブとの間に三人の子供を残した。その一人は娘で一八七六年に生れたナムギャル・ダモで、二人の王子は、一八七八年に生れた年上のツォダク・ナムギャルと、一八七九年生れた下のシドゥケオン・トゥルクとであった。彼は、ラサのラディン家から後妻を迎えた。彼女は一八九三年生れた男の子タシ・ナムギャルと、一八九七年生れた娘のチュニ・ワンモの母であった。

国王トトゥブ・ナムギャルは、即位して間もなくシッキムのネパール移民と問題をひき起こした。彼は、チャンゾォド・カルポ(国王ツグフドの歿後トトゥブの母マンチと結婚)をつけた使者団を当時のベンガル副総督アシュレー・イーデン卿のところへ送った。ネパール移民が居住を許される地域を限定した協定が出来たが、これはうまく行かず、一八八〇年レノックに騒乱が起こった。その後で二回目の決着が何とかうまくつけられ、問題は片づいたかに見えたのである。

ガントクのチベット研究所の中にある世界六宝を描いたチベット絵画▲

チベット研究所の建物▼

ット軍と相対したのである。その戦闘は結局同年九月に終わったのであるが、戦いに敗れたチベット軍はチュンビ峡谷に通ずる峠の一つであるジェレプ峠越えに退却せざるをえなかった。英国が積極的に介入したシッキム・チベット間の戦闘の解決は、しかしながら一八九〇年三月カルカッタで調印された英支条約が成立してはじめてなされたのである（付録Ⅳを参照）。チベットと中国とは、共にシッキムに対する英国の保護権を承認した。それと同時に、英国、チベット、中国は分水嶺を形作っている山脈の頂上線をシッキム・チベット国境画定線として受諾したのである。シッキムは、かつて長い年月の間、支配者が夏期別邸を営んでいたチュンビ峡谷に対して何の権利ももたなくなった。一八九三年一二月、一八九〇年の約定に対する議定書が結ばれ、貿易、交通、牧畜に関して規定がなされた（付録Ⅴを参照）。この議定書は、特にチベット側国境にあるヤツンの貿易市場、一八九四年に開かれるはずの市場を開設することを定めている。

国王トトゥブ・ナムギャルは、このときちょうど、一八八九年にシッキムの英国政治代表に任命され、事実上の支配権限をもつクロード・ホワイトの監視統制下にあった。しばらくの間、国王と王妃（マハラン）は、シッキムの少し外にある北ベンガルのカリンポンにとどまることを余儀なくされていた。トトゥブの治世はつづいたが、乱れがちで安まる暇がなかった。数カ月の抑留の後にカリンポンを離れることを許されたトトゥブは、はじめて一八九五年いっぱい、ダージリンにとどまるように制限されていることを知ったのである。英国のシッキムに対する態度は、一九〇四年ヤングハズバンド遠征隊がラサに至って、その成功のために必要なのは友好的で中立的

ある。シッキムにおいては、インドと同様に、ヒンズー教が明らかに仏教を追い出すだろうし、ラマ教の祈禱力もバラモンの犠牲的な道具立てにはかなわないだろう。土地は信仰に従うものである。チベットの地主もしだいにとりあげられることになるであろうし、チベット人が望んでやまない小貿易にひきずられて行くことになるだろう。

アジア大陸の原動力である人種と宗教は、われわれのやり方でシッキムの難関を乗りこえさせてくれるであろう。こういう諸原因がチベットやネパールの干渉によって不自然に妨げられないように、われわれはただ見守っていさえすればよいのである。

一八九四年のシッキム官報で発表された行政報告は、その先見と理解とを欠いたために、後になってみると、あまり大きな影響も価値ももっていなかったということが判る。実際、シッキムには、仏教とヒンズー教の二宗教が宗教的信仰としては別個に独立しているが、他方また調和された形で存在しているので、この二宗教の間で対立抗争はほとんどなかったのである。それからまた、シッキムの混り合った人口構成についてみても、ある地方で国家統制要素、すなわち農業地帯の政府所有ということをとってみても、この国の人口は多種の集団から成り立っているにせよ、自然的に釣り合いがとれているといっても間違いないと思われる。

なシッキムであることが明らかになったときになって、はじめてその変化を見たのである。一九〇五年になり漸く国王トトゥブが支配者としての権威を確立したが、それは、彼が当時のプリンス・オブ・ウェールズに謁見のためカルカッタに招かれた後のことであった。その後一九〇六年、シッキム国政に重大な変化が起こったのは、シッキムの国事に対する統制権がベンガル政府からインド政府に移されたときであった。

国王トトゥブの治政は、一九一四年その王子シドゥケオン・トゥルクが権限を譲り受けたときまでひきつづいた。

一寸の間、筆者は読者に、一八九四年に、すなわち英国の行政官がベンガル政府に、シッキムの将来について自ら要約した文書を送ったときのことに立ち戻るのを許していただきたいと思う。彼は次のように述べている。

何よりもまず、シッキムの人口構成に感ぜられないくらいじょじょに起こっている変化によって、われわれの地歩は強化されるであろう。すでに述べたレプチャ族は、急速に衰退している。一方西からは勤勉なネパールのネワル族とグルカ族とが、いまだ占領されていない広大な地域を開拓し耕作するために進出してきているが、ここをダージリンのヨーロッパ茶栽培業者がすでに目をつけていたのである。このチベットの宿敵が伸張してくることは、チベット勢力の復活に対するもっとも確実な安全保障である。ここでまた、宗教が指導的役割を演ずるので

どこを見ても混沌たる有様だった。収税制度も何もなかった。国王は欲しいと思ったものは何でも人民からとりあげ、首都の近くにいる者は大部分を貢がねばならなかったし、他方遠くはなれている者は国王の名で地方役人から税をとりたてられたが、そこまでは届いたのはわずかなものでしかなかった。裁判所などもなかったし、警察も、公共施設も、若い者のための教育機関もなかった。自分の前に課せられた仕事は大変なものだったが、しかし大いにやりがいがあった。この国は新しい国で、すべてのものが私の手中にあった。

ホワイトのガントクにおける在任中、その国のことを叙述した言葉は、やや大げさではあるが、クロード・ホワイトのいったことは部分的に信用してよい。彼は真剣に努力し、その力添えでシッキムは原始的な封建国家から相当能率のある国家に進歩したのである。

国王トトゥブの子息、シドゥケオン・ナムギャル王子は一九一四年二月に、ガディ（ヒンズー語の王位）の位をついだが、後年かなりやれると思われていたほどにまで長つづきしなかった。その年の一二月彼は病気にかかり、ベンガルから派遣された英国医が看病を命ぜられたが、その当時の記録によれば患者に「ブランデーを多量にのませる」やり方で治療しようとした。シドゥケオンはそのときたくさんの厚い毛皮や毛布にくるまれていた。どうみても、彼の急死は、心臓発作と診断される。それは、一時間で死亡と記録されているからである。シドゥケオン・ナムギ

第四章　最近五、六〇年の時期

英国がシッキムに積極的で実際に勢力を振うようになったのは、一八八九年に英国の総督代理公館がジョン・クロード・ホワイト代表の下にガントクにたてられたときにはじまる。皮肉なことに、これは英支関係が小康状態にあったときにできたのである。このことを英支関係における「いみじくも波風立たない（マスターリー・インナクティヴィティ）」時代と評した論者がある位である。一八七九年、英国は、インド・チベット貿易を促進するためにラサへの旅行を容易にする目的で、実際にジェレプ峠への舗装してない道路を完成したのである。一八八一年当時には、東ベンガル鉄道の支線は、シッキムに向かっている北ベンガルの起点であるシリグリからダージリンまで延びていた。この国で最初の英国学校は一九〇六年ガントクに開設された。一九〇五年支配者、国王トトゥブ・ナムギャルは、統治権を再委託されていたとはいえ、ガントクの英国駐在官がほとんどのことについて監督を怠らなかった。その監督は事実上永年続いたのであった。

最初の英国政治代表ジョン・クロード・ホワイトはこの時代のことを次のように述べている。

した。その中の一つは、一九一六年に独立した裁判官の下に設立された裁判所である。この措置は、行政と司法を、地主でもあり行政長官でもあったカジスが一手におさめていた古い慣習をやめさせたのである。一九五三年には、裁判制度は、インドの民法と刑法とに範をとった裁判手続きがとり入れられて、一層よくなった。一九五五年、完全に一人立ちの最高裁判所が法で設立された。タシ・ナムギャルの治世中、社会改革がいくつか公布された。労役すなわち強制労働は廃止され、土地改革は導入され、課税制度は最新式になった。さまざまな異なった政見をもった政党制度がはじまったのもまた彼の治政に帰せられる。啓蒙時代は、インドが徹底的な建設的な変化をなしつつあるときと時を同じくして訪れたのである。すなわち、英国勢力が撤収して一九四七年にインドが世界に独立国家として出現したことは、シッキムにも根本的な影響をもたらした進運であった。

一九四六年五月、インド総督ウェイヴェル卿は、英国政府を代表して、新インド憲法に基づき、英国はインド国に関する最高権限を行使することをやめるということを声明した。この声明には次のように記されている。

該国と英国王並びに英領インドとの間の政治とりきめは、最後を告げる。空白は、承継国家又は英領インドとの連邦関係に入った国家によってみたさるべく、これが失敗した場合には、該国または双方と政治的とりきめに入ることによってみたされるであろう。

ャルは、シッキムの行政に与って力あった。一九〇八年オックスフォードの教育を受けた後、シッキムに帰国してからのことであるが、その短い生涯で、彼は既得権をもとにとりたてる収奪するやり方をなくそうとした。彼はまた僧院に新しい生活を導入し、その役割に新しい重要性を認めて、仏教徒を統合することに努めた。不幸なことに、国王シドゥケオンは、その建設的努力が実を結ぶときまで生き長らえなかった。

シドゥケオン・ナムギャルの後継者に移る前に、いま一つの特別な事件がシッキムに非常に重要であることが判明したのである。一九一四年、英、支、チベットの代表によって調印されたシムラ協定は、一八九〇年の英支協定で規定されたところに従ってシッキムの北部国境の画定を批准したのである。

シドゥケオンの異母兄弟であるタシ・ナムギャルが一九一四年彼の後をつぎ、しばらくの間、その時の英国政府代表であったチャールス・ベルの後見を受けた。完全な権限は、一九一八年四月正式に国王になったとき、新しい継承者に与えられた。このときまでは、多くの事件で国王とカジス（地主・庄屋）の委員会が相談に与ったとはいえ、国家行政は大幅に英国政府代表に任せられていたのである。タシ・ナムギャルは、チベット軍の将軍であったラカシャル・デポンの娘クンザン・デシェンと一九一八年一〇月に結婚した。彼女の母方はといえば、チベットの前首相でいまは亡きロンチェン・ショカンの孫娘であった。

五〇年に及ぶ彼の長い治世の間に、タシ・ナムギャルは、数多くの社会的、経済的改革を導入

辺境の村にあるチョルテン内部壁画（ホン教信仰の形跡がうかかえる怪神の歓喜天）▶

◀原始的形態のチョルテン（中間に絵馬のようなものが見える）

◀左側に見えるのがメンダン（脇を通る時は左側を通る，この写真の女性ポーターはブティア人）

シッキムは、一九三五年のインド憲法下の一インド国家として、この新宣言の条項に規制されていた。マハラジャクマール（今日のチョギャル）であるパルデン・トンドゥプ・ナムギャルが代表となり国王の私的秘書としてのライ・バハドゥル・T・D・デンサパを補佐とする正式使節団が、インドの数百の王侯国を代表する団体である王侯委員会と新インド政府と討議するためデリーを訪問した。

インド政府並びに新独立国インドの憲法を起草するために設立された制定会議は、その双方ともが、ここにシッキムが特殊な地位にあることを一般的に承認したのである。一九四七年一月二二日制定議会は、当時総督執行委員会の副議長であったパンディット・ジャワハルラル・ネルーによって提議された決議を承認したが、それは次のような内容であった。

一九四六年一二月二一日の決議によって成立した委員会（王侯委員会によって設置された交渉委員会と特殊目的のためにインド国家代表と交渉するためのもの）は、さらにブータンとシッキムの特別な問題を検討し、またその検討の結果を報告する目的のために委員会が適任と考えるような人物と会談する権利をもつと本会議は決議する。

この決議によってシッキムに対し与えられた支持に力を得て、シッキム代表団は、ある特別事

明されている。内政に関していえば、同国は行政、法、秩序の維持に対して、インド政府の最終的責任を受けながら自治（オートノミー）を享有しつづけるであろう。

この二国間の将来の政治的関係に関する重要な問題について、シッキム代表団とインド政府との間に交渉が進捗している間に、シッキム国内の政情展開は、法と秩序のみならず国の安定に重大な脅威となったのである。

新しく独立したインドの共和国政府の出現は、シッキムのさまざまな政治党派の野望を高めることになった。三つの政党はすでに以前からあったし、事実一九四七年にはすでに存在していた。タシ・ツェリンの指導下のシッキム・ステート・コングレス党は、ネパール人勢力が圧倒的な党であった。次には、ギャルツェン・ツェリンその後ソナム・ツェリンに率いられたシッキム・ナショナル党があり、いま一つの政党は、ダン・バハドゥル・テワリ・チェトリを議長とするプラジャ・サメラン党であった。これらの政党の目的は、とりわけ最初の二つの政党目的は著しく相異していて、実際に矛盾していたといって差支えない。

一九四七年、ステート・コングレス党は、インドへの連合加入を当然のこととして、ほぼ受け入れていた。それは、独立インド内の一国家として機能する責任ある国家の立場を肯定したのである。彼らはまた国家の社会経済構造上の変化を求めたのである。一方、シッキム・ナショナル党は、シッキムとインドにおける英国との間に多年存在した関係をもちつづけようとして敢然と

項はインド政府の責任であるという条約を結ぶに至った討議を続けたのである。両当事者が慎重に、しかも確実友好なやり方で話を続けるために、シッキム宮廷とインド政府との間に現状維持協定が結ばれることになった。一九四八年二月二七日に調印されたこの協定の条項にしたがって、「一九四七年八月一四日英国王とシッキム国家の間に存在した共通関心事項に関するすべての協定、関係、行政とりきめ」は、新協定、条約の締結にかかわりをもちつつ、インド連邦とシッキム宮廷との間に存続するものと思われたのである。このような「共通関心事項」は、個々にいえば、通貨、貨幣制度、関税、郵便方法と規則、電信交通、外交、防衛措置を包含していたのである。

宮廷とインド政府との間の最終の新条約のための交渉は友好裡にすすめられ、条約は国王タシ・ナムギャルとシッキム駐在インド行政官ハリシュワル・ダヤルとの間に一九五〇年一二月五日、ガントクで調印された（付録Ⅶを参照）。

シッキム代表団がインド政府と討議中の数カ月前、実際は一九五〇年三月二〇日、インド政府の外務省が出した新聞発表は、シッキムの将来の地位について次のような輪郭が示されている。

シッキムの地位に関しては、シッキムはインドの保護領として存続すべきことに意見の一致を見た。インド政府は、シッキムの外交、防衛、及び通信に関して責任をもつ。このことは、シッキムの安全保障とインドの安全保障とは同じようなもので、それは地理的事実によって証

適切な代表から成る政府をつくるべきであり、また、首相を任命し、課税制度の改正を含む他の変更を求めるというステート・コングレス党の要求が出された。宮廷がこの要求に応じなかったことは、サティアグラハ（非暴力非協力運動）で脅威されるに至った。政治状況はより混乱し困難を増し、当時の行政官ハリシュワル・ダヤルの示唆によってインド外務次官のB・V・ケスカル博士が調整して解決されるような了解に到達するのをたすけるためにシッキムを訪れることになったのである。

ケスカル博士は一九四九年五月ガントクに到着し、宮廷官僚、各政党、実業団体組織その他公共団体の代表に会見した。しかしなんら解決はなされず、政府は事実上解体してしまったのである。混乱を最小にとどめるために、国王は大臣制度を廃止し、首相が後を継ぎ国政の委託を受けるまでインド行政官を一時的な臨時総督に任命した。こうして、「人民内閣（ポピュラー・ミニストリ）」という野心的な試みは終わりを告げたのである。それはシッキムが形づくろうとしてやってみたこれまでただ一つのことであったのである。その存続期間は一九四九年五月九日から六月六日までという短いものであった。インド州総理（大臣）ジョン・ラルは国王により任命され、一九四九年八月一一日就任した。

同年七月、タシ・ツェリンを議長に戴くステート・コングレス党の代表団はデリーを訪れ、インド政府と率直な意見を交した。その代表団は空気を一新した。同代表団は、インド政府の唯一の願いはシッキムという国に安定した政府を確保することであり、かつまたいかなる場合でもイン

立ちあがったのである。第三党たるプラジャ・サメラン党は、シッキムのインド合併ないしは連合加入にくみするものとされたのである。経済的側面で、この党は地主層に断乎として反対し、あくまで農民の立場を支持したのである。

シッキムとインド政府との間の一九五〇年条約の調印に先立って時間のずれがあり、またシッキム内政面で明らかに結集性がほとんどなかったこととが相まって、同国の最大の政党であるシッキム・ステート・コングレス党は頑迷になった。それは、その分裂的煽動計画の一環として「地代不払」、「納税不払」闘争を提唱したのである。一九四九年二月、同党のアジ運動は、公開の場所で党員が煽動演説を行なったとき絶頂に達したのである。数名のステート・コングレス党指導者は、シッキム宮廷によって逮捕され、それに同情した者はガントクへデモ行進を行なったのである。インド行政官は、さらに深刻な紛糾が起こるのを妨げるために、またこの国の平常な生活に戻らせるために介入するように懇請されたのである。

宮廷は、五人委員会すなわち三名はシッキム・ステート・コングレス党から選ばれ、他の二名は国王より任命された委員会をもってする臨時内閣を受け入れ設立することが緊要と感じたのである。一九四九年五月設立された人民政府委員会は、タシ・ツェリン、レシュミ・プラサド・アレイ、キャプテン・ディミク・シン・レプチャ、カジ・ドルジ・バハドゥル及びチャンドラ・ダス・ライの五名で構成されていた。この委員会自体が統一性のないことと政党政治の意見対立とから、このいわゆる「人民（ポピュラー）」政府がうまく行かないことは、はじめから明らかであった。もっと

シッキム・ナショナル党は交渉の結果をひとしく好感を以て迎えた。第三の政治組織であったプラジャ・サメラン党は、いかなる方向をとるべきかがはっきりしないかに見えたのである。いますぐさしあたって現実の目的はという点になると、シッキムにおける政治的発展と代表政府の設立とは棚上げになっていたことは明らかであった。人民政府などというものは遠い遙かな目標であるかに見えたのである。

しかしながら、ある種の措置は遅滞なくとられた。臨時内閣が首相自ら議長となって設立された。この内閣構成員は、タシ・ツェリン、カシラジュ・プラダン、キャプテン・ディミク・シン、ギャルツェン・ツェリンとソナム・ツェリンであった。シッキム・ステート・コングレス党とシッキム・ナショナル党とは、双方ともに代表を出していたが、プラジャ・サメラン党は、この内閣は、国内の全地方と社会を真に代表していないという理由で参加することを拒んだ。議会によって考慮された最初の諸問題の中には、全国にパンチャヤットの設立と将来の国家議会と内閣を形成するための選挙の施行があった。繰り返し問題となった最重要課題の一つは、主な社会、すなわち、ネパール族、レプチャ族、ブティア族の間にいかに議席を配分するか（及び政府内の行政職掌）ということにかかっていた。一方にネパール族と他方にレプチャ族とブティア族との間に釣り合いをとる試み、いわゆる「均等方式」はこの問題の焦点であった。さていよいよインド・シッキム条約の経過に入るのであるが、それは以下に述べる通りである。

ドは混乱無秩序を放任できないということを告げられたのである。当時発表された新聞談話に述べられているように安定した政府をつくらねばならないという目標を達成するために、インド政府は、シッキム人民とその政府とをさらに協調させるために一層緊密に協力しようとした。インド州総理（大臣）は、まさにこのことを念頭において任命されたのである。シッキムからの政党代表者の会議がいま一度一九五〇年三月ニューデリーでひきつづき行なわれたが、これはインド・シッキム条約交渉の最終段階と時期がちょうどうまく合っていた。この政治会談と条約交渉との双方の成果は、一九五〇年三月二〇日インド外務省が出した新聞発表で解説されたが、それは以前にふれられていたものである（付録VIを参照）。

この討議ととりわけまたインド政府の難くせに対するシッキムの反応は、一週間後の一九五〇年四月にシッキムの会議により出された次の小冊子の中に観取されるであろう。

シッキムはインドと連合すべきであるというわれわれの要求は、行政権がいぜんとしてインド官吏の政府の手にあるであろうから、原則として受けいれられたのである。平和を維持し行政をまともに実行する責任はまたインド政府の手中にあったのである。……責任ある政府は即座に樹立されないとしても、選挙制度に基づくパンチャヤット（村落公会）を即時結成させ、また年内に選挙を通じて憲法会議を設立させるために、あらゆる努力がなさるべきである。

▲伝統的衣装をつけて会食するギャルモ女王殿下（中央）

▼幼児を抱くシッキムの少女

▲西部シッキム旅行中の国王夫妻（前列左から１人目と２人目）とコエロ夫妻（２列目右から１人目と２人目）

インドとの条約締結とそれ以後

インド・シッキム条約は、一九五〇年一二月五日、インド行政官ハリシュワル・ダヤルと国王タシ・ナムギャルによって、パレス僧院において調印された（付録Ⅶを参照）。その夜シッキム宮廷によって催された国家祝宴には、シッキム・ステート・コングレス党の代表は不満のあまり欠席したのである。彼らはそれを承認しない意志を表明してその機会をボイコットしたのである。彼らは時を移さず、代表政府をつくるようにと要求を繰り返した。三回目に、シッキム・ステート・コングレス党は、インド政府とさらに討議するためデリーに行った。彼らの不満の主旨は、なされるべきことがほとんどなされてないということ、それにまたシッキムに責任ある政府を実現するのをゴマ化している利益漁色者があまりに多いということであった。一九五〇年一二月の演説で、シッキム・ステート・コングレス党議長のタシ・ツェリンは、議会が彼には「言葉のやりとりの（プロバービアル・フィッシュ）魚市場（マーケット）」の口論のように思われるといっている。

国内の政党間のみならず、臨時内閣でのさまざまな討議、非難、反対のやりとりがあったが、とにかく議会と内閣の声明が一九五三年国王タシ・ナムギャルによって発せられた。この声明は、内閣の権限のみならず、内閣についてその構成分子たちの組合せ方や権限などを明示している。一九五三年三月から五月にかけて、第一回国会の選挙が行なわれた。一九五三年八月までに、一七名から成る会が人民によって選出された。その委員会は、ネパール族六名、レプチャ・

選挙は一九五八年一一月シッキムでふたたび二回目が行なわれた。第一回の選挙後に多くの変化が起こった。その理由は、新設道路によって国の大部分に行かれるようになったこと、多くの行政改革が導入されたこと、国家行政が国の末端まで及ぶようになったということから進歩が見られたからである。それゆえに、政治意識と個人的自由の一般感情が広範に高まったのである。インドに対する連合参加の要求は背後に退いたように見えたが、代表政府、集団的選挙制の廃止、とりわけレプチャ・ブティア族とネパール族との分離選挙区の廃止論が特に強くなった。人民宥和のためにかかげられた補助金問題には、土地課税と輸送料金、道路橋梁建設などの減免、シッキムに移住してきた多数のネパール人に対して「第二階級」的地位の烙印を廃止させるシッキム人民法の必要などがあった。

その上、宮廷と主要政党代表との間の長い討議がひきつづき行なわれ、国会の議席配分の新方式ができあがり、一九五八年三月国王の勅令によって公布された。その宣言によれば、レプチャ・ブティア族には六選挙議席、ネパール族には六議席、僧院代表に一議席、さらに地域的その他の条件にとらわれない全選挙民に一議席を加えると規定されている。国王によって任命される議員の数は六名であったから、一九五三年の一七議席にくらべて全部で二〇議席になった。第一回選挙制度もまた改正され一地域社会の代表候補は、他の地域社会の投票数の一五パーセント以上を獲得することが必要資格として要求されたのである。この改正は、ネパール社会とレプチ

ブティア族六名と、国王により指命された五名からできていた。首相と国家委員会からの二顧問、すなわちカシラジュ・プラダンとソナム・ツェリンと、それに加える三名から成る内閣もまた設けられた。内閣および顧問の任期は、はじめ三年に定められていたが、後になってその期間は国王勅令によって一九五七年一二月まで延長された。

国会は、国のために法を制定する権限を与えられているが、国王の最終的承認を受けなければならない。ある種の事項は国王の同意をえなければならない。それは、国家企業、警察、地代収入、宗教的事項である。そのほか特定事項は、国会の討議から外されている。すなわちそれは、国王の憲法上の地位とインドとの条約関係である。理論的にいえば、内閣は国王を補弼することになっているが、実際の慣行によれば、その権限は非常に制限されている。ほとんどのことについて、国王は最終決定をなすことができるのである。首相は国王の補弼の中心に立ち、筆頭の行政官である。

一九五三年施行された総選挙では、五万人の有権者人口の三割が投票場に行った。国会の立候補者は少なくとも三〇歳でなければならなかった。最低選挙権資格年齢は二一歳であった。一九五三年の選挙の結果は、シッキム・ステート・コングレス党がネパール族の六議席を独占し、シッキム・ナショナル党はレプチャ・ブティア族の議席を占めたことになった。プラジャ・サメラン党は代表を送ることができなかった。シッキム・ステート・コングレス党は、以前には選挙を茶番劇と批判したものであるが、実際には参加したのである。

ければならない政治的興奮や高まりをもりたてる時間の余裕はほとんどなかった。そこで選挙は延期された。一九六二年一一月、人民諮問委員会が市民的努力を動員し協力させる措置に人民が参加するように組織化するという目的で設立された。国内の安全を強化し国防準備のための手段をとることが、この委員会の主要責任なのであった。委員会の構成員は、政党からできていたのである。

国王タシ・ナムギャルのほとんど五〇年に及ぶ長い統治は、それからわずか一年で終りを告げた。彼は一九六三年一二月二日長逝した。シッキム人民に捧げた生涯の中に、彼は原始的封建的国家から近代的な進歩的国家に変わるのを見た。全社会構造は根底から変革され、地主の力は制限され、それと共に小作人の権利の保護も確保され、さらに重要なことは強制労役制度が廃止されたことである。行政は近代化され、政府の事務機構は確立され、役所の管轄も確定され、資格さえあれば誰でも役職につけるようになった。司法は行政から分離され、それから独立することになった。国民の保健に必要な政治機構は妨げられずに促進された。本書の後章で述べられるところであるが、経済的、社会的発展はきわ立ってめざましかった。タシ・ナムギャルの健康が損われた後半生では、とりわけ、彼の後継パルデン・トンドップが国家の元首として、その将来の役割のためにしつけられたのである。

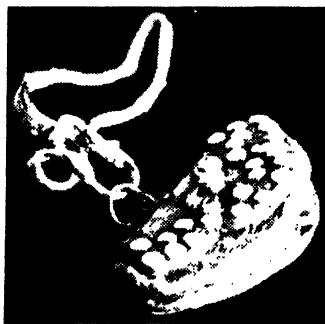
パルデン・トンドップは、タシ・ナムギャルの第二子である。長子パルジョルは、一九四一年インド空軍に勤務中死んだ。トンドップは一九二三年五月二二日生れで、一九五一年、第七代ダ

り、他の一つは、シッキム防衛軍の増強であった。四政党は臣民規定批判の点では意見が一致していた。インド政府もまた、これを是認することには批判的であった。ステート・コングレス党は、「インドは国内で民主主義を行ないながら、外国では帝国主義を実行」というスローガンをかかげた。それは快くひびく心情的な言葉ではあるが、なんら実際に重味のないものであった。シッキム防衛兵力の増強に関していえば、ステート・コングレス党は、政治的対立をもみ消すのに使われるべき兵力でなければならないと主張した。宮廷が一九六二年二月臣民規定の根本的変化に同意したときのみ、四政党はそのアジテーションをやめて、改定に同意した。

一九六二年初頭、シッキム宮廷はふたたび新国会選挙を行なう意図を表明した。この目的に対する煽動工作は前年すでに始まっていた。臣民規定に関する政治協定についていえば、注意は新選挙の要求に向けられていた。しかしながら、おしなべて政党の風潮は、不安が先立ち、不安定の徴候があったのである。さまざまのグループのメンバーの中には意見の相異があり、組織は結集性を欠き、さらに重大なことには、選挙民に訴えるものがほとんどなかったことである。最近ここ数年政府にもその発言権がなかったことは明らかであった。その構成上の理由から内閣には統一がなかったのである。

実施さるべき予定であった選挙は実現しなかった。一九六二年一〇月中国が突如インドを攻撃したことは、局面を変えてしまった。シッキムは、中国からチベットを越えてインドに向かう直接ルートに位し、インドと共に非常事態宣言を行なった。いかなる選挙実施にも先立って必ずな

女神クマリ（ラマ教）

導師パトゥマ・サンハワ像

徳利（ブティア族）

皮製財布（ブティア族）

ライ・ラマが生れたラサのサムドルップ・ポトラン家のサンゲイ・デキと結婚した。この結婚から三人の子供が生れた。その第一子で家督をつぐべきテンジン、第二子は男のワンチュク、第三子は娘のヤンチェン・ドルマであった。サンゲイ・デキは一九五七年一七歳で死んだ。国王パルデン・トンドップは、一九六三年三月二〇日、アメリカ生れのミス・ポープ・クックと二回目の結婚をした。その第一子の男子は一九六四年二月二〇日に生れ、パルデン・グルメドと名づけられた。

マハラジャの称号がチョギャル（文字通りでは法王（ダルマ・ラジャ））に変わり、王妃がギャルモに変わったことは、一九六五年四月インド政府により公式に承認された。

さて話をもとの中心に戻そう。この時代は困難な時代であった。それは一方に中印関係が激しく悪化したときであり、他方インドとパキスタンの関係が悪化したときであった。中国はシッキムをその謀略におとし入れようと決心しているかに見えたのである。

一九六三年一月一〇日、中国政府は北京のインド大使館に抗議文を送り、ナトゥ峠地域のシッキム・チベット国境をこえてインドがチベットに侵入したことはインドに責任があると申立てたのである。その申入れ通牒は、インド軍が三九のトーチカを建造し鉄条網を張り、チベット領土内の塹壕を掘ったことを非難している。インド偵察隊が挑戦的に侵入したことともまた非難されている。その同じ通牒によれば、シッキム・チベット国境は画定され、その周辺は中国人とシッキム人が慣習的に往き来していた平穏なところであったといわれている。インド軍の駐屯とナトゥ峠

ある。しかし、インドもシッキムも中国の挑発的な声明や態度で振りまわされはしなかった。今日シッキムの現況は少し緊張しているが、根本的にはこうした事件で動かされない状態をつづけている。

インドと中国軍がたえず緊急発進態勢にあって相互に対峙しているという、シッキムとチベットとの間の国境状況は、それ以来現状維持の状態である。このため、シッキムで三回目の選挙は一九六七年三月に行なわれた。選挙の後で、宮廷と政党との間の討論が行なわれ、国会の全面的な権威を増すために諒解に達した。次の国会では、ネパール族集団とレプチャ・ブティア族集団から各七名、指定カースト(スケジュールド)及びツォン族（両グループは政治的にはじめて代表の地位をみとめられた）、僧院各一名、国王の指名により占められる一般議席一、他の議席六で、一九五八年の二〇に対し総計二四名になることになっている。

シッキム・ナショナル党、指定カースト同盟、もっとも最近形成された政治団体は、明らかにこの新方式を承認したが、シッキム・ナショナル・コングレス党は不満を声明した。彼らは、指定カーストやツォン族に新議席を与えることは、以前の「社会的(コミュナル)」パターンであった「階級主義(カーステイズム)」を導入することにほかならないと非難したのである。しかしシッキム・ステート・コングレス党は、「階級主義」に対する非難は繰り返しながらも、この変化と留保を認めた。国会の候補者に対する投票特権と被選挙権の条件とはいぜんとして同じく残されている。

この執筆段階でのシッキムの現状は、政治的闘争が行なわれているにかかわらず平穏である。

越え交通の禁止は、国境の平静を覆えす陰険行為であると主張されたのである。

シッキムとチベット間の関係は、伝統的に相互理解と協力に基づくものであった。一八九〇年の英支協約の条項によって境界が画定されて以来国境紛争はなかったのである。シッキム人がチベットのチュンビ峡谷に入って羊に草をたべさせることのような慣習は太古の昔からつづいてきたことであった。ただ一九五八年中国がチベットを占領し、軍隊をチュンビ峡谷を含めるインド・チベット国境沿いに駐屯させたときになって、はじめて、この慣習は終りを告げたのである。貿易路はヤトゥンとギャンツェ（及びラサの総領事）にあるインド貿易代表部が引揚げた一九六二年閉鎖されたのである。シッキムとチベット間に習慣的な古くからある契約はそのとき無効になった。しかしそれは、苛酷な中国の圧迫迫害から逃れてシッキムに逃避場所を求めて流入するチベット人の避難民を別にしてのことである。

ナトゥ峠のチベット側における堅固なインド施設をめざして中国の敵対性はひきつづいたが、パキスタンが西部でインドを攻撃した一九六五年九月に深刻の度を増した。中国はインド・シッキム関係の基礎そのものにさえ疑問をさしはさんだのである。一九六五年九月二九日の新聞記者会談で、中国外相陳毅将軍は、シッキム・チベット国境問題は、中印国境問題の範囲内にないと主張したのである。このことは、一九六〇年四月二九日ニューデリーで「中国はシッキムとブータンの間のインドの特殊関係を十分に承認する」といったときの周恩来首相の声明と明らかに矛盾している。中国はシッキムとインドの間の親密な関係を危殆に陥れ弱めようと決心していたので

第五章　天然資源と開発

シッキムは、根っから山国で、どこを見ても平地はまったくない。山は北の方へ段々状に高くなって、その最高の頂上がカンチェンジュンガである。北部は深い急斜面になっていて、ラチェンとラチュンを除けば、人の住んでいるところは少ない。それに較べて、南シッキムは、緯度も低く、ずっと開けていてもっと人が暮らせるところである。この人の住める程度がちがうのは、一部には地質構造によるのである。この国の北部、東部、西部は、固い片麻岩状で侵蝕作用にたえることができるのに対して、中央部と南部地方は、比較的に軟かく薄く板状で半片岩からできあがっているからである。

二つの主山脈は、シンガリラ山脈とチョラ山脈で、北の方から出てきて、ほぼ南の方に向かった連山をなしているのである。この両山脈の間にランギット川とティスタ川との主流があり、主な排水経路を形成しているのである。これらの川とその主だった支流によって区切られた峡谷は非常に深く、ときには五、〇〇〇フィートを越すことがある。これらの川はモンスーンの雨水だ

逆説的ではあるが、最近人民が、豊かになってきたことが明らかに大きくなった政治的自覚と相まって、その政治的野心をさかんにするよりも、むしろ"事なかれ主義"を好ませる傾きがある。選挙の勝利は一八議席の中八議席を確保したシッキム・ナショナル・コングレス党に渡った。それに次ぐシッキム・ナショナル党は五議席、シッキム・ステート・コングレス党は二議席にすぎなかった。他の三議席はツォン族、僧院、指定カーストによって代表されたのであるが、そのいずれもいかなる明白な政治組織体に固執していない。内閣は国王による六議員の任命でできあがったが、その中三名は政府官吏から、他の三名は政党色のない一般人民の代表である。

ナップルもよくでき、政府経営の果物カン詰め工場は、シンタムで操業中である。

この地産の牛、ヤク、羊、山羊は、この国のいたるところで見受けられる。

熱帯低湿地帯からヒマラヤの最高地方にひろがる地帯では、いうまでもなく非常に多種多様な植物がある。低地ないし熱帯地域では、しだ類、竹、月桂樹(ローレル)が豊富で、それにくるみ、さらそうじゅ、樫などがある。中間地帯には、樫、桜、月桂樹、栗の木、楓、樺の木があり、最後の高地帯になると、シッキムの象徴であるしゃくなげ、もくれん、針葉樹、からまつ、ばしょうなどがある。

蘭はシッキムの特産で、ほぼ六百種類ある。その中でもっとも重要なものは、木や岩についているデンドロビウム、コエロジュウム、シンビジュウム、ヴァンダ、アラクナス、サコラビウム、エリデス、ファレノプレス、それに地に生える種のカラセ、グーデリア、ハベナリア、ディプロメリス、シベリペディウムである。シッキムはまた蘭に劣らず、さくらそう類で有名である。おそらく、これと同じ位の大きさ、いやそれよりも大きな国でも他の国ではこのようにたくさんの種類の植物群をもった国はないであろう。

二、八一八平方マイルのシッキムの約三分の一は、森林で、それは潜在的に重要な富の資源である。南部のさらそうじゅと竹の森林と、北部の針葉樹の森林とは、共に伐採可能であるが、実際にはまだ利用されるところまで行っていない。木材をラチェン、ラチュン地方からティスタ川を筏で流すことは、川によくある急激におこる洪水のために今まで成功したためしがない。紙パ

けでなく氷河の融けた水で洗われているのである。シッキムの常時雪線は約一六、〇〇〇フィートである。北部と東部の高緯度地方には、小さな湖が沢山ある。

シッキムの鉱石資源は、主に銅、次に錫と鉛である。銅鉱脈は広くひろがっており、主要鉱業資源をなしている。もっとも豊富に鉱石があるのは、パチカニとボータンであって、ボータンの方は、現在、シッキムとインドの両政府の合弁企業であるシッキム鉱山会社（コーポレーション）によって経営されている。銅精鉱（コンセントレート）は、ときに鉛や錫も一緒に精錬のためインドに送られる。銅埋蔵量は、またディクチュ、レノック、リンギ、ロンリチュ、ロンドク、ラトカリ、バルミアク、トッカニ、リンチンポンなどで見出される。

黄鉄鉱のような他の鉱石は、ボータンで豊富であり、石灰石と石英はナムチ附近で、黒鉛は中央部で採掘されている。

総じてシッキムの富の出所は農業と森林である。この地の経済はなんといっても農業である。米ととうもろこしが主要モンスーン作物である。その他の穀類は、もろこし、そば、大麦と裏作物であるダール豆などである。からしはその油のために栽培され、その栽培が急速に伸びているしょうずく（カルダモン）は、主な輸出作物である。じゃがいもの栽培は標高約八、〇〇〇フィートの高度のシッキム西部で重要性を増している。じゃがいも農場は、その西部地方で政府によって設立されたものである。シッキムの種いもは、インドのじゃがいも生産地で大事にされている。茶は新企業で、政府の茶実験場は、シッキム西部のケウジンで開発されている。かんきつ類、りんご、パイ

ることによって北東シッキムを開発し、次に、ラニプルからパキョン、レノクへ向かって、終局はランポにつながる交通幹線を開発すること。このような主要道路は、インド中央公共事業省が最初口火を切ったものであるが、後ではインド国境道路局が戦略的重要性から提案されたのである。シッキム西部は、シンタムから発してナムチ、ナヤ・バザールを経て、ゲイジン、ラバンラ経由でまたシッキムに戻ってくる道路で連絡がつけられている。

(b) 教育施設増加規定——小学校並びに中学校が国中に設けられること。

(c) 保健施設の改組と拡張——各地に病院、診療所、薬局を建てること。

(d) 基本的な地質と森林の調査を完成すること。シッキムの鉱石、木材その他の資源についての基本的調査の完成はこの国特有の産業勃興を容易ならしめるために絶対に必要である。

(e) 手工業と小規模産業の促進——これはシッキムの伝統的な精巧な工芸手芸たとえば毛布織り、木彫り、銀やそのほかの金属で典型的なデザインの手作りの道具類をふたたびおこすことである。

(f) シッキムの農業と園芸の発達——灌漑施設の拡大、種工場の設立。

(g) 発電所の建設——新工業、町村の近代設備に必要な動力に欠くべからざるもの。

このように大きな規模の計画にとりかかると、自然とそこに問題が起こってくるが、さしあたって主なものは、熟練労働力が著しく欠乏しているということであった。この計画を遂行するた

ルブ生産の将来性について現在精密な調査が進行中である。

シッキムの開発計画

シッキムの経済を振興しようという計画的開発の構想は、一九五二年四月ネルー・インド首相の第一回ガントク訪問の結果生れたものである。国王タシ・ナムギャルと討議の後、ニューデリーに帰るや、ネルー首相はインド企画局にシッキム開発案を起草するように指令を出した。ネルーの結論は次の通りであった。シッキムの資源や潜在力はあまり大きくないので、利用できる資源は慎重に調査され、よく練ったプロジェクトにうまく合うように活用さるべきであるということであった。ネルー首相が大枠を示したように、開発計画はその最初の段階では、あらゆるコミュニケーションを進めることが第一で、それこそ明白に戦略的価値があるのである。また、学校をもっと作って教育を盛んにすること、保健施設を拡張すること、最後にシッキムの天然資源——銅や他の鉱石、農業木材などを基にした大小規模の産業をだんだんとつくりあげて行くことなどであった。ネルーによれば、手工業を育成することは、注目に値することであった。

インド計画委員会の数々の専門家はシッキムを訪れ、一九五四年に始まり一九六一年に終わる七カ年経済開発案を起草した。シッキムの計画目標達成のための大綱は次の通りである。

(a) 道路交通の促進——北部のラチェン及びラチュン及び東部のナトゥ峠への国道を延長す

(a) 食料及び現金収入作物の生産高向上のため農業計画をより集約化すること。
(b) 地域的に入手できる原料（農業、鉱業、木材）に基礎をおく工業化と専門技術の活用。
(c) すでにはじめの二計画で相当開発されていた交通、動力設備の拡充。

このことは、開発の他の側面が無視されていたということではない。たとえば社会奉仕は過去の七カ年計画時代と同様な周到な注意を受けることになっていた。多くの点で社会奉仕や設備の現状は、いぜんとして初歩的段階にあり、人民の安寧のためにはさらに発展が必要であるのはいうまでもない。

第三次計画は九〇〇ラークの経費を要するが、この数字は大小規模の工業発展のための二一〇ラークの特別準備金を含んでいる。同計画内の歳入増加方法の中には、一、五〇〇エーカー（五年ないし一〇年の期間にわたり確保されるはずのもの）の茶畑、シッキム国有交通の発展、二五、〇〇〇キロワットの電力を発電しうる力をもつラギャップ・ハイデル計画の準備作業が含まれている。これは、シッキムの全需要を十分みたし、輸出の余裕を残すことが見込まれているのである。一九五四年から一九六六年の期間内の年次計画の統計はいくつか付表に述べてある。

この計画開発の結果は、村落地方で明らかに見ることができる。今日でも多くの村落は、他の人口の中心と同様に舗装道路から数百ヤードしかはなれていない。実現した道路建設の結果、農産

めには、技術者を主としてインドから出さねばならなかったのである。

インドの第一次開発計画に対する寄与は、主として財政的、技術的援助であった。総額三二五ラーク（一ラークは、十万ルピー）がシッキムに対してインドから七カ年計画の期間の贈与として提供された。この援助は北東シッキムに対する国道延長のためインド政府が直接使った建造費を含んでいない。それは、この企画がインド国境道路建設公団によって遂行され、インド大蔵大臣の所管であったからである。デオラリ（ガントク）からのナトゥ峠近辺のテグへのロープウェイは、インド借款により賄われた。

第二次五カ年計画は、次いで、一九六一年から六六年にかけての期間中に起案され、承認された。その計画は八一三ラークを要したが、それはおしなべて生活水準向上のためにも使われ、農業生産、山小屋産業、小規模産業及び青年男女の雇用一般の増加に刺戟を加えたのである。この第二次計画の企画は、最初の七カ年計画期間中発足した事業の継続であったものが多い。

いまや第三次五カ年計画が、一九六六年から一九七一年にわたってたてられつつある。交通、教育、保健、社会奉仕の分野で顕著な進歩がなされた結果、国内経済成長力を増し、シッキムの輸出力をつけるために全力を傾けることができたのである。農業開発が進んで人口増加と生活水準の向上にも同様な注意を促したが、計画的な進歩がなされると、特に年々数量的に増加していた穀類の消費と生産の間のギャップを招来したのである。すでにたてられていた大綱の中で、特に重きがおかれたのは次のことであった。

トの発動力をもっており、ガントク、シンタム、ランポに電力を供給している。このほか四カ所に「小型発電」計画がたてられて居り、作業が進行中である。それが全部完成すれば、マンガン、ナヤ・バザール、ナムチ、ゲイジン、パキョン、および他の町々に電力を供給されるであろう。

シッキムの一人当たりの所得は、インド各地におけるものより高い。それはいま年間七〇〇ルピーであると想定されている。その面積と人口の割には、一人当たり輸出指標は、インドの他の地域よりも高い。総じて、カルダモン、オレンジ、りんご、じゃがいもの輸出量は、一九六〇年で七〇ラークに達すると推定されている。一九六七年には三倍になる見込みである。シッキムには失業者がなく、また乞食もいない。

国家の歳入能力は著しく増大した。一九六〇年のシッキムの歳入は四一ラークであったが、今年の推定は約一二〇ラークである。ここ六年ないし七年の期間で歳入がほとんど三倍になったことは喜ばしいことである。これは、一九五四年インドのジャワハルラル・ネルー首相がシッキムで最初に唱えた開発計画の成功によるものであることはいうまでもない。

インドは、シッキムの計画的経済進歩に全幅的な援助を与えている。シッキムの相次ぐ開発計画はインド政府によって後援され、融資を受けてきた。インドは、開発のため必要とあればどこへでも専門家を派遣し、技術援助を提供してきた。しかるに、シッキム人の多くは、インドの援助と助力に批判的であって、それはうわべだけのものでまた利己的利害のためのものだといって

物を市場と集配センターまで、数年前までは共通の運搬手段であったラバの背中をかりるよりはトラックで運ぶことが可能になったのである。しかし、国道ができてから、村落の生活も甚大な変化を受けるようになった。たとえば、シッキムの子供は誰でも生徒になれて、小学校に通えるようになったのである。学校は多くの村の歩行範囲内にできた。保健に関していえば、非常に高水準の衛生管理の状態がつくり出された。マラリア撲滅、予防接種、などの計画は実際に全面的に実施されるに至ったのである。

農業は、伝統的にシッキム経済の柱である。人口一八〇、〇〇〇人（推定）のうち、約一三〇、〇〇〇人が土地に依存している。農業の開発には特別な重点がおかれている。ゲイジン、タドン、ラチュン、リブディなどのような試験場、モデル農場がところどころに設けられている。ゲイジン、ニントミレールやラチュンには国立苗木仕立場があり、農民の園芸発展をたすけている。熟練労働者や専門家が農民に改良された農法を教え、植物保護施設は、政府援助の一部として誰でもが利用できるようになっている。

一九五七年ガントクに設立されたシッキム政府の機関である手工業研究所は、少年少女に伝統的な工芸、たとえば織物、絨毯作り、木彫りなどを教えている。この研究所で訓練を受けた者は、その知識や技術を村にもち帰るが、これが普及して副業になり収入のたすけになることが期待されている。

サンコーラのシッキム最初の発電所は、一九六四年に完成された。それは二、一〇〇キロワッ

この声明は、インドのシッキムに対する友好的援助を実にこころよく認めたものであったのである。

いる。これほど事実からほど遠いものはない。おそらく、かかる批判に対する最良の答えは、一九六五年三月国王パルデン・トンドップがセル・トゥリ・ナガ・ソル（国王即位）の折述べた言葉であろう。そのとき彼は次の如く述べたのである。

多くのさまざまな文化の流れが、数世紀にわたってシッキムに流れ込み豊かにしたが、その地理的状況は、人民に責任のふりかかる特殊な重荷を背負わせるような問題をひき起こしたのである。インドは偉大な平和愛好国民であって、インドの保護の下にあって安全を感ずる。しかしわれわれはまたいかなる場合でも、必要とあれば、わが国の防衛のためにその生命を投げうつ用意があるように、わが人民を準備しておくように自覚を高めて意気軒昂たるものがある。

インドはシッキムにとってよき友人であったし、いままでインドの惜しみない援助を受けてきたが、それを私も私の人民もつねづね深く感謝しているところである。この両国の間の友好の絆は強く解けるものではない。余はこのおごそかな日にこの絆がいよいよ申し分なく強くなることはわれわれの努力の目的であることをこの機会に確言したいと思う。われわれは、シッキムの真実で着実な友人であったジャワハルラル・ネルーの思い出を深い愛情をもって回想し、またインド政府が今後もながく友情の手をわれわれにさしのべられるということを確信する者である。

を擁している。閣僚と国会の機能については、前章ですでに説明したが、総理大臣は、国会と内閣の双方を統べる職権上の議長である。重要な決定は、その承諾を得るために国王のところにもって行かれる。財政的事項については、閣僚の権限は制限されている。現在のとりきめに従って国会の議員に選ばれている閣僚は、教育、公衆衛生、交通、交換市場、物品税、公共事業、家畜飼育、農業、新聞、広報などについて責任をもっている。議員も閣僚も共に、シッキムの重大利益に関することならばいかなることとも国王の注意を促す最高権限をもっている。

行政は、官房長官を中心とする機関がとり行なうが、それぞれに個別的な専管事項、たとえば財政、村落公会、地代収入、教育、公共事業、法律、秩序などについての各省長官が責任を負っている。官房長官はまた四地方行政官が執行している地方行政組織の長官でもある。その地方歳入徴集は税務官吏の任務である。村落レベルでは、村落公会が一九六六年以来開かれている。村落公会は、村の行政と開発計画の調整に責任をもっている。村道、水道、学校の維持運営は主要任務の一つである。村落公会の選挙は各家族に一票の割で行なわれ、選挙運動は許されていない。

地方行政を容易ならしめるために、シッキムは四地方区に分けられている。マンガンに行政府所在地がある北部地区、ガントクに行政府所在地がある東部地区、ナムチ及びゲイジンにそれぞれ行政府所在地がある南部地区、西部地区がある。各地区には、地方裁判官でもある地方行政官と副開発官と、地方行政と税金徴収との責任を有している租税徴収監督官がある。

ある省には長官がなくても所長またはそれに相当する技術的権威者がある。そこで、教育長、

第六章　政府と行政

これまでの諸章で、一九四七年インドの独立以来シッキムに起こった政治的発展や変化をとりあげ、諸国の政府と行政機構の全般的な姿をえがいてみたわけである。国王は国家行政権に対して完全な支配力を有する。その主な輔弼者で執行官であるのは総理大臣と呼称され、現在はR・N・ハルディプールであるが、それはまた以前のデワンの継承者である。総理大臣は、国王によって任命されるが、ただしそれはデワンと同様にシッキムに出向したインド政府の役人である。総理大臣の権限と機能は、非公式な内輪のとりきめにより国王がつくるのである。国王不在のときには、総理大臣は彼に代わってとり行なうが、それは後になって国王による追認行為を受けなければならない。

国会は、すでに述べたように一九五三年以来ひきつづき拡大されてきて、当時一七名であったのが現在では二四名になっている。内閣は、議会の一部ではあるが、一九五八年はじめて成立して以来数は変わらず、国会で代表されている主要政党から出された三名の次官をもつ二名の閣僚

方裁判官が各地方区に一人ずついる。ある法律は成文化されており、全法体系を編纂する試みがなされている。多くの場合、とりわけ犯行の重刑が問題になった場合最終的提訴上告権をもっているのは国王であって、彼は必要と考えれば、再審査するための裁判廷を任命することができる。死刑は、一九四八年シッキムでは廃止された。

シッキムに原始的な封建制から離脱して、近代的な統治組織をつくろうという企ては、一八八九年最初の英国弁務官クロード・ホワイトから始まる。彼は基礎的な統治構造をつくり、課税制度を規制しようと努めたのである。彼はいろいろな部局に責任をもつ役人を任命した。一九四九年に至るまでシッキムの行政に全責任を有したデワンの任命によって、行政組織の近代化がじょじょに進められたのである。歳入制度はさらに改正され、保健、教育、公共事業等々を取扱ういくつかの部局が設立された。僧院財産は統制下におかれ、それは自給的基礎に立つように仕向けられたが、しかしまだ相当な政府補助が僧院に与えられていたのである。

今日でも未だ公務員というものはなく、行政に対する正規採用制度はなく、役所の役職は宮廷によって推挙されているのである。最高のポストは、代理としてインド官吏に占められているが、それは十分訓練を受けたシッキム人がいないからである。シッキム人を政府の役職につけるについては、「均等分配方式」が重要であって、それにはネパール族に対しても、レプチャ・ブティア族同様にバランスを考えねばならない。それは社会的調和を維持するためには役立つかも知れないけれども、行政能率という点ではうまく行かないやり方である。学識という点でさえも

厚生長、技師長、警察長、森林管理長がある。官房長官のみならず、長官、所長は総理大臣に隷属し、その命令により働いている。

特殊な部省は、内閣の権限外にあって、いわゆる「専管事項」については国王に直属する。そのうちの一つはインドとの関係である。いま一つは、僧院関係のことで、宗教長官は総理大臣を通じてあるにせよ、国王の下でとり行なっている。国王はまた官房長官の任務であるルーティン事項を除く法と秩序の問題をとり扱っている。

各省に跨る(またが)ことの調整権を握っているのは、開発計画を立案し計画に関する進行を査定している開発長官である。彼は各省長官と密接な関係を保ちながら仕事をしている。

開発に関する経費について監査を兼ねて勧告機能を果たしている財政顧問がある。開発計画に関しては、各省長官に対してその実行の適否、施行の申入れを勧告するのがその任務である。会計検査長官は、国費の誤用、出費の適否をとりしまる法律規則に違反を監視することが職務である国家監査長官でもある。財政長官は、地方行政長官や国立銀行ジェトムール・ボジュラジュ氏などを通じて提出される国家の歳入歳出額を整えるのである。

国家歳入は、主として所得税、取引税、物品税、バザール、森林、国有鉄道などからとられる。

司法は、厳然と独立している。前述したように、高等裁判所は一九五五年特別条令により設立された。高等裁判所の裁判官のほかに裁判官憲として、ガントクには最高地方裁判官と四人の地

政治組織の母体は、シッキムが最初からの住民たるレプチャ族と、チベットから四世紀ないし六世紀おくれて移住してきたブティア族とここ一〇〇年ないし一五〇年以前にやってきたネパール移民という人種的分立にある。レプチャ族とブティア族は、それぞれ土地を所有していて、強力なカジ・グループのごときは国土を年次徴収のため自治区域に分けたくらいであったのに、新来のネパール人は、勤勉で倹約なためじょじょに土地にくいこみ、比較的短期間に経済的にも政治的にももっとも重要な集団となったのである。その数においても、ネパール人の人口の増加は、レプチャ、ブティア両族よりも遙かに急速であった。しかしながら、二〇年前までは、ネパール人は完全な資格のあるシッキム臣民とは認められていなかったのである。今日でさえも、レプチャ、ブティア両族が圧倒的に人口が多い地方ではネパール人が農地を手に入れることに制限があるのである。

もっとも古い政治組織であるシッキム・ステート・コングレス党は、一九四七年に設立され、インドの独立にひきつづく時代に重要な役割を果したのである。一九五一年六月採択され一九五四年四月改正された党規約によれば、その目的は次のごとくである。

シッキム人民の福祉と進歩、インド共和国の保護の下にシッキムの政治的、経済的、社会的発展の達成、平和的非暴力的且憲法的手段によって、また人民協力の下に、インドにおけるように、権利の平等、すべての宗教的、カースト的、人種的、男女性別による差別の撤廃の原則

「均当分配方式」がついてまわるのである。エリートの数は、とりわけ科学技術の面で低く、シッキム人で大事な仕事をこなせるのはきわめて少ない。シッキムからの青年男女が行政職や技術者の地位にどんどんつけるだけの下地ができないかぎり、シッキムの人的構成は弱く、インドはいぜんとしてシッキムを支配しその国の重大利益を支えつづけるという見方をする政治的批判が生まれるわけである。いろいろの点で、現在の行政構造は相当改善されるべきであるが、それは現実的で文明的なものでなければならない。

政党

政治的発展をとり扱った他の章で、シッキムの政党組織を説明するところがあったと思うが、三〇年代の初期から政治的団体ないし組織は存在したのである。シッキムの政治とその将来についての彼らの関心が高まったのは、第二次大戦後英国の勢力がインドから引揚げるための準備からであった。事態がさし迫るにつれて、彼らの考えもさらに明確なものになり、政党はインド独立の直前に出現したのである。

二つの旧い政党たるシッキム・ステート・コングレス党と、シッキム・ナショナル党とは、「変化の風」がインドを吹きまくった一九四七年に正式に成立したのである。比較的小党であるプラジャ・サメランもまたほとんど同時に成立を見た。ほかの二つの政治組織は環境の産物であって、それより後にできたものである。

副党首として座っている。同党の規約によれば、その組織の目的は次の如くである。

成文憲法によって保証されたシッキム人民の基本的権利を平和的革命によって達成すること。その憲法とは、事実そのもので成人選挙権と共同体に拘束されない投票と集計制度、ブティア・レプチャ人とネパール人との均等性によって選出された選挙国会に全責任を有する執行部をもつ完全な代議政府を設定すること。第二には、立憲君主国の建国。

それからまたもう一つの政治組織、すなわちシッキム・ナショナル・コングレス党以前からすでに存在していた指定カースト同盟といわれたものにふれなければならない。それはP・B・カティによって創立されたもので、その目的は、主にネパール人社会に属している指定カーストの利益を促進することであった。その主要な要求は、指定カーストのために国会に議席を確保することであって、その要求は国会の構成に対する最近の方式でみたされたのである。

こうしたさまざまな政治団体は、財政および村落レベルにおいて特に政治的幹部の欠乏という共通の問題をかかえている。シッキムの政治組織の弱点は、青年層の積極的参加が欠けていることである。その結果、一九四七年の指導者が一九六七年までひきつづいてその局にあったが、今日もいぜんとして担当してるのである。この不安の原因をたどって行くと、少なくとも部分的には、効果的な責任ある代議政府が現在の議会選挙制度と選挙議員と任命議員との間の議席配分の

に基づいて、国王を憲法上の元首として民主的な十分責任ある政府を樹立すること。

現在、党首はカシラジュ・プラダン、書記長はアディクラル・プラダンである。

ほとんど同時に生まれたシッキム・ナショナル党は、ブディア族の見解と利益を代表し、レプチャ族のは少ししか代表していない。同党は何の正式な憲章または規約をもっていないが、その目的は公式声明ないし発表で明らかにされているように、明確な国民的統一としてのシッキムの維持、ネパール人に対するレプチャ、ブティア族の利益擁護、インドとの関係強化、シッキムにおける地主制度と奴隷労働の廃止を含んでいる。現在同党の党首はマルタム・トプデンで、書記長はハルカ・バハドゥール・バスネットである。

第三の政治団体であるラジャ・プラジャ・サメランは、やはり一九四七年にダン・バハドゥル・テワリ・チェトリとカシラジュ・プラダンの兄であるゴベルダン・プラダンによって設立されたものである。その第一に宣明した目的は、インドとの完全な合同と、北ベンガルのグルカ族との提携同一化であった。かつてそれは、全インド・グルカ同盟と連係していたが、これはいま明らかでない。

一九六〇年になって、いまひとつシッキム・ナショナル・コングレス党と称せられる政党が、ステート・コングレス党内の分裂の結果として設立された。その指導格には、かつてステート・コングレス党の発起人であったカジ・レンドゥップ・ドルジが党首として、ソナム・ツェリンが

いている。それは、中央公共事業部とインド国境道路機関などである。これらの機関は、国立高速道路とりわけ西ベンガルからガントクへ、ガントクからシッキムの北方ならびに東部への道路建設維持に当たって、その活動を調整し責任を分担しているのである。

郵便、電信、電話のサービスはまた、インドのコミュニケーション組織の中核としてインド政府によって運営されている。シッキムでは特別の通貨はなく、インドとちがった郵便切手もない。インドのルピーは、どこでも法定貨幣である。シッキムと北ベンガルとの間には、何の交易課税の障碍はない。ただし原則として、税は西ベンガル政府によって徴せられる取引税のように、シッキムに関する商業取引交換上徴せられるものではない。

インド陸軍の部隊は、シッキムとインドとの双方の防衛と安全のためにシッキムのチベット国境沿いに警戒体制をとっている。今日では、中印国境はチュンビ峡谷であり、シッキムの北部のチベット国境に沿ってヒマラヤ山脈の屋根(クレスト)であるとされているのである。

インド政府は、ガントクに、シッキムにおける諸活動を調整する目的で、いわゆる代表部を設置している。この名称は、英国の勢力統治時代からひきつがれたものであるが、この役所の仕事は今日では根本的にちがった性質のものになっている。それは、主としてインドとシッキムとの間の連絡機関で、シッキム宮廷を該国の経済的社会的発展に向かって努めることをたすけることにある。これを代表部ということは、当たっていないかも知れない。というのは、地方の政党のある分子がたとえまちがっていてもこれをインドがシッキムの重大利益をまもるという形でシッ

下では不可能であるという事実に帰せられるであろう。シッキムにおける活動的な進歩的な政治生活は、それゆえに実現がむずかしく、政治的沈滞が現段階ではやむをえないわけである。

インドの特別責任

インドとシッキム間の関係は、一九五〇年一二月締結され調印された条約に基いている。同条約の条項によれば、シッキムはインドの「保護領（プロテクトレイト）」と規定されており、インドは、外交、防衛、交通通信という三事項について直接責任をもっている。この「保護領」という言葉を使用するについては批判があった。それは、インドとシッキムの間に植民地関係の存在を暗示するものだといわれたのである。かかる解釈は正鵠を得たものではない。シッキムとインドとの間の条約は、英国の優越支配が終わった後で、両国政府の代表によって自由に交渉されたものであって、シッキムがその自由意思で同意したことが自らインドへ特別な責任をもたせることになったのである。これはまた事実において、シッキムの地理的、政治的事情をシッキムが承認し、納得したことにほかならない。これらの三事項のほかは、完全な自治がシッキムの宮廷に与えられており、インドはなんら立入って干渉するようなことはしていない。したがって、この「保護領」という言葉は、正しくはインドとシッキムの間の自発的な連繋関係（アソシエーション）という方が当たっており、ただシッキムが文字通りインドの保護下に自ら身をおいたというにすぎないのである。

インドは、この特別な責任がある結果として、シッキムにある種のなくてはならない官省をお

第七章　前途の見通し

シッキムの前途は、一寸先も分らないというほどでないとしても、まことに困難な道である。シッキムは、チベット平原からインド平野に向かう最短直接のルートである。昔、英国がシッキムに目をつけ、根を張ったのは、ラサへの直接貿易路を開いておくためだったが、それはまた遂には北京に通ずるものとねらいをつけたからである。英国がインド亜大陸で勢力を失墜するまで、英国代表の主たる任務は、ヤトゥン、ギャンツェ、ラサにある通商代表部をまもり、通信連絡を保っておくことであった。一九四七年に起こった未曾有の大変化に伴って、英国はチベットの権益を手放したが、それと共にいろいろな英国人がチベットに連絡局を設けたのである。これらはインド政府の接収するところとなったが、それはインド・チベット貿易が儲かることが分っていたからではない。それは最盛期でも大したことはなかったのである。

しかしながら、チベットの英国連絡局は、政治的な重要性をもっていたのである。一方において、英国の連絡局は、時折チベットに侵入していた中国には警告の意味をもったし、他方においい

キムを支配することの象徴ととるからであり、またある人は、その中にインドの政府の警戒の眼を見て、そんなものはなくてもよいものをと思うからである。

シッキムの経済的、社会的開発のための新計画の輪郭をつくったのである。それ以来、シッキムは長足の進歩を遂げ、みるみるうちに重要な改良がなされたのである。要するに、現代にふさわしく進歩的になり、経済的に力のついたシッキムは、シッキムのみならずインドにも真に重要であるというのであった。

シッキムとインドとの間の政治的関係の旧い行き方は、インドの独立と共に変わってしまった。新条約が一九五〇年に結ばれたが、それは、シッキムとインドとの間の相互利害を十分に理解した上で、両国間の提携関係を強化したのである。この条約と相互関係はインドの独立以後二〇年間にもわたってこの試練にたえてきたことは、それだけで両国間の関係が健全で堅固な基礎のうえ結ばれてとけない絆のうえに築かれたものであることの証左である。

こうした特徴があるにもかかわらず、それ自体はいいものであっても、妨害要因があるものである。シッキムをここ少なくも一〇年二〇年で経済的に自活ないし自己成長できると考えることはむずかしいことである。シッキムの自然は無限の宝庫のように見えるけれども、実際は豊富であるとはいえない。その国の天然資源を採取するためには、非常な投資ときわめて高度の専門技術を必要とする。その国は資本も技術も共に稀小で入手が困難である。不安定な地域に投資することは決してとびつきたくなるような仕事ではない。しかも不幸なことに、教育は、よくできた施設で行なわれているけれども、その範囲は限られているので、専門技術を開発する最初の手がかりが欠けているのである。たとえシッキムの費用がかかる運搬賃や一般的に生活費や賃銀水準

て、インドの英国政府が、いかにその山脈が近づきがたいにせよ、その北方国境をこえた地方の平和と平穏に深い関心をもっていたかを思い出させるものとして存在の意義があったのである。独立したインド政府は帝国主義の英国がやった跡をうけつごうとはしなかったし、それはできるものでもなかった。インドのチベットにおける利益は、遠い過去、実に仏陀の時代まで溯った文化的、宗教的伝統に基くものであった。そこには、商業的ないし権力的な考慮などなかったのである。

権力主義的な無暴きわまる中国の出現は、中国・チベット関係を史上最悪の時代に戻してしまった。迫害と圧迫とを通じて、チベットは目もあてられない隷従に追いやられたので、幾百幾千のチベット人は、難を逃れてシッキム、ブータンに、さらには北東国境を越してインドにまで庇護を求めたのである。もっているものはすべて奪われ、その耳飾りやお守り、さんごやトルコ玉も数日の糧を得るために売り払って、避難民は赤貧に陥ったのである。チベット人の逃亡をくいとめるために中国がとった措置は、チベットへの貿易ルートを閉鎖することであった。チベットに開けているシッキム北方の門戸は、中国によってぴしゃりと閉められてしまって、いまだに閉められたままなのである。

こうしてインド平原に向かっての南方ルートは、シッキムにとってもきわめて重要になったのである。チベットの事件が起こるずっと前に、インド・シッキム関係は新目標を見出したのである。それは何かというと、早くも一九五二年に、ネルー首相と当時の国王タシ・ナムギャルは、

うこと、なかんずく積極的で進歩的な支配者「国王」と役人と政治家がすべて心を合せてくにたみの利益を考えるということにかかっている。しかしそれはまた他方において、シッキムとインドとが互いに友好的な、素直に同情をもちながら理解し合うようになり、二国の利害が一本になって、どちらにも偏向することなく、互に敵視し合うことがなくなるようになることに、その将来はかかっているのである。

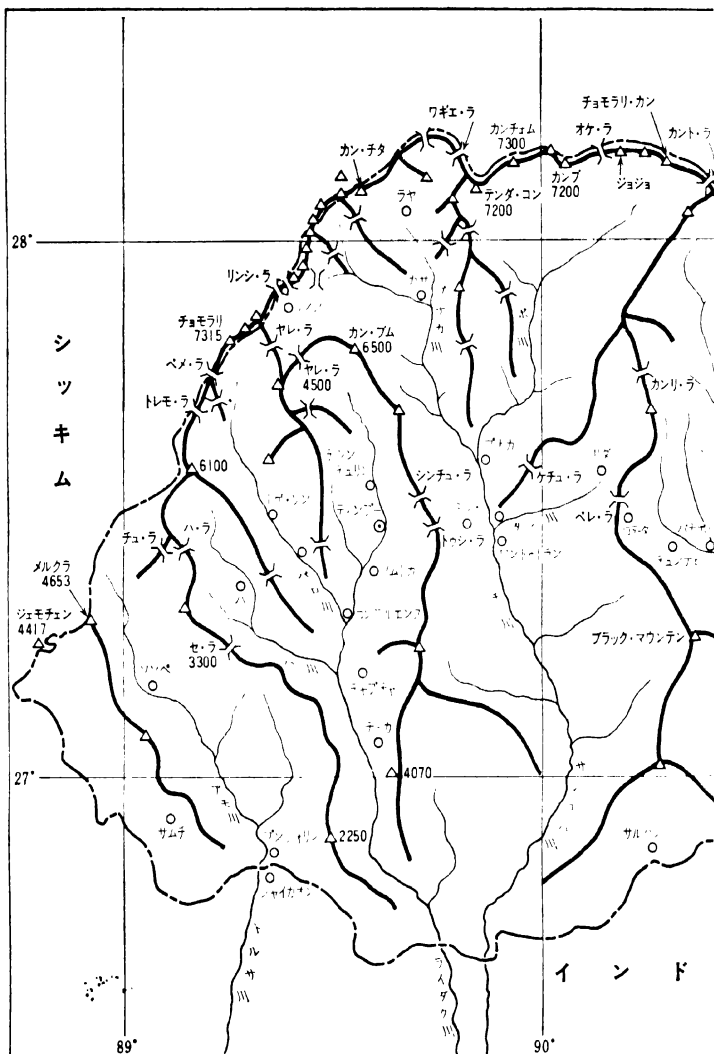
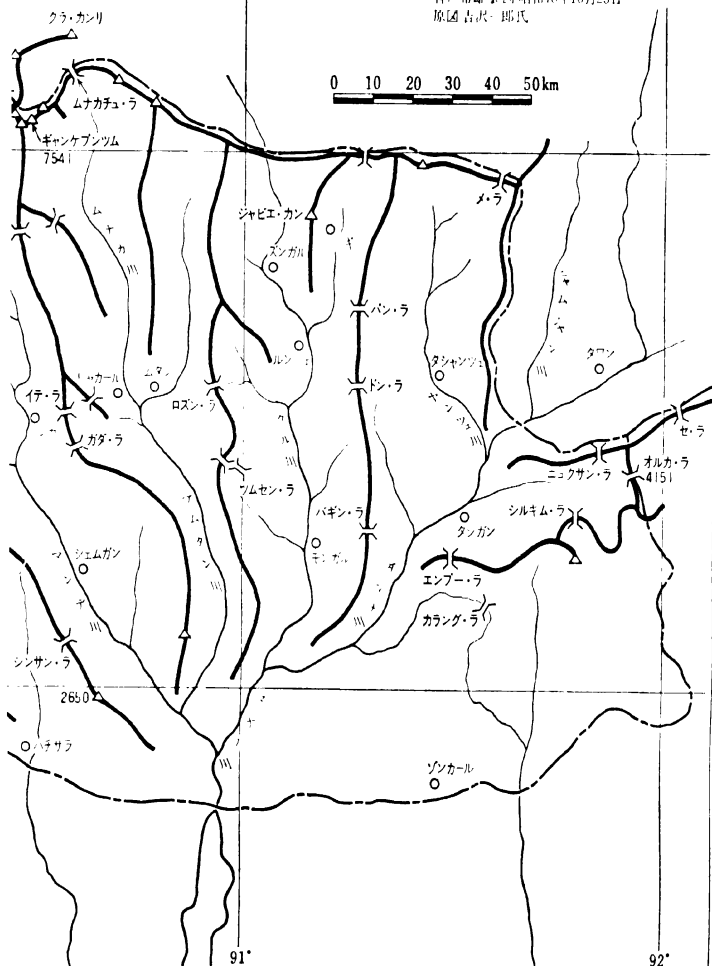
が高いことの経済的不利が克服されたとしても、生産上の特殊化なものをつくったり、みがきをかけたりするというような補足的要素がきわめて重要であって、それをとりいれなければならないのである。

国内政情もまた非常に有望だとはいえないのである。シッキムの政治活動はといえばほとんど停滞しているのである。政党は人民をめざめさせ熱をあげさせることができなかった。新しい空気が政治活動に流れこむことはまずないのである。若い年代層はお高くとまっているようで、中にはいくぶんすねた様子で、インドを同情欠落だとか新帝国主義だとかいって糾弾するスローガンの後方にかくれ場を見出す有様である。これは間違っている。政治構造が変化と活を入れることを必要としていることだけは、明々白々な単純な事実である。

シッキムのナショナリズムは、もっと実際の内容を充実しなければならない。男女ともに特に若い者は、自分達がその地に所属していること、その土地に個々人が杭を打込むということを自覚しなければならない。いかに支配者が進んで開化していても、シッキム人が行政、経営上のポストをどんどん占めるようにならなければ、シッキム特有の個性はつくりあげられるものではない。「シッキム化」という言葉は、適当であるとは思わないけれども、訓練を受けて一人前になったら自分のくにに働き場所を見つけて帰ってくるようにならなければ、達成されるものではないのである。

シッキムの将来とシッキムの国力のいかんは、一方において多くの要素が現実にうまくかみ合

第二部　ブータン

チョモラリ・カン
ワギエ・ラ
カンチェム
7300
オケ・ラ
カント・ラ
カン・チタ
カンプ
7200
ジョジョ
ラヤ
テンダ・コン
7200
28°
リンシ・ラ
チョモラリ
7315
ヤレ・ラ
カン・プム
6500
ペメ・ラ
ヤレ・ラ
4500
カンリ・ラ
トレモ・ラ
シ
ッ
キ
ム
6100
シンチュ・ラ
ケチュ・ラ
ペレ・ラ
チュ・ラ
ハ・ラ
トウシ・ラ
メルクラ
4653
ジェモチェン
4417
ブラック・マウンテン
セ・ラ
3300
27°
4070
サムチ
2250
89°
90°
イ
ン
ド

ブータン概念図
神戸常雄 製図 昭和18年10月25日
原図 吉沢一郎氏
0 10 20 30 40 50km
チベット
クラ・カンリ
ムナカチュ・ラ
ギャンケブンツム
7541
ジャビエ・カン
ズンガル
パン・ラ
ドン・ラ
メ・ラ
タワン
タシャンツェ
イテ・ラ
ガダ・ラ
ロズン・ラ
ツムセン・ラ
パギン・ラ
タンガン
シルキム・ラ
ニュクサン・ラ
オルカ・ラ
4151
セ・ラ
エンブー・ラ
カラング・ラ
シェムガン
シンサン・ラ
2650
ハチサラ
ゾンカール
91°
92°

立った山なみと激流をこえて、辛苦の旅をへて、やってきたのである。それには、インド平原からか、またはチベット高地からか、長い月日をかけた困難な長途の旅路が必要であった。それにはたいていろばや馬の背に乗って、露営の用具や身の廻りの品物を積んだろばの隊商(キャラバン)を組んでくるよりほかなかったのである。

ブータンは、大ヒマラヤ山脈の山腹にひっそりと横たわっている。その国の北側は、ほとんど近寄り難い峠を除けば、大山脈の雪をいただく連峰にさえぎられ、南側は鬱蒼(うっそう)たる熱帯の密林によってさえぎられているので、実際ブータンは、どこへ出て行くにも容易なことではないし、外部から簡単に入って来ることも出来ないのである。国境の町プンツォリンから首都ティンプーに至る最初の舗装道路は、一九六二年ようやく完成され、それまで何日も何日もかかったところをたった七時間で走破することが出来るようになったのである。このように東部の国道は、東の中心地であるタシガンとアッサムの南部平原とを結ぶ道路と、それにブータンを西から東に横断する道路とが出来て、新たな接触交流が生れるようになって、そうした接触から、考えも新しくなり、人民も目ざめることになる日も遠くないと思われる。この線に沿った事業は一九六四年に始まったが、その完成にはまだ数年はかかるだろう。

ブータン人は一風変わっていて面白いところがあり、そのお国ぶりとなっている伝統的な社会的、経済的特徴は随所に見られるのである。その衣装、食物、習慣、宗教的行事、暗示的な無言(パント)舞踊(マイム)は、そのあたりの隣人部族のものとはちがったブータン独特のものである。ブータンは、

第一章　国土と人民

何世紀も孤立の眠りを続けた静止の過去から、一足とびに現代世界に現われ出てきたのがブータン王国である。その由来は模糊として明らかではないけれども、それは何百年にもさかのぼる伝統をもち続けている質実剛健な人民の国である。ブータンは、いうまでもなくわずか数年前まで文明社会から隔絶されていた。そこでは、宗教改革者や革新的政治家が強い影響を与えたわけではないのに、不思議にもいつのまにかブータンはその独自の姿をつくり出してきたのである。希薄な人口、けわしい地形、不便な交通のために、新しい思想がもり上る余裕などなかった。数世紀下って、ほんの少しの旅人が訪れたばかりだった。それもほとんど一二人を越えないほどの少数の者が訪れてきたのにすぎなかったが、その人たちが外界の新しい出来事を伝えたのである。とりわけ、その中で一人のヒンズー僧が仏教をもたらしたのは約千年前のことであった。そこにはまだほかに、真理を探し求めて来たチベットからのラマ僧や冒険にかられて踏査していた東印度会社の出先、最後には英帝国の使節が訪れて来た。彼等は荒れた危険な経路を辿り、きり

出所もよく分らないのである。住民は自らその国を"DRUK-YUL"すなわち「龍の国土(ランド・オブ・ドラゴン)」と呼んでいるが、「ブータン」という名前は外国人が「ブート」ということをいい始めたことから使われたのであって、それはまたチベット人が本来自分自身の国に使ったものであるし、「タン」は恐らく「ヒンドスタン」、「アフガニスタン」などのようにインド・ペルシャ語に出て来る「スタン」がなまったものであるようである。ある人の説によれば、それは「ボーティア」の名称から出たもので、チベットの地という"Bhot"の延長または終端を意味するという。

英国の公表記録でブータンに最も早くふれているのは、一六世紀後半までさかのぼるハックルートの「旅行記」の中である。

「クチ」または「キチュー」から四日がかりの旅で、前にもいった「ブータンタール」と呼ばれる国がある。そして首都は「ボーティア」で、その国王は「ダルマン」と呼ばれるが、その人民はすこぶる背が高く強い。また中国から、面(マスタ)、めのう、絹、こしょう、ペルシャのサフランなどを売りに来た商人がいた。その国は大きく、三カ月の旅行が必要である。その国には高い山が多く、その一つは余りにけわしいので、六日間をかけてみてはじめて完全に見ることができる位である。この山々の中には非常に長い耳をもっている人民がいて、たとえその耳が長くなくても、彼等は自ら「猿」と呼んでいる。彼等はいう。自分たちが山の上にいるとき、海上の舟があちこちに動くのを見たが、それがどこから来たか、どちらに行くのか分らなかっ

「封建的」、あるいはある意味で「原始的」であるかも知れない。しかしその国には、ラマ僧、独立農民、木材や銀、それに木綿、絹、羊毛などの織物などで精巧な物をつくる熟練工匠という強固な階級が存在する。それぞれ特殊な方法で彼等は政治に発言権をもち、何をなすべきか、なすべきでないかについてはっきりした形でその意見を主張し、認めさせるのである。この「民主主義」の形式ないしは「民主主義的なやり方」は、ほかでは到底類例を見ることができないのである。

ブータンは、ドルック・ギャルポ（ジグミ・ドルジ・ワンチュック）という名称の若い支配者をもっている。彼は一九二八年に生れ（一九七二年七月二十一日歿）、一九五二年その父マハラジャ（国王）の後をついだ。彼は、ラマ僧や農民であろうと、新進の大学卒業の役人であろうと、人民すべてを愛し、尊重し、配慮している。その土地の運命は彼の手中にある。その将来をどういう形にするかは、国王と国王に心から協力を惜しまない国民の果たすべき課題である。徐々にではあるが、数世紀にわたる古い伝統の最良のものと、文化の特徴的パターンとが、今日の文明の必要に対応して、新しいものも古いものも共に保たれながら変容されたとき、はじめて新しいブータンは形成されるのである。この仕事はきわめてさし迫ったもので何としてもやってしまわねばならない挑戦的なものである。

ブータンとブータン人の歴史的、人類学的な起源は秘密のとばりにつつまれている。「ブータン」という名前だけでも容易に説明がつけられない。それはいろいろのなものが複合していて、

ブータンとチベット国境上にあるチョモラリ（聖なる女神の意）は標高7314メートルで、イギリス人によって初登頂された

国境の町プンツォリン（アモ川のほとりにある）

た。東から来た商人があり、それは中華の太陽の下から来たのだと自称している。彼等はひげがなく、おおむね親切であるといわれている。しかし、山の反対側からすなわち北から来た人達は、すこぶる冷たいといわれている。北からきた商人は羊毛織物、帽子、白い長くつ下、ロシア人はトルコ製のくつなどで着飾っていた。彼等の国では非常にいい馬がいるが、それは小さく、四、五、六頭から何百頭もの馬や牛をもっている人がある。彼等は牛乳と肉とで生活している。牛の尾を切って売るがその売値はすこぶる高い。なぜならば需要が多く、この部分が珍重されているからである。彼等の髪の毛は一ヤードの長さもある。彼等はそれを象の頭の上に勇敢の証拠としてかけておくのである。それはまたペグ地方や中国で多く使われている。彼等は地面に沢山積んで売買する。彼等は足が非常に速い。

ブータンは、約一八、〇〇〇平方マイルの面積があり、東ヒマラヤの斜面に位している。それは、北はチベット、西はシッキムとチベットのチュンビ峡谷、東南はアッサムや西ベンガルのインド諸邦国と境を接している。東ヒマラヤ山脈の山々は、その国土を多くの大きな峡谷地帯に分けている。その山々がヒマラヤ山頂からくだって来るとき、北東に百マイルもあるブラマプートラ盆地の平野まで長い斜面の山の背を形作るのである。このほとんど平行した山脈は再び分裂して数え切れない小山脈に分かれ、それがまた巨大な迷路のような峡谷を形作っているのである。

大ヒマラヤの一部をなし、その秀峰は、西にある高さ二三、九三〇フィートのチョモラリ山、北にある高度二四、七四〇フィートのクーラカンリ（またはクーガンリ）山で、それは一年中雪で蔽われている。樹林線は約一三、〇〇〇フィートで、松やもみの針葉樹が生えている。

この国の輪郭を説明するに当たって特に重要な特徴は、「黒い山脈」といわれている北から南に走っているヒマラヤ山脈の支脈の一つがブータンを気候的にも民俗学的にもほとんど二分しているかに見えることである。この山脈は、モ川とマナス川との分水嶺を形作っているが、ただペレ峠だけしか渡れない。山脈の東はアッサム丘陵の人々と非常に似ていて、体格は小さくて色が黒い。西の方はチベット・モンゴル系の特徴を備えている。「黒い山脈」はまたモンスーン気流をブータン北部へ深く入りこませ、したがって東部では湿地帯が、西部では峡谷でとまっているのに、雪線のところまで延びているのである。

さらに、ほかに多くの山脈があり、それはおおむね南北に走っている。アモ川とウォン川を分けているマソン・チュン・ドン山脈、ウォン川とモ川とを分けているドキョン峠、最後にブータンの最東部に位置しているタワン山脈がある。

重要ないま一つの特徴は、主流と支流との厖大な川系で全ブータン地域が自然と分断される形になっていることである。インド領沿いに約二〇〇マイル走っているブータンの南部国境は、「ドワール」すなわち関門として知られている、口をあいた峡谷の入口沿いに、北ベンガルとアッサム平原の方に展開している。このようなドワールは一八あるが、その中の一一は、ティスタ

ブータンの地形は、大ざっぱに三地域に分けられる。その第一は、ブラマプートラ盆地の平野に接している丘陵地帯、第二は丘陵と高地との間にある中央ベルト地帯、第三は大ヒマラヤ山脈の分水嶺とチベット国境とにつながる高地帯である。

第一の地帯は小さな帯状の平原と二〇ないし三〇マイルの深いところまである丘陵を含んでいる。鬱蒼たる熱帯の密林で蔽われた山々は、平原の上に荘厳に豁然(かつぜん)と聳え立ち、とつじょ洪水になりそうな川の山峡によってきり裂かれている。高さは海抜三、〇〇〇フィートから八、〇〇〇フィートまで変化している。年間雨量は五一〇ミリに及ぶ。総じて気候は暑くて湿度が高く、モンスーンの季節には不健康だとされている。

第二の地帯は、海抜三、〇〇〇フィートから一〇、〇〇〇フィートの高さの谷間から成り、その分水嶺をなす山の背は、内の方に四〇マイルほど北方に入りこんでいる。谷間は比較的広い幅で平らで降雨も適当であって、わりに人も住んでいて耕作もされている。ここでは山の斜面がずっとゆるやかである。この地帯は、四大峡谷のアモ川、ウォン川、モ川、とマナス川の水に洗われている。

第三の最北端の地帯は標高二四、〇〇〇フィートに達する雪を戴いたヒマラヤ山脈をかかえていて、このあたりの谷間は一一、〇〇〇ないし一八、〇〇〇フィートの高さにある。この地帯は

第二章　前　史

ブータンの前史は、記録されたものは実際には何もない。火事、地震、洪水、内乱が、不幸なことにそれまであった記録という記録をなくしてしまい、今ではほとんどないのである。かつてブータンの首都の一つであったプナカにおこった一八三二年の不慮の火事と、一八九七年の地震が、特にその原因であった。一八九七年の地震は、トンサ県本部図書館をほとんど全部破壊しつくしてしまって、ただわずかばかりの文書が残ったにすぎない。ソナガチの印刷施設も一八三〇年頃の火事で完全に潰滅してしまったのである。

今日、ブータンに初期に旅行した英国人やインド人たちからの、この国になじみ深い伝説についての最初の報告がある。これらの伝説は、コーチ地方（これがブータンにあるのかアッサムにあるのかはっきりしない）から来たサンガルディップという人物について物語られている。西暦七世紀にサンガルディップは、ラクノーテまたはガウルの藩王ケダールと戦って、ベンガルとビハールの国々を征服したが、後にアフラサイの大将であり、ツランまたは韃靼（タルタリ）の王であるビラ

川と西ベンガルのマナス川の間にあり、ほかの七つはマナス川とアッサムのドンセリ川のあいだにある。

ベットのトリラルチャン王配下の家来に再び占領されたのである。
その後、ブータンの歴史は、仏教のドゥク派の興隆によって著しく影響を受けるに至るが、このドゥク派は、ギャンツェの東方約三〇マイルにある有名な僧院のあるラルンのイェセス・ドルジによって創立されたものである。イェセス――そのフルネームはグロ・ゴン・チャンパ・ギャルラス――は西暦一一六〇年に生まれ、一二一〇年に死んだ。ドゥク派は、もともとニンマ派の分派の一つであって、ブータンが分離独立し始めたのは全くイェセスとその配下のためであったと書き記されている。次いでじょじょにラマ教が流入して来て、ラマ教に伴って各地に僧院が設けられ、寺院が建立されたのである。しかし、その国はいまだ依然として多くの好戦的な酋長達の支配下にあったので、中心にまとめる権威のないばらばらの分裂状態になってしまったのである。
この騒乱時代に、シナから一人の若い仏教ラマ僧が、イェセスの後継であるサンギェオンをラルンに訪ねて来た。そこでファゴ・ドゥクゴム・シッポ（ファルチュ・ドゥプゲン・ブドゥンともいう）という名前が与えられたのである。ラルンで数年間勉強した後で、この若いラマ僧は、よくドゥクゴムといわれるが、ラルンの僧院によってブータンに送られ、ブータン西部のチェリ・ドルダムに定住して、そこに妻と家族と共にとどまったのである。そのすぐれたラマ僧としての名声がひろまるにつれて、同地方に当時住んでいた競争相手のラマ僧ラパの嫉妬をよび起こしたのである。ラパは、そのライバルの砦であるチェリ・ドルダムを攻撃しようと決心したが、

ン・バイシュにうち破られたのである。

八世紀の中頃、パドゥマ・サンバワ（蓮華の生れという意味）といわれるインドの導師が仏教の信仰をブータン全土にひろめたのである。当時の主な支配者は、クルトイにおけるケンパジョンのキカラトイとシンズー王ナグチであった。ナグチの宮殿シャンカール・ゴム（文字通り門戸のない鉄の砦の意味）の廃墟は、今日も未だ残っている。セルキヤのシンガラ王の第二王子であったナグチは、シンズー王国を建設したが、さらにその王子達はその王国を大きくして、チベットのドルジ・タグとハルまでひろめたのである。

ナグチがインドの平原の藩王ナブダラと戦った戦闘の最中、その長男が殺された。ナグチは悲しみに打ちひしがれたが、その悲嘆に暮れているとき導師パドゥマ・サンバワがやってきた。ナグチ王女メンモ・ジャシ・キュデンと力を合せて、導師は彼にその子を失った悲しみを忘れさせることができたのである。伝説によれば、ナグチはソロモン王に較べられるが、それはその知恵と勇気に加えて、ほぼ百人もの妻をもっていたことで、しかもそのすべてはインドまたはチベットのもっとも美しい女性たちであったからである。

ナブダラ王は、導師によって仏教に帰依されたが、その結果平和が回復され、境界の杭はケン地方のナタンで打ちこまれたのである。平和の統治は約一世紀つづいたが、その王国はチベットの背教王ランダルマの支配の時代に侵入して来たチベット遊牧民に滅ぼされたのであった。ランダルマ王は西暦八〇三年から八四二年までチベットを統治した。二世紀後に、ブータンは再びチ

つきり分らないが、およそ西暦一五三四年頃であったらしい。ラルンの僧院で、パドゥマ・カルポという有名なドゥク派のラマ僧の下で勉強した。彼はほとんどラルンで貫主（チーフ・ラマ）になるのに成功したが、その対立候補であるカルマ・テンコン・ワンポは、デブ・ツァンパにたすけられて非常に力が強くなったので、シャブドゥン・ナワン・ナムギャルは、困りはてて失望のあまり長い巡礼の旅に出たのである。その旅で彼は一五五七年リンシ峠をへてブータンに着いたのである。そのとき二三歳であったが、後五八歳まで生き延びた。三五年にわたる活動期間でナワン・ドゥクゴムの野心と目標は、精神界のみならず現世の権威を一手に収めることであった。彼の受けた反対は、ラルン僧院のデブ・ツァンパとブータンに前から住んでいたラマ僧の子孫から生じたものであったが、そのため彼はたえず不和に悩まされ、しばしば深刻な戦闘にまきこまれたのである。五、六回もチベット人はブータンを征服しようと試みた。彼等はシムトカあたりまでも進出したが、そのたびごとに敗れて捕虜を沢山残したのである。ある古い年代記作者の報告には次のごとく記されている。

> チベット人はただ死にに来たもので、死体をブータンに残しに来たようなものだ。彼等はブータンの砦を決して包囲しなかったし、また攻略しようともしなかった。ただしかしブータンやチベットの荒れ地に無用な大小の砦をばらまいただけであった。

敗れて逃走した。逃げているうちに彼はアモ川の峡谷に来たのであるが、ここで彼は住民に温かく迎えられ、受け入れられたのである。しかるに、その後ラマ僧ラパはこの親切にしてくれた人人を裏切って、その頃峡谷を支配していたチベット人に売り渡したのである。

一九世紀の末期、ガントクに官邸をたてたシッキムの初代英国代表ジョン・クロード・ホワイトは、ブータンのこの前史の大要を次のように記録している。

その敵を打ち破ってから、ドゥクゴムの権力は非常に増大し、ブータン人の仏教改宗は、チベットからまたほかの四人のラマ僧の到来で一層さかんになったのである。しかし、かくも多くのラマ僧がブータンを訪れて、そこに住みついたにもかかわらず、その多くはドゥク派とちがった宗派だった。しかしそれはブータンを単一権力支配下においたドゥク派リンポチェ、ナワン・ドゥクゴムがほぼ三世紀後に目出度く訪れて来たことの前兆となった象徴的な先駆者としての役割は果したのである。

シャブドゥン・ナワン・ナムギャルという方がよく知られているナワン・ドゥクゴムは、ある貴族の出であった。彼はドルジ・レンパ・メパム・テンパイ・ニミアの子息であった。その母はデバ・キイショパの娘であった。彼は非常な才能に恵まれた早熟の人であった。子供のときの工芸彫刻の見事さは驚くべきもので、その工匠の腕前は抜群であった。彼が生れたのはいつかは

いたラマ僧は少なくとも三倍にはなっていたのである。ワンドゥポドランの僧院は一六三八年に開設され、タシチョ・ゾンは一六四一年に開設された。シャブドゥンの私邸は、現在もトンサの砦の西端に依然として残っている。

シャブドゥン・ナワン・ナムギャルは、ひょうひょうたる人柄であった。プナカでチベット人に対してかくかくたる勝利を占めてわいているときに、ブータンに対しチベットがこれから遠征軍を送るか、それとも軍を帰すかどうかを尋ねられたとき、彼の答えは次の言葉で返って来たという。

おう、連中がやって来ないという確証はない。しかし、我々に何の害も与えないなら、それでいいじゃないか。今度は、こっちに沢山鎧や武器があるから、そのうちにお茶や絹がほしくなるね。

この答えはしたがって予言めいたものになった。もう一度チベットの年代記作者のいうことをひいてみよう。

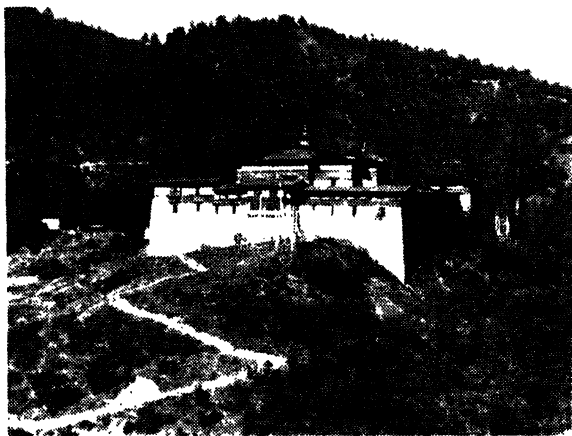
平和の合間に、この国王（シャブドゥン）はいろいろの国家的任務を果すのに全力をあげた。

敗れ去った者からとった戦利品や宝物は、シャブドゥン（ナワン）の富を著しく増大した。彼の優越した名声は、インドだけでなく、遙か彼方のインド北西部のラダークにまで及んだのである。クーチ・ビハールの強力な藩王パドゥマ・ナラヤンは、ネパールのドラビヤ・サヒやプランダール・サヒがしたように、友好関係を求めて贈物をしたのである。

事件の中心からはずれるけれども、シャブドゥンの名声を示すものとして歴史的に記録されている事実がある。それは、パルドク（恐らくはポルトガルの意味）と呼ばれる遙か遠くの国から来た外国人がはてしない大洋を越えてブータンに姿をあらわしたことである。彼等は、それまで見たこともなかった鉄砲、火薬と望遠鏡をもって来て、シャブドゥンに実演をしてみせたのであった！

ブータンにおけるシャブドゥンの治世には、大きな僧院と砦とが沢山建てられた。しかし火事や地震で破壊を免れたものは少ない。シムトカ・ゾン（僧院館）ははじめ一六一七年に建てられ、一六一九年に再建されたが、これが最初に建てられたまま残っている唯一の建物である。その次に古いのがパロ・ゾンで、これは本来医学校として建てられたものであるが、一九〇七年の火事でなくなってしまった。他の砦や僧院は再建されたり、増築されたものが多い。プナカ・ゾンは一六三七年に建てられたものであるが、ここには六〇〇名のラマ僧が住むことができるように設計されたものである。

シャブドゥンはこのような巨大な家を僧侶のために計画したことを非難されると、この建物も時がたてば小さすぎることがわかるだろうと答えたものである。実際一九〇五年にそこに住んで

古城、ドゲ・ゾンの跡（パロの近くにあり
旅行者が必ず立ち寄る所でもある）

シムトカ・ゾン（ティンプーにある）

たとえば、ラマ僧の団体組織をつくったり、これを養ってやったりして彼等を一手に統制し、まじめに真理を追求する者に指導を与えたのである。要するに彼は牧師、僧院長、讃美歌作者、学校長、彫刻(印刷目的のもの)監督、国家と僧院建築の設計家、製本の管理者、カギュール図書館の設立者、施設の管理者、外国侵略を抑えるための軍総司令官等、自分にしたがって来る者は守ってやる支配者であり、仏教と公共の平和に害のある者をこらしめる懲罰者であった。彼はこれらすべてを一身に体現し、その任務を徹底的に能率よく遂行した。彼はまだ無法状態だったブータンに法律を導入した。彼が誇っていたことは、彼はいまだ怠けたり自分の楽しみにふけって時間を浪費したことはなかったということであった。

ブータンの宗教的、現世的統治を推し進めるために、彼はラルン僧院から伴って来た忠実な二人のラマ僧をそれぞれ任に当らせた。その一人たるネタン・ペコール・ジュンネを僧院長に任命し、ラマ僧が守らなければならない戒律をきびしく守らせ、その修道ぶりを監督し、宗教的式典を主催するのに当らせた。ラルン僧院事務総長だったテンジン・デュクギャグという名の第二の僧は、最初のドゥク・デシ（首相）で、その権威は国家の現実的統治にまで及んだのである。また彼は外国人と折衝し、財政収入や国家の資源を管理し、ラマ僧を養う責任をもっていた。要するに彼が国家の現世的事務をつかさどるのに対して、シャブドゥンの方は、僧院と宗教的事項を総括担当したのである。

選挙されるのである。実際は、この選挙の手続といっても、それは西ブータンでも東ブータンでもより強力な知事が指名するというものである。これら二人の知事はたえず相互に争っていて、デブ・ラジャはそのときより強い者が任命されたにすぎないのである。知事はつねにゾンポン（郡長）を任命するが、その知事が権力を失えば、郡長もまた彼と共にやめさせられたのである。郡長の下に、村の各郡落を監督する村長たるニェボーがある。ブータンのような国では、体格のちがいや結びつきの弱い集団の間のちがいがあるために、このような統治組織は長つづきしそうもないし、実際つづくものではなかったのである。その主な弱点は、地方酋長の間に抗争がたえまないからであった。知事の称号を受けるに足るだけの力や権威をもった者は、誰でも自分の選んだデブ・ラジャを任命することが出来たのである。その支配権は、彼がより強力な反対者によって追い出されない限りつづいたのである。

第一代シャブドゥンは、実に非凡な人物であった。一五九二年彼の死後、三つの再化身というものがあった。彼の体は、チョギャル（国王）として再現する。彼の声はチョレトゥルクとして、彼の心はティ・リンポチェとして化身する。この化身は後になると消え去って行くのである。しかし、シャブドゥンの死後、国内の不和対立がまたさかんとなり、統一は破れ、ブータンは、また多くの敵対する酋長が割拠するところとなってしまうのである。ここでクロード・ホワイトのブータン報告は終わっている。

このような不幸な事件がおこったりしたにしても、ある程度の機構が出来ていたのである。まずそれは、チョギャルとドゥク・デシがあり、その下に県知事に当るペンロップと呼ばれる役人があり、それはレンチェンとして知られている七人委員会の長老達であった。ペンロップは、西部パロ、東部トンサ、中央部ドゥカの各県の知事である。彼等は政府の職についている限り、七人委員会に出なければならなかった。彼等は非常時にはつねに来ていることが義務づけられていた。委員会の他の構成員は、国王の第一書記であるラム・ジンポン、デブ・ラジャの第一書記であるデブ・ジンポンとタシチョ・ゾン、プナカ及びワンドゥポドラン・ゾンの各郡長、それに裁判長官のジョーム・カリンであった。

国王は、まことに化身でなければならなかった。子供の時に彼は選ばれた者として認められる前にある超自然的な資質を示さなければならなかった。他方、デブ・ラジャの方は、委員会員たるにふさわしい資格があるとされた主な役人の中から選抜された終身メンバーの委員会によって

た。この条約によって、ブータン人は藩王ドゥレンデル・ナラインとその弟を釈放することに同意し、東印度会社はその紛争中に占領した土地を放棄した。東印度会社は、ブータン人の貿易商人が税金を課されずにランプール（その当時ベンガルにあった市場町）に品物をもちこむことを許可したのである。

次いで特別使節団と使節が何回かブータンと同会社の間に交換された。ジョージ・ボーグルは、ブータンと交渉するためにあらかじめ派遣されていたが、その結果一七七四年の条約の成立を見たのである。一七七五年にボーグルの後をひき継いだハミルトンは、ジャルパイグリ地区のファラカラにデブ・ラジャの要求を検討するために出張した。ハミルトンは、一七七七年七月にブータンに再び帰って来て、後をついだばかりの新しいデブ・ラジャに祝意を表したのであった。

それから東印度会社とブータンとの間の緊張した関係にはしばらく小康状態がつづいたが、その間の例外は一七八三年サミュエル・ターナー大尉に率いられた商業使節団が行ったことである。以後一八二六年英国人がアッサムを占領するまでほとんど交渉はなかった。ブータンと東南国境を長く接しているアッサムの併合は、ブータンを刺戟したのであって、ブータンはこの新たな英国の進出を一連の侵略とみたのである。英国の報復行為はひきつづいて、ドワールを越えた地域一帯は、英国人に占領されたのである。このたえまない紛争を解決しようとして東印度会社は、インド人のキシェン・カンタ・ボースを当時ブータンのデブ・ラジャの居た都であったプナカに派遣した。さらに、R・B・ペンバートン大尉指揮下の大規模の使節団が一八三七年にひき

第三章　英国統治時代

ブータンの国情が非常に乱れて混沌としているときに、東印度会社という形で新しい勢力が入りこんで来た。東印度会社の職員とブータン人との最初の出合いは、一七七二年であった。ブータン人は、クーチ・ビハールに対する権利をもち出したのである。ブータン人はこの国に侵入し藩王(ラジャ)ドゥレンデル・ナラインとその弟デワン・デオを人質にさらってしまった。クーチ・ビハールは東印度会社に助けを求めたが、それはすぐに与えられたのである。ジョーンズ大尉指揮下の小部隊がブータン人を国境から追い出すために派遣されたが、この遠征はものをいって、ブータン人はクーチ・ビハールから退却した。そこでブータン人は当時ダライ・ラマはまだ若すぎて大事な役割を果たせない未成年者であったから、チベットの摂政であったタシ・ラマに助けを求めた。タシ・ラマはそのときインド総督であったウォレン・ヘイスチングに書面を送り、その動きで総督は講和条約の交渉を用意したのである。

一七七四年四月に、カルカッタのウィリアム城で東印度会社とブータン人との条約が調印され

▲ブータンでは珍しい異国風のチョルテン（チェンデビの近くにある）

このように形の小さいチョルテンもある

タルチョー（祈禱旗のことをいい旗に経文が書いてある）

つづき訪れたが、驚いたことに、ペンバートン大尉はブータン人と交渉、取引をすることが不可能であることを知ったのである。その使節団はブータンと実際にちゃんとした協定は一つもまとめることは出来なかった。彼は、英国とブータンとの間の関係が緊張したままで、きわめて不満足な状態の中にカルカッタに帰還したのである。

英国人がブータン人に要求した年貢の支払いが紛争の種となって、ブータン人はまた英領土を攻撃し侵入することになった。明らかに我慢できなくなった英国人は、一八六三年デブ・ラジャと国王に信書を送り、また新たな使節団がその要求事項を説明するために送られるであろうと申入れたのである。アシュレー・イーデン卿に率いられた使節団は、一八六四年三月プナカに到着した。不幸なことに彼は冷たくあしらわれて、当時ブータンの支配者であったトンサ知事に辱しめを受けたのである。あるときには、水菓子がアシュレーの顔にひっかけられ、それは大笑いの種になったといわれている。このことは英国を憤激させ、アシュレーのインド帰還と共にブータン人を処罰しようと決意させたのである。約七千の遠征軍が二隊に分れて、一隊は西部に他の隊は東部に向かって一八六四年一一月出発した。たいした困難にあわないで遠征軍は一八六五年にドワール地方を占領し、それからわずか数カ月、デブ・ラジャは講和の申入れをせざるをえなくなり、ドワールの返還を要請したのである。

講和条約は一八六五年の一一月ブータンのシンチュラで調印された。この条約の規定によれば英国はベンガルのドワール地方を恒久的に占領することを宣言し、またそれと同時に、ブータン

ブータン経由でチュンビ峡谷を抜けてチベットに出る直接ルートを探すためにブータンの協力をきわめて切実に必要としたのである。

ヤングハズバンド大佐指揮下の英国軍が一九〇四年チベットを軍事的に侵略したことは、ブータンと英国との間の関係において転換点となった。いまやブータンの押しもおされぬ支配者であるトンサ知事ウギェン・ワンチュックは、英国のラサ遠征隊に参加し、協定をもたらすために個人的影響力を用いようと決心した。この遠征は、チベットをして英国と交渉を開始することをやむなくさせた点で成功したものであった。この交渉は一九〇四年の英国・チベット協定の成立を招いた。ウギェン・ワンチュックの英国に対する寄与はおおい英国で認められて、インド帝国ナイトコマンダーという称号が彼に与えられたのである。

ブータンの国王はこの同じ運命的な年に逝去し、その再化身は三年間現われなかった。デブ・ラジャは、その宗教的並に現世的な支配権を握って統治した。しかしながら、デブ・ラジャは生まれながらの世捨て人であって、彼は精神界のことのみに専念したのである。ほどなくトンサ知事が実際的な支配権を掌握し、ブータンのいわゆる実力者となったのである。一九〇七年、英国は、シッキムのガントク駐在政治代表ジョン・クロード・ホワイトを通じて、ラマ僧とその支持者にウギェン・ワンチュックがブータンの国王に任命されるべき旨を伝えたのである。この考えには全員一致の賛成があり、ウギェン・ワンチュックはブータンの国王と宣言されたのであった。彼は強い性格の持主であったので、一九二六年の死にいたるまで非常な知力と能力をもって

のデブ・ラジャに、二万五千ルピーの支払い、条約の義務を忠実に守った場合倍額にすることを約束したのである。この友好的取り決めにかかわらず、また問題が起こったのである。今度はアッサムのドワール地方に関することであった。数年の間英国は補助金手当の支払を中止した。ブータンは内紛のために弱くなったが、トンサ知事のウギェン・ワンチュックは、デブ・ラジャの支持者を打破った一八八五年にようやく政治的優越を確立したのである。しかしティンプーの敗北した郡長やその他の者がチベットに逃亡し、ダライ・ラマに援助を乞うに至ったので、ブータン紛争に終止符を打ったわけではなかった。

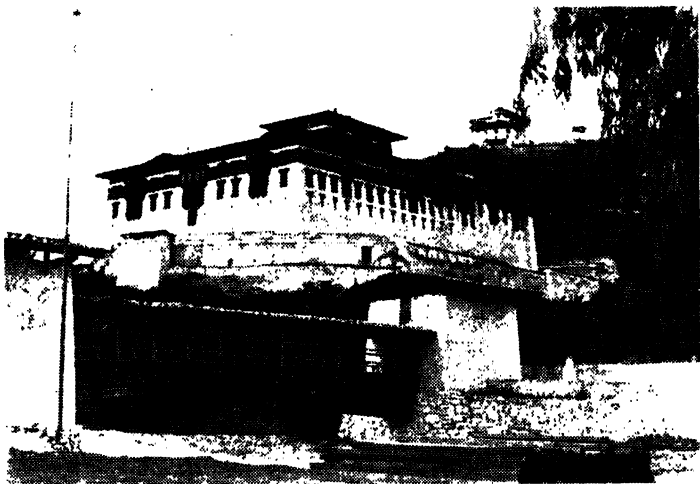
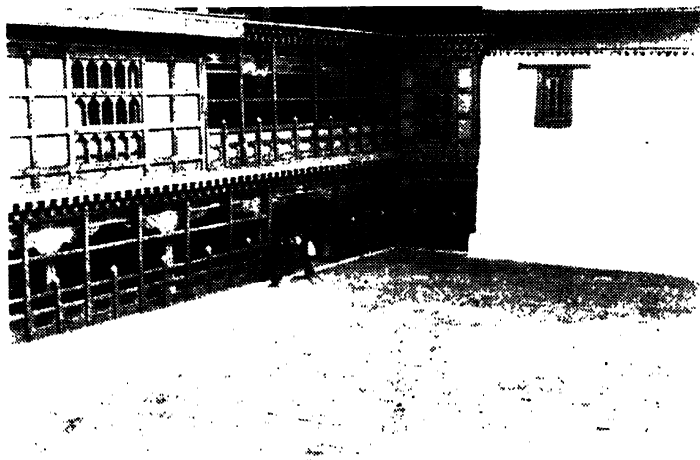
そのうちに、英国人はチベット人との間に、主にシッキム国境の相次ぐ侵犯をめぐって問題を起こしたが、英国人がトンサの有力な知事であるウギェン・ワンチュックと共同戦線を張る絶好の機会をつくったのである。英国は、その当時ベンガル地方のカリンポンに住んでいたウギェン・ワンチュックの片腕ウギェン・カジの援助をもとめた。ウギェン・カジは一八九九年に英国とチベット問題の交渉を始めることはいいことだという意味のことを文書にしてダライ・ラマに送るように委任されたのである。しかしこのように探りを入れてみたことも何の効果を生まなかった。結局後のカーゾン卿は再びウギェン・カジに接近して、ダライ・ラマに対する個人的書面を彼から受けとらせようとした。こうした努力も何の返答をもたらさなかった。実際その使節はダライ・ラマに書面を伝達することなく帰ってしまったのである。こうした相次ぐ試みが何の効果もなかったことを知って、英国政府はチベットに対する軍事遠征を決意したのである。英国は、

第四章　インド独立以後

ウギェン・ワンチュックの王子である国王ジグミ・ワンチュックは、インドが一九四七年その独立を獲得したときのブータンの指導的な進歩的支配者であった。独立国になってインドが手をつけた最初の措置は、ブータンと英国政府の間の旧関係に基く条約を改正することであった。新条約は、ダージリンで起草され一九四九年八月八日調印された（付録Ⅸを参照）。総じて一九一〇年の条約の若干の特徴は残存して居り、インドはブータンの国内政治には干渉せず、他方ブータンは外交関係に関する限り、インドの勧告指導を受けることに同意したのである。インド政府は、さらにブータンに対して年間十万ルピーから五十万ルピーに及ぶブータン援助支払を増加したのである。一八六五年英国に併合されたデワンギリの三二平方マイルの土地はブータンに返された。

国王ジグミ・ワンチュックは、一九五二年三月逝去したが、その王子ジグミ・ドルジ・ワンチュックは国王として国内統治を続け、正式には一九五二年一〇月任命された。この事件の一年前、ジグミ・ドルジ・ワンチュックは、藩王ソナム・トブギェ・ドルジの娘ケサン・ラ姫と結婚

ブータンを統治し自らの運命を切り開いたのであるが、一九二六年彼の死と共に二四歳になる長子ジグミ・ワンチュックが彼のあとを継いだのである。

小さな事件であるが、しかし相当重要であったのは、一九〇六年に英国政府がブータンとの関係を処理するに当って、その責任をベンガル地方政庁からインド政府に移管することを決定したことである。こうしてブータンは、冬はカルカッタにあり夏はシムラにあった英国のインド政府総督府と直接交渉をするようになったのである。最後のデブ・ラジャであるチョレ・トゥルクは一九〇七年に亡くなったが、完全な権威と絶対的な支配権を国王ウギェン・ワンチュックに委ねたのである。新条約は一九一〇年英国政府によってブータンと結ばれて、一八六五年のシンチュラ条約の条項を若干修正し、また一万ルピーまで年次支払を増額したのである。この修正条約によって英国政府はブータンの内政に干渉しないことを約束し、他方ブータンはその外交関係に関してインド政府が勧告して指導することを承認したのである。

▲パロにあるリンプン・ゾン　▼リンプン・ゾンの中庭

した。彼女は、当時カリンポンのブータン代表であったジグミ・パルデン・ドルジの姉妹でもあった。後継たるジグミ・シンギは国王ジグミ・ドルジ・ワンチュックの長子として一九五五年一一月に生まれたが、後にクラウン・プリンスの称号を受けたのである。

一九六三年、インド政府は、ブータンの支配者としての称号をマハラジャ殿下からドルック・ギャルポ陛下に変える協定を結んだ。

チベットとの取引きで英国政府との交渉を一八九九年に開始し、次の年にそれをうまくすすめたウギェン・カジのことにふれることを許して頂きたいが、それは歴史的展望をまっとうするためにほかならない。かつてウギェン・カジは英国政府とダライ・ラマの連絡者として活躍したが、彼はカリンポンにある官邸に駐在しているブータン政府の正式代表でもあったのである。彼はほかの使節としても抜群の働きをし一八六五年の条約改正にも重要な役割を果たした。英国に代わって非常な貢献があったことが認められて、彼の功績は一九〇八年に「ラジャ(藩王)」の称号が与えられるという光栄に浴したのである。

藩王ウギェンの子息であるソナム・トブギェ、略称ラジー・ドルジは父のあとをひきついで一九一六年、ブータン政府の代表及び八州郡長の役を果した。それのみならず、彼は英国政府からシッキムにおける英国政府代表に対するブータン側の補佐役にも任命されたのである。彼は、英国とブータン両政府の間に立って二重の役割を果たしつつカリンポンに引続き滞在したのであった。一九四六年強大な権限をもっていた藩王ソナム・トブギェは、カリンポンで政府代表の地位

一九〇六年以後、ブータンとインドとの関係は、前に述べたようにシッキムの英国代表によって管理されていたのである。インド政府の役人とブータンとの間の交渉は、表面的なものであって、政治代表とその部下が時折ブータンの祭典の儀礼に参加するにとどまった。一九四七年インドの独立以後、この可重ではあるが沈滞した関係は、二国間のより活潑な積極的な諒解関係に転じはじめたのである。

最初の積極的な交渉は、一九四八年早々に緒についた。それは、藩王ソナム・トブギェ・ドルジを代表とする使節団が英国から独立したインド政府とブータン政府との間の新条約を交渉するためにニューデリーを訪れたからであった。ブータンはインドとの関係を明確にし、インドが英国の統治下にあったときに非常に損われていた誇りをとり戻そうと望んだのである。ブータン使節団は、インドの新政府に緊密かつ友好的な関係を維持するための真剣な固い意図を確認したのである。両国間のこの交渉の成果は、すでにふれた一九四九年のインド・ブータン友好条約の調印に見られたのであった。

爾来、インドとブータンの間の密接な関係をうちたてた重要な出来事が相次いで起るのである。ブータンの支配者である国王ジグミ・ドルジ・ワンチュックは、インド首相ジャワハルラル・ネルーからの招待に応えて公式のインド訪問をしたのである。最初の公式訪問は一九五四年ニューデリー訪問であり、これについだのが、国王がカルカッタ、タタナガール、ブダガヤ、ベナレスを旅行した一九五六年一一月の第二回訪問であった。その間、一九五五年には、インド外

から引退し、デブ・ジムポンすなわち国王の官房長にさせられた。藩王ソナム・トブギェは、シッキムの国王の妹とずっと以前に結婚していて、高い地位にあったことは記録さるべきである。彼は一九五三年九月逝去した。

その長子ジグミ・パルデン・ドルジは一九四六年彼のあとを継ぎ、ブータン政府の代表であると共に、シッキムにおける英国政治代表の補佐役であるという二重の職務を果たさねばならなかったのである。ジグミ・ドルジは一九五一年、治療のために渡欧した短期間その地位を離れたが、その不在中その姉が代表の地位に任命された。しかし彼が帰国するとジグミ・ドルジは再びカリンポンでその職につき、一九六二年ローレンス・シトリングが任命されるまで引きつづきその職にあった。一九五七年以来、ドルジのより重要な仕事は、ドルック・ギャルポに対する主席第一顧問であることであった。彼は非常に人気があったので、インドの新聞は彼をブータンの首相であるとまでいったのである。不幸なことに、ジグミ・パルデン・ドルジの生涯はブータンの幸福のために捧げられたものであったのに、一九六四年四月プンツォリンで暗殺されるという最期を遂げたのであった。

この悲劇的事件の後しばらくの間、ジグミ・ドルジの弟レンドップ・ドルジがその職務をひきついだが、しかしながら彼の在任期間は、益々高まる内紛で振りまわされていた。一九六五年七月、ドルック・ギャルポの生涯の試練たる政府機構における根本的な大変化が起こったのである。ドルック・ギャルポ自身は、ブータン首相の地位に立っていた。

諸君が自ら生きる道を選ぶことの出来る独立国であり、諸君の意見に従って、進歩の道をとりつづけるべきだということであって、それを明らかにすることは重要なことである。それと同時に我々両国は相互に善意をもって生きて行かなければならない。我々は同じヒマラヤ家族の一員であり、相互に助け合う友好的な隣人として生きなければならない。インドとブータンの両国の自由は、外部からの何ものにも損われぬように擁護されなければならない。

このことは、歴史的な事件であって、両国の首脳会談は、ブータンの経済的、社会的発展のさまざまな側面に実りある討論の絶好の機会を与えたのである。インド首相とブータン支配者の間のこうした会談は、一九六一年から一九六六年に至る期間のブータン第一次開発計画の実現を招いたのである。インドの技術者は、ブータンの五カ年計画を完遂するために招待された。この計画は最終案がつくられ、その細目が一九六一年七月に発表されたのである。その第一段階では道路がブータンとインドとを結ぶために建設されなければならなかった。交通施設がつくられると共に、行政内部機構もつくられ、公衆衛生、教育、農業発展の分野への計画も遂行されることが出来るようになったのである。同計画の全経費はインド政府によって賄われ、それは一億七千ルピーに上ったのである。

一九六〇年五月ラム・スバ・シン博士引率下のインド国会議員団は、ブータン政府によってパロに招かれた。その後一九六一年カリンポンにあるブータン代表に伴われて国王ジグミ・ドルジ

務大臣R・K・ネルーとインド官吏一行が西ブータンの主要都市パロをブータン政府の招待で訪問したのである。

一九五八年九月、チベットを訪問することを計画していたインド首相は、その予定を変更してその代りブータンを訪れたのであった。彼は、ブータンの西部にある主要都市パロに通ずる当時ただ一つだけあった道をとって行ったのである。シッキムの首都ガントクからは七日間の困難な旅をつづけなければならなかったのであった。この旅行の最初の訪問地は、シッキムからチベットのチュンビ峡谷に至る一四、七〇〇フィートの高い峠であるロ峠であった。それから谷を越えるのはやっとらくになり、馬に乗り、夜は夜営して遂にパロに到達したのであった。国王ジグミ・ドルジ・ワンチュックとブータンの高官とは、そこでジャワハルラル・ネルーとその一行を出迎えたのである。首相は、その令嬢であるインディラ・ガンジー現首相を伴っていたのであった。

ネルー首相はブータンにその友好関係を明らかにして、一九五八年九月二三日のパロで開かれた名士の大集会で諸問題に理解を示したのであった。インド首相の言葉を引用すれば次の通りである。

インドは強大な国であり、ブータンは小さな国であるので、インドはブータンに圧力を加えたがっていると思う人があるかも知れない。この意味において、我々のただ一つ望むことは、

1968年、ガンジー・インド首相をティンプー飛行場に迎える故ドルック・ギャルポ（ブータン王）

ドルック・ギャルポとジムメ・シンギ王子

は、マドラス、マドラ、バンガロール、マイソール、ボンベイ、アジャンタ、エローラを含むインド中央南部に長い旅行をしたのである。このようなインド・ブータン間の交流は、長年の間つづいてますます緊密な友好関係をうちたて、こうして両国の理解を深めることになるのである。これと同時に、インド技術者が手がけた道路及び交通建設計画の結果として、ブータンはしだいに孤立から目ざめ、外界との接触をもつようになってきたのである。

ブータンは、今まで近づきにくかったために、世界からとりのこされた未だ未知の伝説的な国であった。それは神秘的な東洋における秘境であった。しかしながら、インドはブータンを助けてその孤立から抜け出させ、外界との交渉を増すようにさせたのである。この時代に起こった二つの出来事は特に注目に値する。ブータンからの要請に従って、インドはブータンが一九六一年コロンボ・プランの機関の一員になることを後押しすることに同意したことである。その結果、ブータンは一九六三年同機関の正式のメンバーとして参加が認可されたのである。ブータンはそれ以後その活動に参加し、利益を受けて来たのである。それにひきつづいた第二の事件は、ブータンが世界郵便連合に加盟したことであった。これは一九六六年四月から六月にかけて、ドルック・ギャルポがニューデリーを公式訪問したときの討議事項であった。インド政府はまた喜んでこの国際機関の加盟にブータンのスポンサーになることに同意した。インドがこの二つの機関の加盟にスポンサーになったことは、ブータンが他の国との関係のみならず、世界の他の国々との交渉においてきわめて重要であることが分ったのである。

分感謝されているところである。私はこの機会を借りて、インドの首相に過去五年間ブータンのなしとげた社会的経済的進歩をお知らせしたいと思う。その進歩はインド政府の惜しみない援助のお蔭であると共に、わが国の経済開発活動を継続するだけでなく拡大させたいという大きな要望があるからである。インドは今後もひきつづいてブータンに必要な技術的財政的援助を与えるであろうという首相の確約に感動している。

しかしながらそれはそれとして、インドのブータンに対する政策の基調をなしているのは二つの要因である。その一つは、ブータンの外交関係について、一九四九年のインド・ブータン条約によってインドが責任をもっていることであり、いま一つは、一九五八年九月のネルー首相のパロ演説に明らかにされているように、インドが「ブータンの防衛者」としての役割をもっているということである。これはインド自身の防衛政策の論理的帰結でもあるのである。インドは侵略的で敵対的なブータンには黙っていられないし、また中国支配下の隣国を放任してはおけない。このことの重要性は、ブータンが南部で西ベンガルとアッサムのインド諸国と二〇〇マイルの国境を接していること、パキスタンの東部は、二国の間にあるインド領域から僅か二、三マイルしかはなれていない近接した地位にあるということが分れば、明らかになるであろう。インドの防衛線は、それゆえに実際にはブータンをチベットから分離しているヒマラヤ山脈の分水嶺に沿っているということができるのである。

ブータンのインドとの友好関係は、相互の国家的利益に基くだけでなく、地理的実状によるものなのである。それは、地理的には、ヒマラヤの真中、大山脈の南腹に位しているからであり、またその福祉と経済開発が進むのは、ブータンが国境を接している南の地方たるインドのアッサムと西ベンガル二州と密接に好むと好まざるとにかかわらず関係しているからである。ブータン人の生活様式の特徴や民主的伝統の行き方を信奉していることは、つねに宗教、文化、自由を同様に尊重して来たインド人民と運命的なつながりをもっていることを意味している。このインドとブータンの間の切ってもきれない深い関係は、利益と目的の同一性の上に立っているのである。インドの側では、この利益の類同性は、ブータンが国家として独立別個の存在であることをみとめていることの証拠であるとしているのである。インドは、ブータンが経済的進歩発展を求めるのを助け、また国際社会で平等の地位の与えられる機会をつねに求めることによって、口先だけでなく実際にその目的を表明してきたのである。

ブータンのインドに対する態度と開発に対するインドの援助をブータンが理解していることは一九六六年五月ドルック・ギャルボのジグミ・ドルジ・ワンチュックがそのニューデリー訪問を終わるに当たって新聞に公表した次の言葉で明らかにされている。

私はインド政府が我々の問題について示した同情と理解に深く感激している。インド政府によって与えられた援助と勧告はわれわれにとって非常に価値があり、わが政府人民によって十

第五章　北方の隣邦との関係

ブータン初期の歴史で、われわれがすでに感ずいたことは、ブータンが北方で隣接したチベットと結びついていて伝統的、宗教的、文化的な分野で特別に似たところがあるということであった。それにもかかわらず、明らかに個人主義的なブータン人は、他国に卑屈になるという様子はほとんどなかったのである。独自な種類のラマ的仏教を信じ固執しつづけたために、ブータン人はチベットと中国との双方から独立している自由を保ってきたのである。しかしながら、ブータンとその隣邦との最近の関係をちょっと調べてみれば、ブータンの立場をもっとよく理解できるであろう。

一九〇四年ラサからヤングハズバンドの遠征隊が撤退してから一九一〇年までの間に、中国は、チベットを中国の一県にしようという意図をもって、その支配権を確保するため全力を傾けたのであった。少なくとも短期間中国はそれに成功した。その拡張時代、中国はチベット国境でとどまろうとはしなかった。一九〇七年中国のラサ代表は、ブータンの首長に対して次のような

ブータンの方としても、それ自身の利害から、また自らの文化、制度、領土を保全したいという切実な要求を自覚すれば、インドの責任ある役割を十分に認め、その態度を諒とするであろう。インドの支持があってこそ、ブータンは国境で侵略があったり、ブータンの内政に不当な干渉があったりすれば、中国に待ったをかけ、中国に反省させることが出来るのである。一たびブータンがその孤立を放棄して世界の他の部分と接触をもつようになれば、ブータンは自然と世界史の潮流にひきずりこまれることになり、程なく国際社会の中でその存在を主張することになるであろう。

バザールの露天商（お客がなければ終日、編物をしている）

プナカのマーケット

洪水に襲われたパロのバザール

傲岸な文書を送ったのである。

ブータン人は天帝である中国皇帝の臣下である。貴国のデブ・ラジャ及び二県知事は、ブータンがえらいと考えているが、その支配者の命令に注意を払わないでは済ませない。ブータンは（英国の）進入を防ぐ南の関門である。中国代表（Popon）は貴国の天候、作物などの監視を行なう。デブ・ラジャは貿易を促進し農民の状態をよくするように努力すべし。もし援助を欲するならば、申し出よ。

ちょうどこの頃、ギャンツェに駐在していた中国代表は西ブータンの都パロを訪問し、ブータンに中国の宣伝を大いに試みたのである。ネパール、ブータン、シッキムの三国は、中国人によれば、「人間の口のぐるりにならんでいる臼歯のようなもの」である。のみならず、中国は、ブータンに中国貨幣の流通を「命令」しようとしたのである。ブータンと英国との間に結ばれた一九一〇年の条約後でさえも、中国は再三ブータンの国内事項に干渉しようと試みた。その当時シッキム駐在の英国代表であったチャールス・ベル卿は次のように述べている。

温和な気候だし、土地は四分の一しかブータン人自身はもっていないにせよ肥沃な土地なので、ブータンは中国の侵略と拡張に恰好な対象であった。すぐではなかったが後でじょじょに

ような接近は、英国政府との一九一〇年の条約、後になって一九四九年のインド・ブータン条約と相容れないものであった。それは、ブータンの外交関係はインド政府の指導を受くべきであり、いかなる行動もインドの関心事であるということは、この条約の条項から明らかであった。ネルー・インド首相は一九五九年九月の周恩来中国首相宛のコミュニケにおいて、この点に関する疑問を一掃したのである。その説くところは次のごとくであった。

シッキム、ブータンの間の境界については、今日の討論範囲に入らないという貴下の主張の意味はわれわれには納得できない。事実中国の世界地図はブータンのある部分をチベットの一部であると指示しているのである。ブータンとの条約関係において、インド政府は、ブータンの外交に関する事項につき他国政府と交渉する排他的権限をもっている。事実われわれは、ブータン政府に代わって色々の問題について交渉してきたのである。ブータンとチベットとの境界に関して中国地図の問題を訂正することは、それゆえに同地方における中国のチベット地区とインドとの境界線に沿って検討せられるべき事柄になるわけである。

ブータンは一九四九年のインド・ブータン条約の条項をこのように受けとり、ブータンはチベットの境界線と重大問題に関して中国政府と交渉することを繰返してインド政府に要請しているのである。一九六〇年、ブータン国会は、全員一致で中国の地図にあるブータン国境には明らか

中国からの植民がひきつづいたらしい。それは、蒙古平原が北支の人にねらわれていたのと同様に気候と地味とが南支の人にねらわれていたからである。中国が過剰人口の吐け口をここに求めたのは当然であった。というのは、中国は蒙古人にその国境は中国の国境にほかならないとみとめさせ、チベット国境は、ネパール、シッキム、ブータン、いやビルマでさえもその自然領域の中にあるものと見なしていたからである。

しかしながら、一九一〇年の条約を楯にして、ブータン政府は外交問題に関しては英国の権限を受け入れ、英国政府によって与えられる勧告指導に同意し、紛争はすべて英国の調停に任せるということを承認したのである。年間五万ルピーの補助金は倍額にされた。この取引きが出来たのは、英国政府がブータンの内政に干渉しないという諒解があったからである。その条約が重要であることが分ったのは、ブータンの「植民化」をさらにすすめようとする中国の試みに実際ストップをかけたからである。中国がこの舞台からまったく手をひいたのは、一九〇九年であるが、そのとき中国はブータンの北部国境からほど遠くない東チベットのバタン附近の荒れはてた地域に人民を送る懸命な努力をしたことで一層明らかになったのである。

ブータン問題に直接干渉をしようという試みはさまたげられたけれども、中国は相次ぐ書面通告で、支配者に贈物をしながらブータンと直接交渉を続けたのである。直接交渉関係をつくり上げようとする努力は、一九四三年、一九四七年、一九五一年、一九五三年に明らかにされた。この

一九〇四年のヤングハズバンドのラサ遠征の時に当たってブータンは、英国政府とチベットの間に起こった紛争の解決に手を貸すための橋渡し役だと自ら任じたのである。一九一一年五月パロに着いた中国官憲は、パロ知事と会見することが出来なかった。その後何度も中国が試みても、ブータンとある種の関係をつくりあげることに失敗したことは、すべて中国の干渉を拒否するブータンの意思を確証するものにほかならない。

一九六一年ブータンは、重々しい態度で、中国の経済開発援助の申入れを拒み、その代わりインドの援助をうけ入れた。さらにインドが防衛の責任をとることに同意したのである。ブータンの国王（ドルック・ギャルポ）は、ブータンは中国の申入れを受けたけれども、すべてこれを拒絶したと一九六一年二月に公然とカルカッタで声明した。その後同じ二月、ネルー首相は議会で演説し、ブータン防衛の全責任を果すべきことにインドは同意したと声明したのである。ネルーはまた、この機会にブータンに対する侵略はインドに対する直接の侵略であることを確認した。この声明はブータンで歓迎され、あまねく承認を受けたのである。しかも、いぜんとして中国は、緊張状態をつづけ、ことある毎にブータンに高圧的態度をとっているのである。中国の好戦的態度の最も最近の例は、一九六六年四月と九月、ブータン南西部のドカン・ラ地域に武力侵入したことである。それはシッキムとチュンビ峡谷との三角地帯の近くにあるところで、ブータンの要請に基づいてインド政府から抗議を申込むことになったのである。それにもかかわらず、中国の侵略的な行動はブータンにほとんど威圧を加えていないのである。

に間違いがあることを指摘している。そこで、ブータンとインドとの友好関係ならびにブータン外交関係に関するインドの責任ある役割には何の疑いを挟むものはなかったのである。

この見解に基づいてインド政府は中国政府に対して一九六〇年四月二五日付の通告で、ブータンの外交関係は、条約規定に従ってインドのかかわるところであり責任であるということを中国政府に注意を促しているのである。その通告は、さらに中国政府に対してチベットにおけるブータンの飛領土に対する支配権の回復を要請している。この通告に対して何の積極的な回答はなかったが、同時に周首相は「インドのシッキムとの関係を中国は尊重する」と新聞記者会見で述べたのである。しばらくして中国政府は首相の声明を誤解して無視しようとしたのである。今日も、中国の地図はいぜんとして約三百平方マイルのブータン領土を自国の国土内に入れており、中国軍はチベットとブータンとの国境の各地点に駐屯しているのである。

数世紀の間ブータンは熱心にその王国の主権を守りつづけて来た。そして繰返してブータンがチベットあるいは中国に従属しているということを否定して来たのである。例えば一八八五年、ブータンはラサの中国代表から来た命令、つまり県知事によって追放された酋長の引渡を中国のラサ駐在官吏が要求して来たことを拒否している。一八八八年には再びまた、シッキム紛争に際しては、ブータンはチベットの援助要請をうけいれることを拒んでいるのである。この態度が再び繰返されたのは、その後チベットが予想される英国の遠征に対して共同措置をとるようにブータンにパーリ来訪を要請したときにも拒否したことに示されたのである。

ワン族、シャパ族、パロパ族、ハパ族の使っている言葉とちがった方言を話している。沢山の数があるのは、ブータンの東部および南東に住んでいるシャルチュップ族である。この種族は、この国に定住して基礎をきずいた原住民であると信ぜられている。シャルチュップ族とクルテパ族とは、農耕にすぐれているのみでなく、牛をよく飼育し、また商売にも従事している。これら原住民二種族のほかに、西暦前からながくその地に住んでいたと考えられているケング族にブムタップ族とがある。ウォン川、パロ川、ハ川流域とプナカ峡谷に住んでいる人達は、ほとんど二千年近くも住みついていていても、新参者（ニューカマー）と考えられている。西ブータン人の話している言語は、チベット語に近い。たとえそうであってもそこには言語的な変化が起きている。この言語はゾンカ語と呼ばれて、最近ではブータンの公用語になっている。

宗　教

この国の原始宗教は、ポン（またはボン）といわれ、魔法を実際に行なう精霊や幽霊を信じ拝む有霊信仰である。実にそれは蛇の魔術、魔法、崇拝が奇妙にまじり合ったものである。精霊は木にも岩にも山の頂きにも空の中にも彷徨しているが、いいものもあるけれどもわるい霊の方が多い。こうした精霊は、簡単な捧げもの、例えば石やぼろ切れや木の小枝などで拝まれ御機嫌伺いをされねばならないのである。魔術師、魔法女は、悪霊をなくして善霊をもって来る力をもつ。ポン教の典礼は、病気やその他の災害をもって来ると思われる悪魔を追払い、動物や時には人間

第六章　人民についての詳報

ブータンは推定人口約九〇万である。ブータン人の大部分は、インド蒙古民族で、約二割がネパール系の出である。国全体の人口密度は希薄で、一平方マイル当たり五〇人である。しかし南方では事情がちがって、ネパール人が圧倒的に多く、チランの中央南部のあたりは特に人口稠密である。その上、一九五九年以来ブータンに住んで職を求めているチベット難民の数は三千人にも達したのである。

ブータン人は重労働にたえられるということで名高い。彼等は強健で辛抱づよい人民で、訓練が行届きまとまっており、民族的誇りが強く、それがブータン人を結集しているのである。ユーモアのセンスが鋭敏で、しかも礼儀正しくて仲よくやって行く特性がある。数世紀にわたって外界から孤立していたので、自分達自身の言語、外からの影響を受けていない文化習慣を発展させたのは当然のことであった。しかし、文化的、宗教的に統一されていても、ブータンはいくつかのことなった言語集団がある。ブムタップ族、シャルチュップ族、クルテパ族、ケング族などは、

服装

ラマ僧の着衣は、右肩は裸のままの袖なしのシャツで、左肩の方はゆったりとかけられている暗紅色または深紅の色をしたけさである。普通の男の着物は、コー（Kho）といって、長くてゆったりとして膝の長さの衣服で、体をくるんで腰のところを帯でしめている着物と頗るよく似ている。コーの上の方は、ひっぱりあげられたところが縫いこんであるので、ポケットの役をする大きなひだが出来ていて、その中に茶碗、なべ、襟巻、小刀などのような日用品が入っているのである。それは色鮮やかな綿布、毛織物や絹きんしゃで、一番多い色は細い縞模様の赤か黄色である。この点では他所と同じで、社会的地位はその使われている生地の良否できまっている。赤い広い切れのきゃはんが獣の皮で出来た靴についていて、それは膝の下の布のくつ下どめで締められている。役人は祭りのとき刀を身につける。

婦人の服は、色とりどりの縞模様の手織りの切れから出来ているが、肩のところはその切れでくるんで金属の締め金で締めてあり、また、ケラすなわち腰ひもでしっかりとめてある。男女ともに髪の毛は短く刈りこまれ、弁髪は決して伸ばされない。ブータンの婦人は、つねに珊瑚やトルコ石やその他の宝石でかざられた重い銀の首環をしている。真珠やトルコ石の飾りの指環や耳飾りは、首飾りの一部をなしているお守り入れと同様婦人には好まれているものである。色々の色合いの草汁で染めたヤクの毛は、男も女もどちらにも用いられる衣服の目のあらい長い毛織物

のいけにえさえも捧げて諸霊をなだめることが中心になっているのである。導師パドゥマ・サンバワ、文字通りには「蓮華の生れ」という意味で、リンポチェ導師として知られている。このナランダ大学の密教学の教授でありタントラ学者でもある導師は、西暦八世紀の終わり頃仏教をブータンに導入した。この影響から生まれた宗教は、大乗仏教とポン教分派との見事な結合であるが、それはさらに冥想、読経、呪文、マントラに関するタントラ的実践で内容が豊かになったのである。こうして、原始的な儀式や魔術から、利他的な自己放棄の様々な形式にまで高められた祈禱と共同崇拝の形にまで成長したのである。今日のブータン人は、主としてニンマ派とカルギュ派とに属している。ギャルワ・カルマ派がカルギュ派の筆頭になっている。

ラマ僧は、人民の宗教生活の中で支配的な要因をなしており、この国には約五千のラマ僧がいる。彼等は独身であり、その生活を冥想と祈禱に捧げている。ブータンの財源には、たえず枯渇があるのは、ラマ僧が政府や人民の寄進にまったく依存して生活しているからである。ブータン人は信心深いので、喜んでこの多数のラマ僧を扶養するという財政的負担を甘んじて受けているのである。村ごとに時には村落集団が自分達だけの僧院をもっている。ラマ僧の義務は、僧院の中の宗教的儀式に捧げられる時間と一年中行なわれている数々の祭りの祝いに出かける時間とに分けられる。ブータンの最高の建築は古い僧院であることが多く、その建築の精巧さでラマ僧に向けられる尊敬と重要さが示されているのである。ラマ僧が課税を免除されていることはいうまでもない。

農業国ブータンでは、馬はほとんど農耕に使われず普通輸送や乗用として用いられる

ギャワ・リンガという植物（トゲを抜いて馬の餌にする）

ジャッサム牛（掛け合わせによって改良されたもの）

をつくるのに使用される。

食物と飲用

ブータン人の主食は、米、麦、大麦、じゃが芋で、ヤク、牛、豚、ときには鶏の肉を食べる。乾燥肉やヤクのチーズも好物である。ヤクのチーズは木のつぼで軟らかくされてから、細かく固型状になったところをじゅずのような紐でつるしておくのである。上流階級とラマ僧の食物は、ヤクや豚の肉がカレーで料理されたり、干物にされたり、ときには米と一緒にいためられたりしたものである。酪酒（アラック）、チャンの地酒はもろこし、とうもろこし、大麦、米や果物から醸造された普通の飲物である。酪酒、チャンは長い竹筒で出されることもある。もっと貧乏な階級の人達はサトゥ、すなわち麦や大麦を塩ととうがらしで味をつけて混ぜて煮たものをたべている。ブータン人はパンの木やびんろうの実をかんでたべるのをすこぶる好み、コーのゆったりしたひだにパン入れを入れているのがつねである。

誕生・結婚・死亡

子供の誕生は、最初に生れた子供の場合は別として、特別喜ばれるということはない。しかし、はじめて生れた子供には、家族の者が少人数の友達を招いて三日目にお祝いをする。一ヵ月たつとラマ僧は星占いをして、その子は一番近い寺院か僧院につれて行かれて、その幸福のため

死亡と葬式はおごそかな行事である。祈禱がラマ僧により唱えられ、死者が大人である場合には特に非常な敬意が表されるのである。幼児や子供の死体は深い水底か川に投げこまれるが、大人の場合には火葬にされ、まれにははげたかのたべるに任す鳥葬の場合もある。どんなに金をかけてもお斎きを出さねばならないのであって、悪魔を追いやり、残された家族を守るためにそのとき祈禱はたえず唱えられているのである。

労働制度

チュニ・ドムといわれる役所や僧院の建築のために労働者を出さねばならない「強制」労働制度がある。一家族当たり成人一二人の中から一人を労働に出さねばならず、これを断ることは許されない。政府はこの労働に低賃金を払うのがつねである。老婆と子供はこの労働制度から適用を免れるが、金持は時にその義務を果すために代人を傭うことができる。以前大きな封建領地では普通であった奴隷労働はごく最近廃止された。

美術工芸

ブータンの伝統的な美術工芸は、チベットの形式と意匠から影響を受けている。職人は青銅鋳造に秀いで、特に銀、銅、真ちゅうの金属加工の手際が見事である。また寺鐘、刀剣、短剣づくりにすぐれた職人もある。とりわけ高度の技術が見られるのは、縁どりの彩どられたタンカ（巻

に捧げ物がされるのである。

結婚は、双方当事者の相互合意の下で正式に約束をとり交し、習慣上ラマ僧が祝福するのがつねである。一人の妻を兄弟幾人かが共有にするということ、一家族の兄弟が他の家族の姉妹と連合するという一妻多夫制（章末参照）が程度のちがいがあるにせよ、ブータンではいまだに存在している。古い慣習としての一夫多妻制（章末参照）もまた認められている。多くの場合、家族の財産を保ちつづけようとする本能的欲望が支配的で、婚姻関係で重要な役割を果している。婚姻のとりきめは必ず星占いがまず第一にされて、仲人のとりなしが話を進めるのに度々要るのである。

ブータンの婦人は、結婚してしまうと若干不利になるにせよ、男子と自由平等という意識をもっている。こういうことが起こるのは、一般に夫は妻の家に住み、妻はほとんど夫の家に行かないからである。結婚の約束が切れるのは、女の方がその実家へ行くために出て行くか、夫がその家族の他の男と一緒に住むように妻を送り出すかのどちらかの場合である。結婚はすべて治安判事か副郡長（ラムジャム）かに登録されなければならず、また役所に手数料を払わねばならない。結婚が破れた場合には、一定金額が裁判所の定めた通り被害者側に払われなければならない。しかしながら、最近ドルック・ギャルポのジグミ・ドルジ・ワンチュックは、結婚制度を全般的に改正することに力を入れて、遂に一夫多妻も一妻多夫制も廃止されるに至ったのである。法定結婚年齢は今日、女は一六歳で、男は二一歳である。かつて行なわれていた幼児結婚は、法律で禁ぜられている。

が床に敷かれている。祈禱部屋には宗教的な模様があり、壁に沿った机か棚の上にはお経の巻物がある。一階や二階に登るのは急な階段があるが、それは足をかけるために刻み目のある重い木の板でできている原始的な梯子である。屋根は土の平らな陸屋根か、もみの木の枝からできたひさしである。この板は堅固な木の梁の上につけてあり、所々石で重味をかけてある。館や家屋は、建てるのには一本の釘も使っていない。

泥土や金属からできた壺や鍋は勝手の棚の上においてあるが、居間においてあることもある。これがその家族の富を表示するのである。木のひしゃくか木のたらいが水や牛乳や小麦をいれるのに使われている。飼いものとしては猫とチベット犬が好まれている。

音楽と舞踊

宗教的祭式や祭りに最もよくきかれるブータンの伝統的な音楽は、八拍子のことが多い、ラッパ、ほら貝笛、角笛、シンバル、ドラ、横笛の音と様々な太鼓のたたく音のえもいわれぬ合奏である。歌声は宗教的なまた民謡的なテーマで歌われる単調な唱歌である。無言劇や宗教舞踊が調子を合せた足どりで繰返し繰返されるが、それは輪をつくるために腕を組んでゆっくり動くこともある。鮮かな明るい色をした化粧をして、動物や鳥や悪魔の顔をした仰山なお面をかぶり、縁どった旗が立って、踊る人の動きが道化者のこっけいさと入り交って、まったく面白くて絵のようで、忘れられないもので、訪れて来た者にはまったくまたとない経験になるものである。このお

き物の仏画）である。相当いい家は、どこでも大きなはた織場があるのを自慢にして居り、羊毛、絹、絹布の織物だけでなく、高級で独特の意匠の絨毯がつくられている。東ブータンでは、さいた竹からつくったバスケットやござづくりは主要な生業である。創造的な職人は自分の作品に自分の押印をおしておくのがつねである。最上級の職人を王家がおかかえにしていることは、高度の芸術的な伝統を保つ主な要因になっている。

ブータン人がその独創性を示すものとして国内活動分野で何よりも注目されるのは、要塞寺（フォート・モナス）院（トリー）ないしは砦と邸宅の建造である。ゾンはブータンで最もきわ立った建築物である。通常それには、土または石でできた高い白壁があり、深い飾り窓がついて、角には龍の首で飾られたパゴダ風の屋根がついている。ゾンは、僧院であると同時に、地方行政の本部でもある。礼拝と冥想とに使われる広間と祭場は、精妙な彫刻と巻き物とで満たされている。

普通の家は、大抵平屋で地面の上に建てられていて牛がかこいこまれているが、一階か二階に壁からつき出た露台のある家もある。居間、勝手、それがチョカンといわれる冥想の祈り場のある二階は、普通三部屋か四部屋で、一家族だけで使われている。壁は土壌または粘土で出来ており建物のほかの所は木である。数少ないが大邸宅になると、外側は華やかな色で彩られている。いろりはインドのチュラーと似たものである。煙突はなく、換気のわるいために臭い空気の中に人は住んでいる。天井は煙やタールで黒ずんでいる。部屋の中には、低い長椅子や手彫りの色のついた松の木から出来た机が少しあるほかには、あまり調度品はない。手織りの敷物やヤクの皮

ブータンの郵便配達夫（左）

機織りをしているブータンの女性（この国の特産品でもある）

食事をしているブータン人家族

祭りにもっともよくある色どりは、青緑色、深紅色、緑色、黄色、桃色である。

他の民衆風俗

ブータンは友好的でもてなしのよい国である。最初の挨拶は、大抵絹か木綿のスカーフのやりとりがつきものである。賓客の地位が主人側よりもずっと低い場合には、スカーフはただ贈られるだけで、それを受けとることが歓迎のしるしであることもある。牛酪茶とサフラン色の米が出されるが、これを食べたり飲んだりする必要は必ずしもない。もっともそうしてみせることは款待のしるしであるけれども、こうした儀礼的な歓迎も、チャンといわれる地酒、果物、他の食物が出されるにつれて、ぐっと打ちくつろいでくる。贈物も差出されるとまたお返しがなされる。

ブータンでは、弓術が最もさかんなスポーツで、この催しが群集をよび集めるのである。ただ単なる見せ物であっても、ブータンの一日中つづく弓術競技は本当に印象的である。個人のまた団体の武勇は、祭典のときに示されるのである。矢が放たれるや、伝統的な派手な色の衣装をつけた射手は、一〇〇ヤード以上はなれた的に向かってその矢が飛んで行くのを調子づけるために踊り出すのである。弓術競技に勝った者は肩帯を貰い、見物人は彼を讃えて踊り出すのである。村をあげてこの催しに熱中し、その勝負のよしあしをいい合って湧き立ち、それを村の娘たちは声を合せて音楽にしてしまうのである。

第七章　政府と一般行政

九〇万に及ぶブータン人口の分布状態は、少数の町に集中していているけれども、分散もしていて幾多の小さい村に住んでいる人民をかかえているのである。行政の基本的ないしは自立的制度は、ほとんどの村、ないし村落集団にも存在している。権力をもった者として、ガップといわれる村長がいて、一期五年の任期で選出されるが、この任期は場所によりちがっている。主にブータンの南部であるネパリ地方では、村落行政は、マンダル（村長）によってとりしきられている。ガップとマンダルは、その地方の権威を握っている郡長から受けた命令を執行する責任をもっている。

各地方は県単位に分割されていて、その筆頭にはその地方全体を統轄する知事があって、その代理に副知事をもっている。昔、ブータン全土は三人、ときには四人の地方長官に統轄されていたが、今日ではブータン王の兄弟であるパロの長官を除いては他の県は格がその下のゾンポンの管轄の下におかれている。

ブータンでは誰もが見落すことが出来ない田舎の代表的な見物は、「チョルテン」または「ツァルカン」、小さな寺の場合には「マニ・ラカン」といわれる数知れない塔で、それはブータンの景色の中心をなしている。ブータンのどこでも館の前にも道端にも、また峠沿いにも見られるのは、祈禱旗をつけた棒でかこまれたこうした塔である。「マニ・ラカン」はその文字通り、マニすなわちその中で禱るという意味の家のことである。信仰深いブータン人は、このマニ・ラカンを通るときには、必ずその中に入って、敬意と信心を表するために祈りの輪を一回まわるのである。毎朝日の出の直後、いま一つの共通の宗教儀礼が行なわれるが、それは小さな火をつけて煙を捧げることであって、それで濃い煙の柱ができるのである。この煙の捧げものは精霊を和らげ、また自分達の罪を償ってくれるものと信ぜられているのである。

一妻多夫・一夫多妻　チベット系部族に多い慣習。妻を「労働力」として購い迎えるため貧しい家ではともすれば、男の兄弟に妻が共通で一人、という一妻多夫が生じる。同食権は寝屋の入口にあらかじめ靴留め（ガーター）を吊して意志表示したり、交代で出稼ぎに出る場合もある。この反対に、富んだ家や労働力をとくに要する家で、一夫多妻の慣習があらわれる。また男の兄弟に女の姉妹が「纏まって」嫁ぎ、夫婦関係がクロスして自由に結ばれる「タスキがけ」婚も存在する。

んとして国家の福祉と進歩の責任を一身に象徴しているドルック・ギャルポの中に委ねられている。

国内事項に関して国王の最高顧問である政府の行政事務局は、首都ティンプーにあり、ギャルドンといわれる官房長官の直接指揮下に機能している。行政のピラミッド構造で低いところに位しているのは、地方長官と他の県または郡役人で、それぞれ順次官房長官に責任を負うことになっている。ゾンポンと地方裁判所判事の下に、前述の下級役人がいて、村長(ガップとマンダル)にたすけられている。全部で十四地区があるが、その中大きいところには知事がいて、ニエルチエンすなわち収税役人やドロニェルすなわち儀典官の援助を受けることになっている。

司法制度

ブータンでは、行政官と司法官とが同一になっている。小犯罪は、ガップまたはマンダルの村長によって裁かれる。司法官とその下の役人は、地方裁判所判事と同じ権力をもっているが、ただその特別担当領域のことに限られている。ここでは成文法典があり、すべて裁判はその法規に従って決せられる。刑罰は、犯した罪の度合に応じて罰金から数年の投獄まであるが、死刑には射撃隊に銃殺されたり、罪人をしばって川の中へ投げ入れられたりするのである。司法官は最高一〇年投獄の判決を下すことができる。司法官によって課された重刑に対する上訴は官房長官に対してなされねばならない。ドルック・ギャルポは上訴に対しすべて最終判決をする。彼のみが

ブータンには国会すなわちツォンドがあり、その代表議員のある者は国王に任命され、ほかの議員は選出される。重要な村または村落集団は議員を選出し議会に送り出している。僧院も国会に独立に議員を出している。主な地方役人または役人幹部は国会の職権上の議員である。国会は定員一三〇名で、任期五年である。国会は国策に関する重要事項を審議するのみならず、様々な行政的問題を討議する。総理大臣を通じて、国王は開会し法案を提出し、国会審議事項を提出することによって積極的な役割を演ずるのである。

ブータンの政情が平穏無事であるのは、この国には政党がないので政治上の対立紛争の種がないからである。少くとも年二回、非常時には数回開かれる国会は、ブータンの関係する問題をすべて公開討論する場所として機能している。国王は国会以外に九名の諮問委員会をもっている。委員会は僧院からの代表二名、官房長官、副官房長官、国王顧問の三名、それに残り四名は人民を代表する者から成っている。委員は、外交並に重要な国内問題について国王をたすけるが、国会の方は主に日常の国家的関心事を討議する。国会には完全な言論の自由が保たれており、いかなる批判も、たとえ王位の権利について批判しても処罰を受けることはないという確信を議員はもっている。官房長官は国会の議長である。ブータンには未だ成文憲法はない。ただそれを起草する努力はなされてはいる。一九六四年にブータンの代表であり、国王の最高顧問であったジグミ・ドルジが暗殺されて以来、ドルック・ギャルポはしばらくの間首相の役目も果して来た。今日では、国会と諮問委員会が共に力を合せているとしても、伝統的に容認されている権限は、いぜ

一、六〇〇名、女子二、九四〇名）であった。現在進行中の計画の目的は、教育施設の数を多くするよりは、教育内容を充実することにある。この国の教育は職業教育でなければならないと思われる。換言すれば、その主要目的はブータンにこれから必要な技術要員や行政要員を供給することである。約五百人の青年男女がインドの学校や大学で勉学の完成にいそしんでいるが、その多くはインド政府の奨学金によるものである。

公衆衛生

ブータンでは一般に健康状態は良好であるとしても、赤痢、甲状腺腫、性病などはまだまだ各地にはびこっている。南部の方はマラリヤ伝染地区であるが、マラリヤ撲滅には実際進歩が見られる。今日、公衆衛生局が首都ティンプーにある医療主任官の下で直接活動している。いくつかの病院が四大都市ごとに建てられ、二〇以上の診療所が各地に開設された。水道の供給と衛生的な下水組織も計画されているところである。こうした設備が整うにつれて、人民の健康状態も著しくよくなって来ている。昔ながらの妖術師や地方の占い、パオというラマの星占いに相談するという迷信に頼る代りに、近頃ではむしろヘルス・センターの医者に治療して貰ったり意見をきくようになって来たのである。現在のところ、ブータンには、保健計画を充実するのに必要な資格のある医者看護婦が著しく不足しているのは遺憾なことである。

死刑を宣告し得る。幸いなことに、ブータン人の性格は、犯罪や暴力を行なう傾向が少い。

財政収入行政

税務官は地方税の徴収に当たっている。ブータンの全国家収入は九〇〇万ルピーで、土地税は収入の主要源泉である。他の税には、牛に対する税、放牧手数料、家屋税、国有地の木材売却からの収入などがある。土地税は全収入の半分を占める。以前には、税は色々な形でとられていた。例えば土地の生産高とか牛の頭数などからとったのであった。しかし、今日では税は現金で集められる努力がなされて居り、税率の再評価が考慮されているところである。

教育

昔から伝統的に、子供の教育については、単に勉強だけでなく、美術工芸にわたって教えることを監督し責任をもっていたのはラマ僧であるのがつねであった。しかし、ここ数年来、宗教をはなれた一般教育制度に基づく学校がさかんに出来てきている。教育担当局長の教育計画が具体化され、小学校、中学校の数は非常に多くなった。ブータンの第一次五カ年計画の着手に先立って、すでに五九の小学校があったが、その中二九校はブータン政府が直轄したものであった。その計画の終了時の一九六六年には、学校数は全部で一〇六校にふえたが、その中八三校は小学校で、二三校が中学校と高等学校であった。この施設にいる生徒の数は一四、五四〇名で（男子一

小学校の授業風景（５歳で１年生になる。ブータンでは学校教育に力を注いでいる）

修道僧たち

ごく最近まで、インドとの国境の町プンツォリンからパロかティンプーまで行くのに、六日か七日ロバや馬に乗って辛い旅をしなければならなかった。本式の舗装道路の建設が始ったのは一九五九年で、そのときインド政府はその目的のため必要な資金を提供することに同意したのである。主に南北に走る三つの国道が最初に計画された。その優先順位は、最初がプンツォリンからパロ及びティンプーまで、次がゲレブからトンサまで、最後がダランガ（サンドルプ・ジョンカル）からタシガン・ゾンまでであった。後になって、東西路、すなわちタシガン・ゾンからティンプーまでの国道が追加された。

プンツォリンの国境町から、アモ川それからウォン川沿いに首都ティンプーまで行く国道は、一九六二年開通し、これと同じ道路の支線が西ブータンの要衝パロへ通じている。このとき以来、道路事情は著しくよくなり、今日では一一六マイルの距離をほぼ七時間で行けるようになったのである。プンツォリンから約一〇〇マイルのところでウォン川とパ川の二つの川は合流し、ウォン川の右側はティンプーで、左側の方はパ川岸沿いにパロがある。ひどく暑く湿気があって草木が繁茂しているところが多い低地地方の深い谷間から上って行くこの国道沿いに旅をつづけると、標高が高くなると気候が変わり、斜面はゆるやかになり、空気は冷たく、湿気も少なくなって旅行者には気持よくなってくる。

政と行政上のため小型だが有効な自動電話設備を有している。各地に電信を拡げる計画が現在進行中である。

軍　隊

ブータンは、北方のきわめて脆弱な国境だけを考えてみただけでも、手に負えない防衛問題をかかえている。ほとんど近づき難い山脈でも、高度の峠をこえて行かれるので、この国防問題を一層むずかしくしているのである。国道建設のような活動にも全般的に労働力不足であるので、防衛勤務のための人あつめが困難になるわけである。たとえ困難があっても、軍隊はいまインド訓練部隊によって近代的戦闘部隊に再編成され再補強されている。国王の弟であり、パロ県知事のナムギャル・ワンチュックが、ティンプー付近のルンテンプーに本部をおく軍隊の副総司令官である。

貨幣と郵税

ブータンは自国貨幣をもっているが、粗悪な貨幣は一九二八年から事実上存在していた。チベット貨幣も数年前まで流通していた。インド政府がその通貨を十進法にしたとき、ブータンも同様な措置を講じたが、一九五九年、一パイサは一ルピーと等価として、一、五、二五、五〇パイサの銅とニッケル貨幣に、ザントルム、マトルム、チェティク、チクチュン、ドルクトルムなど

ティンプーから道は曲がりくねってワンディポドランへ至るが、パロへ行く道はいまさらに西の小さな町のハへ延びている。東端のタシガンは、インド国境沿いにあり、したがってインド国道網にも通じているカルともいわれるダランガと接続している。ダランガからタシガン・ゾンまでは一二〇マイルある。タシガンから道路は西に向かうが、その道路が完成すれば国のもっと中央部に近い町のワンディポドランにつながる筈である。中央部の一九〇マイルの長さのある道路は、北から南へ走り、国境沿いのサルカンと両方ともブータンの町であるゲレプとトンサとを結ぶことになる。約五五マイルの第一級道路がいま建設されているところであるが、このあたりの計画が完成するのは一九七一年までということになっている。この道路建設は、インド国境道路公団とブータン工業技術団との共同責任事業である。

さらに、この主動脈のほかにいくつかの短い道路が建設中であるが、これは、ブータンの南部の町とインドの公道とを結びつけることになる筈である。この国中を無数の小路や通路が交差していて、これが今も散在する村々の間のロバや馬による交通手段として役立っているのである。こうした小路で、ジープが通れる位に広げられているものもある。

ブータンでは色々のところでヘリコプターを使えるようなヘリ発着用地があるが、空港はただ一つパロにあるだけである。

地方の県庁所在地は無線回路でティンプーと連絡がついている。一方電信電話はパロとティンプーとはプンツォリンに、それからインド通信組織に連絡している。ティンプーとパロとは、町

絨毯、果物等々のような生産物を輸出しなければならないが、インドもブータンに必要なものを供給している。

著者の自由な見解

読者のためには、ブータン政治の現状について若干の説明を本章でつけ加えておきたい。トップレベルのブータン行政官僚はある程度訓練されているにせよ、中、下級の段階になると訓練不足と能率のわるさが目立つ。総じて行政が行悩んでいるのは、政治権力と権威を過大視して中央に集中しすぎたからである。中流階級は、とりわけラマ僧、地主の最高階級と、農民の下層階級と較べてその間に大きな隔差がある。それゆえに、各方面の訓練された行政官僚、清廉で能力のある人材のグループをつくり上げることは一層困難である。しかしながら、そのうちに、いま学校や大学に行っているブータン社会のあらわる階層の男女の子弟が自分の国の生活と責任ある政治に寄与できるような重要な地位につけるようになったときには、こうした欠陥もなおるであろうと期待がもてるのである。

の貨幣単位を導入した。貨幣は現在インド政府が鋳造している。インド通貨、特に高額紙幣はブータンに通用しており、それはブータンの法貨でもある。

ブータンは自国の郵便制度をもち、美しい切手を発行しているが、それは蒐集家が好んで求めるところである。切手価値は貨幣と同様に、インド貨幣単位と等価である。

貿易

貿易路は数世紀間ブータンとチベットとの間の北西と、ブータンとインドのアッサム、ベンガルの隣県との間の南部とに存在していた。リントゥとパーリのような北西への峠の高度は貿易に特に役立ったとはいえない。それに、ブータンの経済は、今日でさえも大方いえることなのであるが一見自給自足体制をとっている。貿易路をおさえることは、かつて戦っている酋長達の間で激しい対立競争の主因をなしていた。ブータンを通しての出入した生産物は、穀類、羊毛、毛織物、フェルト、角や枝角などであった。綿布は主にインドから来たが、中には少量でも「外国」製のものも入っていた。塩、原毛、銅や他の金属製品、磁器と茶は、チベットや中国から来た。毎年立つ市場市は、ランプールとインドのダランガで行なわれ、ブータン商人は規則的にその品をもって来て、ブータンで必要とされるものと物物交換されたのである。

一九五九年と六〇年にわたる中国のチベット占領は貿易パターンをまったく変え、チベットと中国の間の貿易は事実上終止している。いまやブータンは、そのインド向けに手織り羊毛製品、

る。手のつけられていない処女森林地帯や牛の放牧地帯がまだ沢山ある。作物の耕作は土地を段段状にして行なわれることが多い。灌漑は川や泉から竹や石の水路でひかれている。上述三地帯の中で、中央部は最大の耕作地をもった肥沃な峡谷地帯である。熱帯、温帯性の食物やほかの作物が色々ブータンで出来るが、それは気候と高度に幅広い相異があるからである。しかし、農業方法の改良は仲々とり入れられていない。土地改革がやっと最近実行され、現在個人の土地所有は最大限三〇エーカーと限定されている。

ブータンには家畜類が豊富で、家禽類や搾乳動物は、農村経済において重要な地位を占めている。飼育畜牛の種類は、高度一万二千フィート以上の北ではヤク、低地方ではミタン種など様々である。アッサム高原とはちがって、ミタン種は乳出量は少ないけれども搾乳動物として好まれている。それは脂肪分が全体として豊富だからである。原産土着の山羊の質は余りよくなく、毛の量も少ない。どの村にも沢山の豚と家禽類がいる。

年中雪を戴いている山と深い谷から成るこの国では、ほとんど、あらゆる種類の天候や草木に事欠かない。ブータンには、低地帯の熱帯では原生林が多く、温帯では針葉樹が多く、高地帯では、もみの木、松、えぞまつ、からまつが多い。樹木線は一万三千フィートに及んでいる。三大森林分布が認められるが、熱帯及び亜熱帯、中間地帯、温帯である。

㈠　熱帯及び亜熱帯は海抜千フィートから五千フィートに及び、草木類は半常緑樹及び落葉広

第八章　天然資源と開発計画

ブータンの経済は主として農業で、その主要産物は、米、小麦、大麦、とうもろこし、きび、じゃが芋、蜜柑である。ある地方では小麦と大麦とは米の裏作で、他の地方では小麦ととうもろこしとがそばと代わるがわるつくられる。穀類を年中つくっていたことは土地の肥沃に影響したが、今ではその対策として肥料の使用が奨励され、作種の回転の仕方も変えることが行なわれている。最近までブータンは穀類は自給自足していて、少しは輸出するほどの余裕もあった。しかし、さまざまな原因で、その少なからぬ要因は開発速度であるが、外部からの労働力輸入の必要がたえずあり、国内の消費水準が高くなったことなどが原因になって、食料の需要が供給を上回るようになったのである。ほとんど誰でもが土地をもち、どの村でも林野に入会権をもっている。普通のブータン人は、自給する人々で、食物をつくり、牛を飼い、着物を織り、自分で家さえもつくるのである。ぜい沢なものはほとんどほしがらない。

ある程度まで耕作用の土地は、地勢上限られている。それは急な傾斜面は使えないからであ

名であった。

ブータンの水力資源は事実上あり余って限りない。大ヒマラヤ山脈の中に源を発し、ベンガルやアッサムの平原に流れ落ちる多くの川は、全国の電力供給に利用されるのである。すでに小型発電所計画があるが、大規模の企ては需要と資金が出来れば開発されるであろう。

要するに、ブータンは将来の経済開発には好条件を備えた天然資源をもっているのである。しかし、その発展をおくらせている根本問題がある。それは、交通不便に加えるに、科学技術の分野で担当出来る教育された人材がきわめて少なく、また大規模の開発のための行政組織にも問題があることである。最後に、同様に重要なのは財政源の問題がある。全般的に問題なのは優先順位なのであって、どこから始めるのか、最初に優先さるべきものは何であるかということである。

開発計画

すでにふれたように、ブータンの経済開発構想は、ネルー首相が一九五八年同国を訪問したときに生まれたのである。ブータン政府からの招待にひきつづいて、インド調査計画団が一九五九年に、ブータンに到着し、第一次計画の原案が一九六一年すでに完成した。この第一次五カ年計画は一九六一年から一九六六年にいたる期間のものであった。この計画によれば、同国の経済社会開発のために第一の優先順位が次の大綱通り明らかにされたのである。

葉樹型から成る。低地帯ではさらそうじゅの森林もある。

(二) 中間帯は五千フィートから約七千フィートにわたり、樫(かし)など種類が多い。特殊な材木の木はミカエリアである。

(三) 温帯は、七千フィートから一万三千フィートの間にあり、しゃくなげ、針葉樹、松、もみ、からまつなどが生育している。

主に南ブータンで材木資源が乱伐されたことは、供給をいたく枯渇させることになった。ブータンは世界中で最も美しい花の種類、例えばしゃくなげ、もくれん、蘭などが高山植物から熱帯植物に至る種類があげきれないほどの花があるのは周知のところである。

未だ手のつけてない鉱物資源がブータンにはある。インド地質調査団の報告によれば、ブータン各地を調査した結果、東ブータンのカンクール・シュマール地域には石膏の埋蔵量が莫大であることが判っている。南西ブータンでは、セメント状の石灰石が沢山埋蔵されている。これに加えて、石墨、銅、雲母、白雲石(ドロマイト)、石綿(アスベスト)などが各地で発見されている。

低い山地では動物が豊富である。マナス地方では、特にアッサムのマナス保存林と隣接して野獣の世界がある。その地方は、ほとんどあらゆる野獣、象、犀(さい)、虎、豹、三角鹿(サムバ)、鹿などの狩場である。熊でさえ出て来るし、じゃこう鹿は雪の中に住んでいる。山鳥、野鶏などの羽のついた獲物が沢山いる。ブータンは、小さいけれども頑健で強い馬や小馬(ポニー)の品種がいるので以前から有

ブータンの農家（1階は家畜用、2階は住居、3階あるいは屋根裏は倉庫になっていて、かなり大きなものである）

脱穀をしている農民

ブータンの子供たち

㈠ ブータンのすでに判っている天然資源を実用化するために絶対必要な部門の開発に投資し、歳入を増大すること。
㈡ 要員訓練施設を充実し、さらに資源を開発することと、その開発可能性を調査すること。
㈢ 全般的に生産の能率を上げるための生活基本設備を供給すること。

この主要問題の一つは、開発計画を実行するに当たって必要な技術者の員数であった。大量にインド人技術者がこの要求をみたすために徴用された。それと同時に、ブータン人にインドの技術施設で訓練させるために奨学金をおくる措置がとられたのである。

この時代には、交通、農業調査、給水下水を含む保健設備の基本計画と教育計画とに大いに努力が払われた。多くの場合に、基本的な開発活動の下部組織が集中的に設けられたのである。例えば、農業、家畜飼育、教育、健康などのための指導者委員会が発足し、工業技術、森林管理が大いに拡大され、開発先導隊(ディベロップメント・ウイング)が設立されて全般的統制管理に当たった。決定済発電計画の建設のために、発電指導委員会がつくられた。輸送と郵便省が歳入獲得活動のために確固健全な基礎に基づいて樹立された。ブータンの行政組織も再編成され、開発発展の要求に添うように改編された。

第一次計画がほとんど完成すると、一九六六年から一九七一年までの第二次計画の目標が次の

る。電力が使えるようになることは、ブータンの森林、鉱物資源の工業活用を促進するであろう。目下検討中の工業計画は、セメント、肥料、紙パルプと板紙などを考慮している。

経済開発は、ブータンに近代的な科学技術方法、新しい交通手段、健康、教育の向上をもたらした。ブータンの伝統的な社会構造には、根本的な変革が必要である。新しい生活に目ざめることは、恐らくは現在の価値観念を変えて見解を広くすることになるであろう。計画立案者の意図するところは、伝統的、社会的、宗教的な構造に内在する価値はこわすことなく、新しい進歩的な制度をつくりあげることである。ブータンのような国の開発は、そのあらゆる時期を通じて伝統的な感受性のつよい人民の反応をたえず頭においておかなければならないことを考えるとき、実に大変なことであるといわねばならない。

過去六、七年の結果から判断すれば、ブータン人は、その身のまわりの変化に特に気を奪われていた。彼等はどこでも開発があれば実際に進歩があることを認めている。教育の機会が開放されたことは、人民にとって特に喜ばしいことであって、それは学校や教師をもっと沢山にするようにという要望になってあらわれている。国王の前向きの指導性とブータン人が自ら進んでこれに協力していることは、こうした結果を達成する重要な要素であった。すでに述べたごとく、ブータン人は、国会の民主的討議の過程を通じて現に起こっている変化に十分発言権をもっている。最終的な英知、すなわちブータンの幸福に役立つものを最後に選び、よくないものは捨てるということは、まさにその国の人民自らにかかっている問題である。インドはブータンを何とか

通り作成された。

(一) 農業及び園芸生産の推進
(二) 職業教育に重点をおいた小中学校教育計画の拡充
(三) 家畜家禽飼育計画への特別配慮
(四) 交通通信、道路、交通施設の拡大
(五) 森林鉱物資源と結合した工業基地建設

ブータンの経済開発は、ブータン人とインド・ブータン間の合弁事業との協力を強化することにある。インドは第一次計画の期間に全体で、一億七千万ルピーに上る援助を与えたが、第二次計画の期間にもほぼ二億ルピーを援助する予定である。インドの技術専門家は、この計画を立案実行するに当たってブータン人と相並んで共同作業を行なった。このような援助とは別に、インド国境道路公団はインドだけの財源でブータンの近代的道路交通網を建設したのである。

各地方で利用出来る水力資源を使って電力を開発することは、第一次、第二次五カ年計画の主要目標の一つである。小型発電所は、ティンプー、パロ、ビャガールでインド人技術者の手で建設されつつある。ティンプーにある発電所の一つは、事実上すでに作動している。このほか、ブータンは一九六一年に結ばれた協定に基づいて北ベンガルのジャルダカ発電計画で一役買ってい

第九章　将来の展望

深く大きな変化がブータンの政治的、社会的、経済的生活に起りつつある。数世紀にわたる眠りからさめて、龍の国は新しい見方や新しい経験を知ったのである。こうした変化は、七〇年ほど前に、現国王の祖父に当たるウギェン・ワンチュックがブータンの押しも押されぬ支配者になって、祖国の運命を国民的運命共同体として、文化、慣習、政治制度によって形成しようと決心したとき、さだかになったのである。再建の仕事はその子から孫のジグミ・ドルジ・ワンチュックの手に渡された。しかし、一九四七年インドが独立するまで、ブータンは孤立し原始的であり外界から隔絶されていた。実際ブータン国内に入り旅行することを許されたものはほとんどなかったのである。二回の世界大戦の間に世界を再び変貌させていた近代技術や科学的進歩の時代というものも、ブータンから懸命に遠ざけられていたのである。

シッキム、ブータンの英国政治代表であったジョン・クロード・ホワイトは、一九〇七年に記したのは次のことであった。

なだめすかそうとか、何としてもやらせてしまおうという意図は全くない。インドが援助後援するのは、この二国人民間の友好親善関係を促進しようという意欲で動かされていることのあらわれにほかならない。

しようとしたりすることに対する反逆であった。一九五九年、ダライ・ラマは仏陀の祖国であるインドに庇護を求めてチベットから逃れ出たが、チベットから数百人も彼のあとにひきつづいた。これらの避難民は高い峠を越えてブータンに入り、その友好的で親切な国に助けを求めたのである。これらの人達は同情と理解あるもてなしを受け、中国人の残虐さを物語るチベット人の生活様式を破壊しようという試みは、ブータン人に深い同情をひいたのである。

中国はその破壊行動でチベットの文化的遺産を全く無視し、北京とラサとの間に数世紀間存続していた伝統的な諒解関係を計算の上で反故にしてしまったのである。中国は、ブータン国境の一寸向こうにあるチベットの南部境界付近に軍隊を集結したのである。その峠の通路は高度であるとはいえ、越えられないほどのものではなかった。孤立し開発されていないブータンは、地下破壊活動の目標になり易かったし、この中国の侵略に対して自衛手段をもっていなかった。

チベットのかかる流血事件は、ブータンへの脅威となりつづけたが、それがひいては旧秩序を変革し、孤立から抜け出し、民主主義世界の社会に加わる必要を痛感させたのである。ブータンがインドに指導を求め、一九四七年以来両国間の指導理念であった友邦連帯性と理解協力のきずなを強めようとしたのは当然のことであった。インドとブータンの間の友好関係はインドがその開発計画を立案実行するに当たってブータンを心から援助するということを宣言したとき、深い意味のある新しい目標を見出したのである。この第一次五カ年計画は一九六六年に完成され、第二次計画は現在進行中である。ブータンは、その人民参加によって新時代の門口に立っている。

余は新しい国王とその委員会の切なる要請に基づいて後に座り、同国の福祉発展のための計画立案を彼等と論議しようとした。この計画は非常に大きな範囲にわたったもので、学校、教育、人口、貿易、道路建設、鉱物資源利用法、山麓の荒れ地でドワールの最良茶畑に匹敵するような場所での茶栽培の奨励という考えなどであった。

それにもかかわらず、この夢があったのに、過去四〇年間にほとんど何もなされなかったのであった。

一九四七年、インドの独立と共に、両国政府の間、それから次第に両国人民の間の共同活動と連繋とが現実になったのである。ブータンの支配者、ドルック・ギャルポはインドに招かれ、インドの首相ジャワハルラル・ネルーはブータンを訪れた。ここにブータンの経済開発構想がスタートし、それはおおむね一連の段階的企画に基づいてインドの経済開発パターンをうけついだのである。それは二国間の協力が想定され、いわゆるブータンにおける「無言の革命」の道を開くことが意図されていたのである。

逆説的ではあるが、北方の高いヒマラヤ山脈を越えた向こうの、ブータンと似た古い精神的遺産をもったチベットでも、革命の門口に立っていた。この反逆は中国がチベットに対して宗教的、文化的自由を容赦なく抑圧し、僧院や寺院を無闇やたらに破壊したり、人民を苛酷に奴隷化

付録

中国の脅威におどかされる代わりに、将来は福祉と自決に確信をもつような独立意識をブータンはもつようになって来たのである。

付録I

シッキムの僧院

所在地	シッキム語による語意	建設年代
サンガ・チョリン	奥義を伝授する地	一六九七
ドゥブディ	隠遁・隠れ家	一七〇一
ペミオンチ	崇高な蓮	一七〇五
タシディン	縁起の良い地	一七一六
ジルノン	熱烈な信仰に燃える隠遁者	一七一六
リンチェンポン	宝石の丘	一七三〇
ララン	山羊の遊ぶ所	一七三〇
メーリ	レプチャ人の村	一七四〇
ルムテク	神は立去りぬ	一七四〇
ポドン	マナルの雉	一七四〇
ツン・タン	宝石の女王の牧場	一七八八
カ・コッド・パーリ	神々の住み賜う場所	
タン・モチェン	大平原	一七八八
トゥルン	山芋の谷間	一七八九
ナム・ツェ	天界	一八三六
エンチェイ	高く静かな所	一八四〇
ペンゾン	ある蘭の名称	一八四〇
カトック	兆し	一八四〇
ドリン	落雷	一八四〇
ヤンガン	幸せの峰	一八四一
ラブラン	ラマの家	一八四四
ポンポ・スガン	ボンの丘	一八五〇
ルン・ツェ	自らを創造した峰	一八五〇
セネク	峰の上のくぼみ	一八五〇
リンゴン	僧院の丘	一八五二
リンテム	レプチャの村	一八五五
ツァ・ンゲ	草が刈られた場所	
ラチェン	大きな峠	一八五八
ギャタン	荘大なる平原	一八六〇
パギャル	崇高でぬきん出ている事	一八六二
ノブリン	西方の地	一八七五
パビュク	野生の竹の茂る	一八七五
シンタム	預けられた木	一八八四

定が取決められた。

一　英国政府とシッキム政府の間でなされたすべての旧条約は今後公式に無効とされる。

二　現在英国軍により占拠されているシッキムの領土のすべては、シッキム国王に返還される。今後二国間には平和と友好が保たれるであろう。

三　シッキム国王は、その力の及ぶ限りにおいてこの条約署名の日より一カ月以内に、リンチンポーンの英国軍の分遣隊の放棄した公共財産の回復を引受けること。

四　シッキム政府により回避されてきた正当な要求を通す手段として、シッキム領土の一部分を占拠することで英国政府が蒙った一八六〇年の出費の補償金として、シッキム臣民により略奪され、誘拐された英国臣民に対する補償として、シッキム政府はダージリンの英国当局に次の分割払いにより合計七、〇〇〇ルピーを支払うことに同意した。

一八六一年三月一日　一、〇〇〇ルピー
同　年一一月一日　三、〇〇〇ルピー
一八六二年三月一日　三、〇〇〇ルピー

この総額が当然支払われるのを確実にする為次の事が更に同意された。すなわち、これらの割賦金がその一部でも指定期日にきちんと支払われない場合には、シッキム政府は英国政府に対し、南はルマム川、東は大ランギット川、北は大ランギット川からタシディン、ペモンチそしてチャンガチェリン僧院を含む、シンガリラ地区に到る線及び、西はシンガリラ山脈でもって境をなすシッキム領土の一部を譲渡すること。英国政府は領土占拠と収益徴収の出費と一年六パーセントの利子とを含めた総額が支払われるまでこの領土を占有し、そこからの収益を徴収する。

五　シッキム政府は、その臣民が将来、再度英国領内で略奪を犯しもしくは英国臣民を誘拐し苦しめることがないことを約束する。いかなる略奪・誘拐であれ、その様なことが起きた場合には、シッキム政府は、これらの不正行為に関係したすべての人間を、それを見逃し又はそれから利益を得る地方族長や首長も同様に引渡す事を保証する。

付録Ⅱ

一八三五年二月一日付ダージリンを東インド会社へ譲渡する承諾証書(訳文)

植民地総督は、かねてより、ダージリンの丘が清涼な気候であり、職員の療養に利用せしめたる為にこれを領有したい旨の希望を表明されていたので、シッキムプテイ藩王はダージリン——大ランギット川の南、バラスール・カハイル、そして小ランギット川の東、ルンノーとマハヌディ川の西に囲まれたすべての土地——を総督に対する友情として、東インド会社に贈与するものである。

(署名者)
A・キャンベル(ダージリン長官兼シッキム政治顧問)

付録Ⅲ

英国政府側は委員会総督、チャールズ・カニング伯爵により全権を委任された使節特別弁務官、アシュレー・イーデン卿と、シッキム側はシッキム国王、セケオン・クゾー殿下とにより締結された一八六一年条約、規約及協定。

シッキム国王の官吏及び臣民による引続いた破壊行為ならびに非行、さらには人民の犯行に対して、国王が十分償いをすることを怠ったことは、以前英国政府とシッキム政府との間に存在した多年にわたる円満な関係を中断する結果となり、結局英国軍によるシッキム侵入と征服を招来したがゆえに、又シッキム国王は、その家来と臣民の非行に対し衷心から遺憾の意を表し、将来の誤解をとり除く為に全力を尽すことを決意し、英国政府と再び友好・同盟関係に入る意志を表明したので、ここに次のごとく協

てすべて英国臣民の微罰事件は直ちにダージリンに報告される。

一〇　シッキムから英国領土に輸出された商品又英国領土よりシッキムに輸入された商品に対しいかなる個人も法人も、どの様な種類の関税も手数料もシッキム政府により要求されることはない。

一一　チベット、ブータンもしくはネパールに入るか又はそれらの諸国から出るすべての商品について、シッキム政府は、もし必要ならば適宜商品の到着地を無視し決定され公けにされる率に従って関税の義務を課してもよい。しかしながら、その関税は課税の時と場所による商品価値の五パーセントを越えてはならない。前述の関税支払については将来その額のいかんを問わず支払を免除する許可が与えられる。

一二　関税の賦課を過小評価する為に生ずる詐欺からシッキム政府を保護するという観点に立って、関税吏は所有者がつけた価格で商品を政府へ渡す選択権を持つ。

一三　交易を促進する見地より、英国政府がシッキムを通る道を切り開くことを望む場合、シッキム政府は、それに反対はせず、その仕事に従事する団体にあらゆる保護と援助を与える。もし道が建設されたならば、シッキム政府はその修繕と道筋に旅行者の為に快適な休息所を建て維持する事を引き受けること。

一四　もし英国政府が、地形学的に又地理学的にシッキムを調査しようとするとき、シッキム政府はこの事に何ら異議をとなえず、この仕事に従事する官吏に十分な保護と援助を与える事。

一五　最近の誤解は、シッキムにおいて奴隷を使う慣習がある事に起因している事実に鑑み、シッキム政府は本日より人間を奴隷売買する者、人間を奴隷として使役する為に捕える者をすべてきびしく罰する義務を負うこと。

一六　以後シッキム臣民は、彼等が移住したいいかなる国へも妨害干渉なしに移動できる。同様にシッキム政府は、他国臣民が罪人や不履行者でない以上シッキムへ避難する事を許可する権限を持つ。

一七　シッキム政府は、英国政府と同盟関係にあ

六　シッキム政府は、常に犯罪人、滞納者又はその領内に逃げ込んだ他の犯罪人を、英国政府の委任代理人を通じ書面をもって、正式に行なわれた要求に基づき逮捕し引渡すこと。万一この要求の承諾に関し、遅滞が生じた場合は、英国政府の警察は犯人を追跡し、シッキム領内のいかなる場所においてでもこれの引渡しを要求する。さらに英国の代理人により正式に署名された令状を示し、シッキムの官憲より、目的の遂行にあたってのあらゆる援助と保護を受ける。

七　最近の両政府間の誤解は、主として前首相ナムガイの行為によりできたものであるので、シッキム政府は、前述のナムガイ及び彼の血縁者の誰であろうと再びシッキムに入国したり、又議会に関与したりチョンビーの国王や一族の下で官職につく事を許さない。

八　シッキム政府はこの日付の時より、旅行者に関するすべての制限、英国領とシッキム間の交易における独占を廃止する。これより両国の臣民間においては自由な相互交通と、十分なる通商の自由が認められる。従って英国臣民が旅行又は交易の目的でシッキムのいかなる地域へ入る事も合法的である。そしてすべての国の臣民は、目的にもっともかなうなら、その目的が何であろうとも、下記に示されるもの以外は、何等干渉されることなくいかなる方法によっても又いかなる価格によってでも彼らの商品を商う事が出来る。

九　シッキム政府は、シッキムに居住する又は交易にやって来る、又はそこを通過するすべての国の旅行者・商人・交易者に対し、十分な保護を与える事を約す。欧州の英国臣民である者は商人、旅行者又貿易商であれ、シッキムの法を侵した場合に、ダージリン駐在の英国政府代表により罰を受ける。そしてシッキム政府は、その目的の為にただちにそれら犯人を英国官吏に引き渡す。違反者をいかなる口実・理由があろうと、シッキム内に決して抑留せぬこと。その他のこの国に居住する英国臣民はシッキムの法律に対し責任と義務を負うが、足を失ったり、不具にされたりする様な罰は決して受けない。そし

セケオン・クヅー・シッキム国王殿下、アシュレー・イーデン特使、カニング伯爵
一八六一年四月一六日カルカッタにてインド総督兼植民地総督閣下により裁可
（署名者）
C・U・エチソン（インド政府担当次官）

付録Ⅳ

一八九〇年、シッキムとチベットに関する英国と中国間の協定

グレートブリテン島及びアイルランドの女王、並びにインド皇帝であられる陛下と中国皇帝陛下は両帝国間に現在ある、友好と理解の関係を、心より維持し永続させようと望まれるので、又、最近の出来事は、前述の関係に混乱をもたらし、加えてシッキムとチベットの国境に関する諸事をはっきり規定し、永久に定着させることが望ましいので、英国女王陛下と中国皇帝陛下は、この問題に関して、協定を締結することにし、この為に、全権委員を指名した。それは、グレートブリテン島及びアイルランドの女王陛下側からは、ヘンリー・チャールズ・ケイス・ピティ・フィッツモーリス閣下（インド星勲章騎士団長、聖マイケル・聖ジョージ大十字章、インド帝国騎士団長）、ランズダウン侯爵（インド総督かつ植民地総督）である。中国皇帝陛下側からは、シエング、タイ閣下（チベットの帝国駐在官、副総督軍事代理者）である。この両者は会合して全権を相互に示し合い、妥当な形式であることを認めて、八カ条からなる次の協定に同意した。

一　シッキムとチベットの国境はシッキムのティスタ川へ流れこむ水とその支流とを、又チベットのモ川と、チベットの他の川に対し北へ流れこむ水流とを分ける山脈の頂きである。その境界線は、ブータンの国境のギブモチ山から始まり、上述の分水嶺をとおり、ネパール領に至る地点までつづく。

二　英国政府のシッキム国に関する保護政治は承

る隣国に対し侵略又は敵対等の行為をさし控えるものとする。もしシッキムと隣接国との間に何らかの係争問題が起きた場合は、それらの係争問題は英国政府の仲裁に任せ、シッキム政府は英国政府の決定に従うものとする。

一八　シッキムの全軍は高原地帯で従事する時、英国軍が加わり、援助と便宜を与えること。

一九　シッキム政府は英国政府の承認なしに、その領土のいかなる部分も他国に譲ったり貸与したりしてはならない。

二〇　シッキム政府は、英国政府の批准なしに、他のいかなる国の武装軍たりともシッキムを通過させないことを約す。

二一　英国政府より引渡しを要求されていた犯人のうち七人がシッキムを逃げ、ブータンにかくれたがシッキム政府は、ブータン政府より、これらの犯人の引渡しを受ける為最大の努力をする事を約し、捕えられた犯人達はただちにダージリンの英国当局に引渡すことを約する。

二二　シッキムに実効性ある政府を樹立し、かつ英国政府との友好関係をより良く維持していくという見地から、シッキム国王はチベットからシッキムへ政府を移し、一年間のうち九ヵ月間そこに滞在する事に同意する。更にシッキム政府により大使一人を選任し、ながくダージリンに居住させる事に合意した。

二三　二三ヵ条から成り、英国公使アシュレー・イーデンとトゥロンにいる国王セケオン・クゾー・シッキム国王殿下によってダオ・ニーポー十七世、当年六一歳に当たる一八六一年三月二八日に合意し締結されたこの条約をイーデン氏はアシュレー・イーデン閣下とシッキム国王殿下の印と署名入りのナグリ語とブータン語訳のついた英語による条約を相互に取り交した。

公使は本日より六週間以内に英国王に、インド総督閣下、議会のインド植民地総督により裁可されたこの条約の引き渡しが行なわれるように手配するものとする。

（署名者）

（交易）一　交易市場が、国境のチベット側のヤツンに設立され、一八九四年三月一日以来、交易の為すべての英国臣民に公開される。インド政府はその市場における英国の交易状況を視察するためヤツンに居住する官吏を派遣する自由がある。

二　ヤツンで交易する英国臣民は、国境とヤツン間をあちこち自由に旅行し、ヤツンに居住し自分自身の便益、又商品の貯蔵のために、家又は倉庫を借りる自由を持つ。中国政府は、上記目的のために適当な建物を英国臣民に供し、そして、ヤツンに居住するという調整案第一条によりインド政府により任命された官吏、官吏団に、特別にふさわしい居住地を供することを引受ける。英国臣民は、好むならば誰に対しても、彼らの商品を売り、その土地の商品を物で又は金で買い、いかなる種類の輸送手段をも利用し、又一般的に地方的慣習に従って何らの遠慮なしに、商行為を行なう自由がある。そのような英国臣民は、その人格、財産に対する十分な保護をうける。国境とヤツンの間でチベット当局により建設された休息所があるラン・ジョ及びタ・チュンにおいて、英国臣民は、通常の料金を払って旅行の足をとめることが出来る。

三　武器、弾薬、軍事貯蔵品、塩、酒、麻酔剤等の輸出入品は、各々の政府の選択によりまったく禁止されるか、各々の政府が自国側が税を課すのが適当かどうか考える状況にのみ基づき許されるかである。

四　規約案第三条に数えあげられた種類以外の商品が、シッキム・チベット国境を越え又逆に、チベット・シッキムを越え、英領インドからチベットに入ってきたとき、その商品の出所がなんであれ、交易の為ヤツンで開かれた日から起算して五年以内租税を免ぜられる。しかしながら、この期間満了後、好ましいと思われるならば、税率が互いに同意され、励行される。

インドの茶は、中国の茶が英国へ輸入されるときの租税率をこえない率で、チベットに輸入される。しかしながらインドの茶は、他の商品が免除される五年間を保証されていない。

五　ヤツンに到来するすべての商品は、英領イン

認されているところであるが、英国政府は、この国の国内行政にも対外関係に対しても直接的排他的管理権をもつ。そして英国政府をとおすかその許可を得るかなしでは、この国の統治者及びその官吏は、公式、非公式を問わず、他国とのいかなる種類の公的関係をも持ち得ないことが認められた。

三　グレートブリテン島及びアイルラント政府と中国政府とは、第一条に規定された国境を、相互に尊重すること、かつ、国境の両側より、侵略行為がなされないようにすることを約す。

四　シッキムとチベット国境を通過する交易により一層の便益を供するという問題は、以後、盟約国に充分満足のいく調整という見地から論議される。

五　国境のシッキム側にある牧草地の問題は、より一層の検討と将来の調整の為に留保される。

六　盟約国は、論議と調整の為に、インドの英国当局とチベットの中国当局との公的連絡を処理する方法を留保する。

七　この協定批准から六ヵ月以内に二人の共同委員が、一人は、インドの英国政府により他の一人はチベットの中国駐在者により任命される。この共同委員は、前三カ条により留保されている問題について会合し議論する。

八　この協定は批准され、かつその批准は、その署名の日の後できるだけ早く、ロンドンにおいて交換される。そのあかしとして、それぞれの交渉者は同一に署名し、その紋章の印をおした。主イエスの一八九〇年三月一七日、つまり中国においては光緒一六年二月二七日、カルカッタにおいて、この協定は四部作成された。

（署名者）
ランズダウン及び中国政治代表

付録V

一八九〇年シッキム、チベット協定に付記された交易、通信、牧草地に関する規約

三　合同委員が英国及び中国政府により、シッキム、チベット協定の第七条に基づき、この協定の四、五、六条に留保されている問題の最終的解決という見地より、会合し議論する為に、任命されたことを明記する。このように任命された委員は、関連諸問題、すなわち交易、通信、牧草地について、会合し議論した。そして現に到達した九ヵ条の調整案と三ヵ条の一般条項に署名する為に、そしてこの九ヵ条の調整案と三ヵ条の一般条項が協定自体を形づくることを宣言する為に任命された。そのあかしとして、これに関しておのおのの委員は、その名を署名する。

一八九三年一二月五日、中国でいう光緒一九年一〇月二八日、ダージリンにて四部作成された。

（署名者）

ホー・チャン・チュン、ジェイムズ・H・ハート（中国委員）及びA・W・ポール（英国委員）

付録VI

一九五〇年三月二〇日付外務省の覚え書

インド政府は、最近デリーに招待されたシッキム国王代理クマール及びシッキムの政党代表者達と協議を行なった。討議はシッキムの政府における民衆代表の交際をも含めて、シッキムとインドとの間の将来の友好、そして国内の行政的調停という分野を包括するものであった。インドとシッキムの将来の友好関係に関する暫定協定が成立し、又決定もなされた。

シッキムの地位に関しては、将来もインドの保護国である事が同意された。インド政府は将来も、シッキムの対外関係、国防、通信に責任を負うものとし、このことは地理的条件から見てシッキムの安全と利益でもあり、同時にインドにとっても同じ事が言える。国内政治に関しては、シッキムは将来も自

ドから来ようとチベットから来ようと検査のため関税局に、報告されねばならないし、その報告は種類、質、商品の価値の十分な詳細を報告していなければならない。

六　英国と中国あるいはチベットの臣民間で、チベットにおいて交易問題が起きた場合には、交易問題は調査され、シッキム側の政治官吏と中国の国境官吏による、個人会議において解決される。個人会議の目的は、事実を確かめ正義を行なうことであり見解の相違がある場合には、被告の属する国の法が統治する。

（通信）七　インド政府よりチベットの中国帝国駐在官への信書は、シッキムの政治官吏より中国の国境官吏に手わたされ、国境官吏は特別の急使でそれを送達する。チベットの中国帝国駐在官よりインド政府への信書は、中国国境官吏よりシッキムの政治官吏に手渡され、シッキムの政治官吏はできるだけ早くそれを送達する。

八　中国とインド官庁間の信書は、当然の尊敬をもって扱われねはならない。そして急使は、あちこちと行ききする際両政府の官吏により助けられる。

（牧草地）九ヤツンの公開の日から一年がすぎたのち、シッキムで家畜に草を食べさせつづけるチベット人は、英国政府が時をみて、シッキムで家畜に草を食べさせることに関する一般的運営を立法化した諸規定に従わねばならない。そのような規定には十分な注意が払われる。

一般条項

一　シッキムの政治官吏と中国国境官吏との間に不一致がある場合、それぞれの官吏はその事を直属の上級官へ報告する。直属の上級官は、両者間に解決がなされなければ、こんどは自分が処置を各々の政府に問いあわせる。

二　この諸規定案が効力を発した日から五年が経過した後に、そして双方により六カ月の予告ののちに、これら規定案は実施、経験上望ましい修正や加筆を決定または採用する権限をもった双方から任命された委員により改訂される。

は自治権を享受する。

第三条

第一項　インド政府はシッキムの国防、領土保全に対し責任を負う。インド政府はシッキムの国防又インドの安全にとって必要とあれば、予備的であろうと又そうでなくともシッキムの国内又は国外において方策を講ずる権利を有する。特にインド政府は、シッキム内のどこにでも軍隊を駐留させる権利を有する。

第二項　第一項に述べられた方策は、可能な限り、シッキム政府と相談の上でインド政府により講ぜられる。

第三項　シッキム政府は、インド政府の事前の同意なしでは、その目的が何であろうとも、武器、弾薬、軍事貯蔵品又他のどの様な種類の戦略物資をも輸入してはならない。

第四条

第一項　シッキムの対外関係は、政治的なものであれ、経済的なものであれ、財政的なものであれ、もっぱらインド政府によって指揮され制限されなければならない。又シッキム政府はいかなる外国勢力とも交渉をもってはならない。

第二項　外国を旅行するシッキムの臣民は旅券の上ではインド保護民として扱われる。そして諸外国のインド大使から、インド国民と同様の保護と便宜を受ける。

第五条　シッキム政府は、シッキムに持ち込まれた、又はシッキムを通過する商品に対し、いかなる輸入関税も通過税も又他の輸入税も賦課せぬ事に同意する。又インド政府はシッキムよりインドへ持ち込まれた、シッキム原産の商品に対し、いかなる輸入その他の租税を賦課しない事に同意する。

第六条

第一項　インド政府は、シッキムにおいて鉄道の使用、飛行場、着陸基地、航空施設、郵便、電報、電話、無線設備を建設、維持、制限する独占的権利をもつ。シッキム政府はインド政府に、上記物件の建設、維持、保護に関する各種の援助を与えねばならない。

第二項　しかしながらシッキム政府はインド政

治権を享受し、その自治権は、善政と法と秩序の維持に関し、インド政府の最終的責任に従う。

現状では、インド政府の官吏が、シッキム国の総理大臣である。しかしインド政府の政策は、シッキム国の人民がその政府と積極的に結合して行くという政策であり、幸いにも国王殿下とはこの政策について十分調整がなされた。まず第一段階として、すべての利益を代表する顧問会議が総理大臣と結びつきをもつことが提案される。次の段階は、選挙を根本原則とする公開村会を制度化して行く事である。これは民衆統治の術を教育する本質的実効的過程である。これらの公開村会は、やがて国家会議を選出し、その会議の機構と責任範囲は次第に拡大して行くだろう、というのが狙いである。

シッキムの国王に代わり、この討議に参加することを委任されたシッキムのクマールは、合意に達した協定を持ち帰る事になった。公式条約が早い機会にシッキム国王とインド政府の間で調印されることを期待するものである。

付録VII

一九五〇年のインド・シッキム条約

インド大統領とシッキム国王殿下は、すでにインド・シッキム間に存する良い関係をさらに強化する事を望み互いに新条約を締結する事に同意した。そしてインド大統領は、この目的の為に彼の全権大使として、シッキムにおけるインド政治官吏である、シュリ・ハリシュワル・ダヤルを任命し、そしてシッキム国王殿下はシュリ・ハリシュワル・ダヤルの信任状を正当なものと認め、この二人は以下のごとく同意した。

第一条　現在インドとシッキムの間で効力を持つ英国政府とシッキムの間のすべての旧条約は、今後公式に無効とする。

第二条　シッキムは引続きインドの保護国であり、この条約の条項に従い、その国内問題に関して

国外にインド政府により設立された裁判所で審理する為に、インド代表に引渡されねばならない。

第九条

第一項　シッキム政府は、インド代表の要求に基づき、シッキムに難を逃れる為、シッキム外からの逃亡者を逮捕し引渡す事に同意する。この要求に応ずることが、遅れる様な場合は、インド警察は、シッキムのいかなる地域に入り込んででも引渡しを希望する犯人を追跡する事が出来るし、インド代表の署名のある令状を示すことにより、シッキム官吏より目的遂行の為の各種援助と保護を受ける事が出来る。

第二項　インド政府も、シッキム政府のなす要求に基づき、インド領内に逃げた、シッキムからの逃亡犯人に対し引渡し処置をとり、引渡す事に同意する。

第三項　この条項において『逃亡犯人』とは、一九〇三年のインド引渡法の付属第一表に定義されている引渡罪もしくは以後引渡罪に関しインド政府とシッキム政府間に合意されるであろう他の罪を犯したことで告発されている者を意味する。

第一〇条　インド政府は既にインド、シッキム間に存在する友好関係を心にとめているし、その友好関係は、この条約によりさらに強化した。そしてインド政府はシッキムの発展と善政を援助することを望んでいるが、この条約の条件がシッキム政府により十分守られる限り毎年三〇万ルピーをインド政府よりシッキム政府に支払うことに同意する。

第一一条　インド政府は、シッキム駐在の代表を任命する権利を有する。そしてシッキム政府は彼とその職員に、シッキムにおいて彼等の職務を遂行するに必要とする便宜を与えなくてはならない。

第一二条　この条約の各項の解釈に関し何らかの論議が起こり双方の協議によっても解決しないときは、論議はインドの最高裁判事に付され、その結論は最終的な決定となるものとする。

第一三条　この条約は両当事者による署名の日より批准されて発効する。

一九五〇年一二月五日

ガントクにて二部を作成

府が同意する限りにおいて、鉄道の使用、飛行場着陸基地そして航空施設を建設、維持制限する事ができる。

第三項　インド政府は、戦略上の目的からそしてインドと他の隣接諸国との連絡を改良する目的から、シッキムに道路を建設、維持する権利を保有する。そしてシッキム政府は、インド政府にこの道路の建設、維持、保護に関する各種の援助を与えねばならない。

第七条

第一項　シッキム臣民は、インド内に入り又インド内を自由に移動する権利を持つ。又インド国民は、シッキム内に入り、シッキム内を自由に移動する権利を有する。

第二項　シッキム政府が、インド政府と相談の上で規定した制限に従って、インド国民は、

(a)　シッキム内で交易、商売をする権利を持ちかつ、

(b)　シッキムにおいて、何らかの交易に制限が確立された時は、シッキムで交易し、居住する目的の為、動産、不動産を問わず、何らかの財産を獲得、保持し又処分する権利を持つ。

第三項　シッキム臣民もまた同様に、

(a)　インドにおいて交易、商売をし又彼の地で仕事ができる、かつ、

(b)　インド国民同様、動産、不動産にかかわらず財産を獲得、保持、処分する権利を有する。

第八条

第一項　シッキム国内のインド国民は、シッキムの法に従わなければならない。又インド国内のシッキム臣民はインドの法律に従わなければならない。

第二項　シッキムにおいて、インド国民に対し又はインド政府役人に対し、又は外国人に対し犯罪行為が起きた時は、どのような時でもシッキム政府は、シッキムにおけるインド政府の代表（以後インド代表と称する）にその人達に対する特別の経費を負担しなくてはならない。

もしインド政府役人、もしくは外国人の場合インド代表が要求するならば、シッキムの国内又は

ルントゥ　谷への下り坂
レノック　黒い丘
ガントク　高い丘
ラブデンツェ　首長の邸
バルミエ　険しい尾根
ラギャップ　峠の裏側
セブ・ラ　冷い峠
サムドン　橋のテッペン
ティスタ　親切な岩

付録IX

一九四九年のインド・ブータン条約

インド政府を当事者の一方とし、ドルック・ギャルポ殿下の政府を他の一方とし、双方ともに、友好的な態度で、確固として永続的基礎でもって、英国政府の権威がインドにおいて終了したことで起きてきた様々な事柄の状態を調整したい。また国民の福祉のため必要な友好と隣人関係を助成、養育したいという欲望にかられたので次なる条約を締結し、その目的のため、代表者つまりインドを代表し、インド政府に代わって前述条約同意の全権をもつシュリ・ハリシュワル・ダヤルと、ドルック・ギャルポ殿下を代表し、ブータン政府に代わって、前述条約同意の全権をもつ、デブ・ジンポン・ソナム・トブギェ・ドルジ、ヤンロップ・ソナム、チョージム・トンデュップ、リンジム・タンディン、そしてハ・ドルン・ジグミ・パルデン・ドルジを任命した。

第一条　インド政府とブータン政府との間には恒久的平和と友好関係が存する。

第二条　インド政府は、ブータンの国内行政に何らの干渉もしないことを断言する。それに関し、ブータン政府はその対外関係についてインド政府の助言によって指導を受けることに同意する。

第三条　シンチュラ条約第四条でブータン政府に認められ、一九一〇年一月八日の条約で高められた補償と、一九四二年に認められた年一〇万ルピーの一時助成金の代わりに、インド政府は、ブータン政

（署名者）
タシ・ナムギャル（シッキム国王殿下）及びハリシュワル・ダヤル（シッキムにおけるインド政府代表）

付録VIII

地名の持つ意味

シッキム　新しい家
デモジョン　米のとれる谷
ロン・パ　山地人
モン・パ　低地人
ランギット　鞍部又はキレット
ラン・ニュ（ティスタ）　澄んだ川
ラトン　うねり
サンチャル　湿った霧のかかった峰
パルート（フォク・ルト）　むき出しの侵蝕された峰
シンガリラ　ハンの木の丘
サンダク・プ　高い屋根
パンキム　王の家臣
ピュンゴン　篠竹で作った家
パショック　密林又は森
ヨクサム　三人のラマ僧の会議所
ガントク　尾根の高まった頂上
ラチェン　大きな峠
ラチュン　小さな峠
チョラ・モー（ツォ・ラ・モ）　女神の湖
ビタン・ツォ　ヤクの湖
タニツォ　馬の尾の湖
カンチェンジュンガ
　偉大なる雪をいただく五つの宝物殿の山
チョモラリ　女神の丘
チョラ　主だった峠
ヤク・ラ　放牧民が通る径
ナツ・ラ　「聞き耳をたてる」径
ジェレプ・ラ　平らな峠、低い峠
ナトン　木の多い牧場

べてのブータン人の引渡しをする処置をとる。
第二項　ブータン政府はインド政府の又はこの為にインド政府により委任された官吏の書面による正式な要求に基づいて、一九〇三年のインド引渡法の付属第一表に列記されている罪で告発されブータン政府の管轄する領土に避難したインド国民もしくは外国民を引渡す。その引渡しは外国とインド政府によりなされた諸調整を遂行することで要求される。またインド領内で関連する罪を犯したのちに、ブータンに逃げこんだブータン国民は、罪が犯された地域の地方裁判所を満足させるような提出された犯罪の証拠に基づき引渡さねばならない。
第九条　この条約の適用又は解釈に際し何らかの困難、論争が起きた場合、第一段階として、交渉により解決されるべきである。もし交渉開始より三カ月以内に解決に達しないならば、その時、事態は三人の仲裁者に付託される。この三人は、次の方法で選ばれる。インド、又はブータンの国民でなければならない。

(1)　インド政府により指名された一人。
(2)　ブータン政府により選ばれたインドの連邦もしくは高等裁判所の判事一人、彼は議長となる。
(3)　ブータン政府により指名された一人。
この法廷の裁決は、最終的なものであり、双方により遅滞なく執行される。
第一〇条　この条約は双方の同意により終わらせる、もしくは変更をうけない限り、永久に効力を持ちつづける。
一九四九年八月八日、ブータンの日付で、己丑の年六月一五日、ダージリンで二部作成

ハリシュワル・ダヤル（シッキム政治代表）

デブ・ジンポン・ソナム
トブギェ・ドルジ
ヤンロップ・ソナム
チョージム・タンディン
ハ・ドルン・ジグミ

府に年五〇万ルピー支払うことに同意する。そして更に前述の年支払いは毎年一月、一〇月に行なわれ、最初の支払いは一九五〇年一月、一〇月になされることが同意された。この支払いはこの条約が効力をもちその条項が遵守される限りつづけられる。

第四条　前述両政府間に存在し継続する友好を更に特色づける為、インド政府はこの条約署名の日より一年以内にブータン政府に対し、デワンギリとして知られた地域の約三二平方マイルの領土を返還する。インド政府は、ブータン政府に返還する地域を区画する有能な官吏又は官吏団を任命する。

第五条　これまで同様、インド政府とブータン政府の領土間において自由な交易と商業がある。そしてインド政府はブータン政府に陸上でも水上でも時折の相互調整により指定される森林道路を使用する権利を含め、インド政府の領土を通過して、その生産物を運ぶための各種の便益を認めることに同意する。

第六条　インド政府は、ブータン政府がインド政府の援助と是認をもって、インドから又インドを通じてブータンへ、どのような武器、弾薬、機械、軍需物資、軍事貯蔵品であれ、ブータンの強化と安寧に要求され欲せられるならば何でも輸入する自由があること。そしてこの調整は、インド政府が、ブータン政府の意思が友好的であり、このような輸入品はインドにとって何ら危険がないと満足する限り、常に有効であることに同意する。他方ブータン政府は、そのような武器、弾薬等をブータン国境を越えて、ブータン政府によってでも私人によってでも、輸出をしないことに同意する。

第七条　インド政府とブータン政府は、インド領内に居住するブータン国民は、インド国民と同等の権利を有し、ブータンに居住するインド国民はブータン国民と同等の権利を有することに同意する。

第八条

第一項　インド政府はブータン政府の書面による正式な要求に基づいて、一九〇三年のインド引渡法（その写しはブータン政府に与えられる）の条項と一致してインド領内に逃げこんだ前述の法の付属第一表に列記されている罪で告発されたす

＊東部ブータン

サクテン（標高約三、〇〇〇メートル）

約三〇〇人の人口を持つ中型の村で、ドルンパを預かる、リンポチェと数人のラマ僧を持つ小さなゴムパがある。マナス川の支流であるダンメ川がこの地をうるおす。小麦、馬鈴薯、大麦を産するが住民の主たる生業は牛、ヤク、馬、ラバを飼育する事である。この地域の住民即ちミラサクテンはNEFAのタワン地区のモンパスに非常に緊密である。

ジョンカール（標高約一、七〇〇メートル）

ドルンパを預かる小さな村で僧院もある。

タシガン・ゾン（標高約一、〇〇〇メートル）

特に歴史的背景から見てブータンの主要な町の一つである。すなわち四〇名のラマ僧を持つ僧院である重要なゾンを有する。又四〇〇名の生徒を収容出来る新しい学校が建設されている。トウモロコシ、米小麦、大麦が栽培される。

ルンチ・ゾン

クル川の堆積の上にあるルンチは、温暖な気候に恵まれ良質の米の栽培に絶好な場所である。クルトイ地方の中心地であり又独特の手織りの着物の産地としても知られている。一三〇名の生徒を持つ小学校、施療院、癩病患者収容所がある。人口は約五、〇〇〇人と推定される。

ヤユン（標高約一、〇〇〇メートル弱）

ドルンパの統治下にある小さな村。

モンガル・ゾン（標高約一、五〇〇メートル）

約五〇〇人の住民をかかえる東部ブータンの第二の大きな町である。そして僧院と二〇〇人の生徒を持つ中学校、施療院とがある。マナス川の五つの支流の一つであるクル川の堆積に形作られている。この地域の人々は、籠編み、薪作り、銀細工に秀れている。約五マイル離れたリンメントンは家畜園芸の中心地である。

パルデン・ドルジ

批准の方法

友好と近隣関係を助長育成する事に関する条約が一九四九年八月八日ダージリンで、インド政府の代表と、ブータン国王ドルック・ギャルポ殿下の政府代表により署名されたが、この条約の逐語は以下の通り。

＊　＊　＊

インド政府は、前述の条約を考慮して、これにより同様に確定し批准する。そしてここに盛り込まれている各条項を誠実に実行し、遂行する責を負う。

その証として、この批准方法は、インド総督により署名押印される。

一九四九年九月二二日

ニューデリーにおいて

（署名者）　C・ラジャゴパラチャリ

友好と近隣関係を助成育成することに関する条約が、一九四九年八月八日ダージリンでわが政府の代表と、インド政府の代表により署名されたがゆえにこの条約の逐語は次の通り。

＊　＊　＊

われわれ政府は、前述の条約を考慮して、これにより同様に確定し批准する。そしてここに盛られている条項を誠実に実行し遂行する責を負う。

その証として、私はこの批准方法に署名し、私の印を押す。

一九四九年九月十五日

トンサにおいて

（署名者）

ジグミ・ドルジ・ワンチュック

付録X

地名に関する歴史的・宗教的背景

の代に建てられたものである。現在の建物はブータンの中のもっとも壮麗な建物の一つに数えられる。トンサ出身の一族により統治されている。約一〇〇人の生徒を持つ中学校と施療院とがあり、人口は約二、五〇〇人と推定される。

チャンディビ（標高約一、〇〇〇メートル）ピポンに統治される。ニェン川に沿った小さな村であって、チャンディキとリダンの間にペレ峠（標高約三、五〇〇メートル）があり、これはブータンを東西に走るブラック・マウンテン山脈を越える主な峠となっている。ニャラ村とドルンラ村が隣接している。チ

リダン（標高約二、五〇〇メートル）ピポンに統治される村の一つであってラ川のそばにある。村の中に六人のラマ僧を持つゴムパがある。

サムテンガン（標高約三、二〇〇メートル）四〇余軒の家に二〇〇人程の住民が住む村で、針葉樹林に変わる境界線に沿っている。

ワンドゥポドラン（標高約一、四〇〇メートル）ブータン陸軍の練兵場がある。ゾンとかなり大きな僧院とがあり、このゾンはブータンの中ではもっとも古いものの一つであると言うことである。病院と三〇〇人の生徒を持つ学校とがある。隣の谷をサンコシュ川が流れている。

プナカ（標高約一、五〇〇メートル）かつてブータンの首都であり、ダルマ・ラジャがいたところである。壮大なゾンはブータンの中の最も古い建物の一つである。又数多くの小さいゴムパと、種々のシャブドゥンの墓も散在している。モ川とポ川がここで合流してサンコシュ川となる。一軒の学校と施療所がある。

チョルテニェプ（標高約二、一〇〇メートル）ゴムパを持つ大きな村で、このゴムパにはマイトリア・ブッダの華麗な像がある。

サリン（標高約一、五〇〇メートル）
深い森の中にある小さな村。

＊中央ブータン
センゲル（標高約三、〇〇〇メートル）
ここから樅と松が茂る中央ブータンの放牧地帯となる。二〇軒ばかりの小さな村である。

ウラ（標高約三、二〇〇メートル）
ドルンパの統治下にある住民約二〇〇人を持つ大きな村である。ここにもまた小さな僧院がある。

ブムタン＜ビャカール・ゾン＞（標高約三、二〇〇メートル）
ブムタン又は、「精霊の平原」は中央ブータンのもっとも重要な町である。ドルック・ギャルポの義理の姉妹関係に当たるアジ・チョーキがワンディチョリンの宮殿に住んでいる。ビャカール・ゾンは傑出した構造でありチャマル川の岸に位置している。ここにもまた二つの僧院――約八〇人のラマ僧を持つタルパリンと六〇人のラマ僧を持つニイマリン――がある。また一一〇名の生徒を持つ小学校と施療院がある。
ブムタン峡谷は二つの谷から成っていてワンディチョリンが右側の谷で左側がタシチョリンである。ワンディチョリン地域はマナス川の主な支流の一つであるチャムキ川によってうるおされている。約一五、〇〇〇人から成るこの地域に住むブムタップは北方のクルテパとか南側のクルメスとは区別されている。

ゲトゥシャ（標高約三、二〇〇メートル）
王太后の住居であるタシチョリン宮殿が近くにある。美しい谷間に抱かれた一五軒ばかりの村でドルンパの統治下にある。

トンサ（標高約二、三〇〇メートル）
トンサ・ゾンは古く歴史的な建造物である。現在の建物は後世において作られたものだが、この最初の建物は一、〇〇〇年以上も昔チュシ・ミングール王

パワがインドから虎に乗ってここに至ったとされている。渡り廊下で続く建物の中にいくつかの軍神像が目立つ。

ドゥッギェ・ゾン（標高約二、三〇〇メートル）
この僧院はシムトカ・ゾンと共にブータンでももっとも古い僧院である。かつては壮大な建物であったが約一五年前の火事によって焼け落ちてしまった。

＊南部ブータン
サムチ（標高約五〇〇メートル）
西ベンガルのチャマルチの影響を受けてネパール語を使う土地で住民六、〇〇〇人程度を持つ。果樹産業の中心地で拡る果樹園、集荷所、加工工場等が点在する。南ブータン地区の森林管理の統制がここで行なわれ又インドの臨時地質研究所もここにおかれている。また二〇名の入院患者を収容出来る病院と肺結核療養所もある。

プンツォリン（標高約二五〇メートル）
ブータンにおける最初の近代的道路の出発点で約六、〇〇〇人の住民を持つ。ここから一〇七マイル以上に及ぶ道路は、パロと首都ティンプーに至っていて新しい建物や事務所が建設されている。六、八室程度の小さいホテルもある。技術関係の専門学校も最近開設され、一〇〇人ほどの生徒がいてブータンの技術・工業関係の中心になろうとしている。

サルバン（標高約二五〇メートル）
ここは南部ブータンの中でネパール語を使う町として第二の重要なところであり、約四、〇〇〇人の住民を持つ。又商業地としても重要で北方のチラン産の商品はオレンジ、馬鈴薯、豆類等主として生鮮品を商う特色がある。チランはサルバンの二五マイル程北方にありやはりネパール語を使う約二〇、〇〇〇人の人口がある。

サンドルプ・ジョンカール（標高約三〇〇メートル）
約三三平方マイルのこの町は一九四九年のインド・

＊西部ブータン

ティンプー（標高約二、四〇〇メートル）

このブータンの新しい都はウォン川に沿って栄え、その標高故にすばらしい景観に恵まれている。ウォン川は北ベンガルと国境を接するプンチョリンまでブータンのほとんど全部を南に向かって流れる。ドルック・ギャルポの王宮はゾンから三マイルの所にあるデチェンチョリンにある。主な官房とブータン陸軍の司令部は現在はゾンの中にありそのゾンには三、四〇〇人のラマ僧を収容出来る建物もある。又軍医長の監督下にある大病院もあり、義務教育の為の学校も建設中である。小型水力発電所も稼動している。街の近代化の為の数多くのプランが出来上っている。この渓谷の主な農作物は米、粟、とうもろこし、馬鈴薯、唐辛子等である。

パロ（標高約二、三〇〇メートル）

行政と開発の中心地の一つであり、ウォン川の支流であるパ川の美しい谷にある。約七〇年前に再建されたゾンはその大きさと充実感とできわめて印象的であり、この地には約四〇〇年前からゾンがあったはずである。米、小麦、大麦、とうもろこし、馬鈴薯等がパロ谷の主な産物である。

一六二七年牧師フランコ・カセラのパロに関する記述によれば「谷間の六、七〇〇軒はあると思われる家々は皆三階又は四階建てであった。家畜は数多くそこの人々は他の地のブータン人に比べてかなりゆとりがある様に思われた。王宮の少し上流においてパロ川は北から流れ込む他の川と合流する」と書いている。

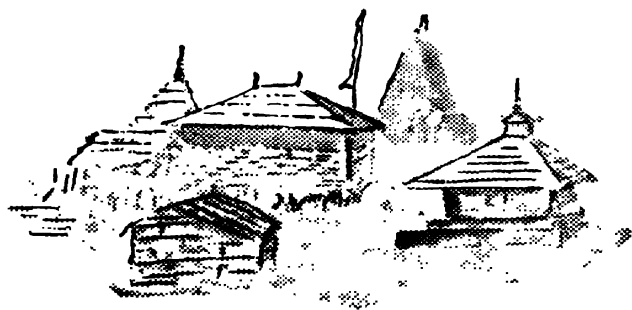
ハ（標高約三、〇〇〇メートル）

ハ川に沿って陸軍部隊のあるところ。

タクサン・ゾン（標高約三、一〇〇メートル）

ブータンにおける主たる僧院の一つでもっとも位の高いものであって、ほとんど垂直な崖ふちに建てられている。タクサン・ゾンと言うのは虎の巣と言う意味に当たる。伝説によれば、導師パドゥマ・サン

シッキム雑感

——座談会

ブータン条約締結を機にブータン政府に返還された。約二〇キロほどのところにデウォタンがありブータンの国境警備の任に当たっている。サンドルプ・ジョンカールはインドのアッサムのダランガの町と国境を接しており、毎年一一月から四月迄の六カ月間市場がたっている。タシガン・ゾン地方のブータン人が手織りの繊維製品、チーズ、バター、オレンジ、蜂蜜、豚毛、家畜類を持ち寄り、かつ帰りに、塩、羊毛、綿糸、衣類、他の消耗品とか生活必需品を買いつけるのである。

木村 はじめに三田さんから、慶応義塾大学山岳部とシッキムの関係についてお話しいただきましょう。

三田 シッキムはご承知のように、世界第三位のしかも非常に美しい山カンチェンジュンガがあるので有名です。シッキムと隣接して、高度七千フィートにあるインドのダージリンから見たカンチェンジュンガの雄容さは、想像を絶するものがありますね。ダージリンは、エヴェレストやカンチェンジュンガの出発口として知られていたところです。

塾の山岳部とシッキムの関係は非常に深いものがあり、塾の文学部で教鞭をとっておられた鹿子木（かのこぎ）先生が、日本人として最初にシッキムに入られ、カンチェンジュンガのかなり奥まで偵察しておられる。先生は常に人を惹きつける、魅力のある熱血漢でしたね。今の若い世代の登高会員や山岳部の学生は、先生のことについてはほとんど知らないだろうが、私たちの層はかなり山というものについて、直接にも間接にも先生の影響をうけています。

先生がシッキムに行かれた当時は第一次大戦の最中で、英国の統治下にあるインドは、非常な圧政にあえいでいた時でした。先生は悲憤慷慨の人で、インド独立論を主張していて、極端にいえば、インド独立のあかつきにはだれがどの要職につくべきかということまで言ったようだった。ところが、同行したインド人（弁護士）が、逐一英国の官憲に先生の動向や言動を報告したので、スパイの容疑をかけられ、先生の出国を待ちかまえていたのです。

当時、シッキムに入る時には何日以内に出国すること、また滞在中にチベットに入らないことという誓約書を書かされたんですね。ところが、先生は山の中を歩いていたもんだから、出国期限が切れ、英国側に良い口実を与えてしまったのです。シッキムを出るとすぐに逮捕されましてね、そのままシンガポールに送られ、投獄されるハメになったのです。

これを聞いた日本側は大騒ぎとなり、先生の釈放のためにいろいろと弁解を試みたんですが、いっこうにききめがなかった。かえって、英国のインド政策を批判した先生の手紙のコピーを英国側が証拠として出してきたりして、二進も三進もいかない有様

●出席者

三田幸夫（明治三十三年生。慶大経済学部卒。前日本山岳会会長。昭和二十九年のマナスル遠征隊長）

槇沼廣吉（大正五年生。慶大医学部卒。医学博士。日本山岳会会員）

内山正熊（大正七年生。慶大経済学部卒。法学博士。法学部教授。現慶大山岳部長）

木村泰助（昭和七年生。慶大文学部卒。日本山岳会会員。現慶大山岳部監督。勤務先東食）

ちょうどその頃でしたか、ドイツのバウァーという有名な登山家が、高所用キャンプとして雪洞を掘りながら勇猛果敢にカンチェンジュンガ登攀を試みたのです。私自身、雪洞を掘って登るということをその時はじめて知ったわけですが、さっそく日本に知らせました。

木村 それからですね、日本でもいわゆる雪洞時代がはじまったのは……。

三田 そうです。ヒマラヤ登山をめざすわれわれにとっては、ぜひとも取り入れるべき技術と思いました。その点、われわれは、雪洞技術を修得するには恵まれていましたね。なにしろ、日本は高い山はないのですが、豪雪地帯が多いですからね。

バウァーは、二回(一九二九、一九三一年)にわたってカンチェンジュンガをアタックしたんですが、結局は失敗に終わりました。それからはみなさんもご存知のようにヒマラヤ登山の黄金時代がきて、カンチェンジュンガは一九五五年に英国隊が登ったわけです。最近、京大の学士山岳会が、カンチの第二峰ヤルン・カーンに登りましたね。一人犠牲者を出しましたけど。

私がシッキムに行ったあとは、今日出席されている辰沼君も入っているし、その他何人か行っていますね。植物学者の中尾佐助さんもそうですね。しかし、今はなかなか入りにくいようです。

辰沼 私が行ったのは十年前でしたが、その時の旅行で、インドがO・Kといわなければ、シッキムに入れないことをつくづく思い知らされました。ですから、歴代の駐日インド大使にいつもご馳走しているようにしているんです。ところが、三田さんも良くご存知でしょうけど、ご馳走にはなるだけなってなんの返礼もないんですよね。(笑)

内山 むかしから英国の時代もインドの時代にもシッキムに入国しにくいのは何か理由があるのですか。

三田 やはり外国の勢力が入ってくるのを非常に嫌がるんでしょうね。ちょうど、緩衝地帯でもあり、いろんな国の勢力が入ってきていますからね、ネパールみたいに。

木村 辰沼さんがシッキムに行かれたのは、どの

でした。やっとのことで釈放されたときは、「今後、鹿子木は英国領土には一歩も上陸させない」という条件付だったのです。その後、先生は何度か海外旅行に出かけられたが、当時は香港をはじめ、上海、シンガポールなどいたるところ英国の領土であったために上陸できず、ずいぶんお困りのようでした。

以上が、日本人として初めて登山の目的でヒマラヤに踏み入った鹿子木先生の話です。塾の山岳部時代、私はこの話を聞いて大変感激し、ヒマラヤへの憧れはますますつのるばかりでした。私たち仲間の数人は、よくドウグラス・フレッシフィールドの『カンチェンジュンガ』をひもといては興奮し、手の届かぬ夢とは思いながらも写真や地図を眺め、主な山名や谷の名までおぼえこんでしまったくらいです。

木村　鹿子木先生のシッキム入りが、塾の山岳部のヒマラヤ熱を高めると同時に、日本のヒマラヤ登山の礎をきずいたことになりますね。ところで、三田さんがシッキムに行かれたのはいつごろのことですか。

三田　一九二八年（昭和四年）の一月です。そのころ私は、仕事の関係でインドのカルカッタにおりました。やっとのことで会社からひまをもらい、九日間の入国許可をとって、シッキムに入ったわけです。もちろん、目標はカンチェンジュンガに行くことでした。ダージリンの前面に、一万フィートから一万二千フィートぐらいのシンガリラ山脈があり、この山脈がずっと北の方へ走ってカンチェンジュンガにつながっているのです。私はその山脈をつたって、シッキムに入ったんですが、何分にも時間がなく、多少カンチェンジュンガに近づいて、スケッチをしたり、写真を撮ったりした程度でした。でも、旅行中の宿舎だったんですが、ダーク・バンガロウという見晴らしのいい丘に建てられた山小屋がありましてね、そこから見たヒマラヤの景観は、一生忘れることのできない思い出ですね。

私のシッキム旅行はそれだけでしたが、その後もインドには長く滞在していたので、いろいろな情報を日本の友人たちに送りました。

ようと思えば、わりに短期間で浸透するのですね。保健所や病院をつくったとかいうとすぐに効果があらわれてくるようです。

辰沼　これはブータン、シッキム、ネパールに共通していえることだけど、たしかに衛生状態が悪いといえば悪いんですが、われわれが見て悪いのであって、彼らにとってみればそうでもないんですよ。

木村　もしシッキムに日本人が行ったら、撃たれるということを聞いたことがありますが、反日感情はあるんですか。

辰沼　それはね、中印国境ですから、当時、日本人は中国人と間違えられたんです。今はどうだか知りませんが、とにかく危険でした。私がガントクに行く時に通った道路は、さらに奥のラチェンの方までのびているらしいのですけど、ガントクからはるかかなた道路ぞいを見ると、ところどころにインド軍のキャンプがあるのですよ。

三田　やっぱりインドの軍隊がないと守りきれないからね。シッキム自体はたいした軍隊はないんですよ。

内山　中印問題に通じた人の話では、インドが中国と一戦交じえるとチベットの方が勝つのだそうです。チベット兵は高い所は慣れているんですね。インド軍は下から上って行くものだから高地に慣れていないので、ぜんぜんだめらしいですよ。

三田　それでひとつは登山が盛んになったんですよ。

内山　そうですか。

三田　政府が非常に力を入れてね、国防省が中心になって……。

内山　辰沼さんが出席された会議は、どういう目的で開かれたものだったのですか。たとえば高山病とか特別の地方の特殊な病気とか医学上の問題があって会議が開かれたのですか。

辰沼　今から考えてみると、中印国境の問題が起きる直前でしてね。やはり、戦争をするためにということらしいですね。高い所で戦争するためにはどういうことを知っていなければならないとか……なにしろ国防省の主催ですから。

三田　インド自体は登山をやってなかったでし

ようないきさつだったのですか。

辰沼　私が、シッキムに興味を惹かれたのは、鹿子木先生の『ヒマラヤ行』と三田さんのお話にもあったバウァーの『カンチェンジュンガ』を読んでからです。それに、今から十年前のことですが、日本の登山者がヒマラヤへヒマラヤへとつめかけましたね。これはまあネパールに入れたからですけど。ところが、このコースですと大変費用がかかるんですよ。学生の登山隊がたびたび行くには所詮無理なんですね。なんとかヒマラヤへ手軽な費用で行けるところはないかと思いまして、それがシッキムだったんです。鹿子木先生や三田さんが先鞭をつけてくれたところですし、学生たちの条件を満たすには十分なところでした。そこで、私はシッキムに入れるように駐日インド大使などに交渉をはじめたのです。

たしか、昭和三八年でしたか、ダージリンで、インド国防省主催の登山に関する医学会議を開くから出席しないかという手紙を受けとったのです。これはシッキムに入るいいチャンスだと思い、さっそく出かけました。

会議が終わってから入国許可をとったのですが、ちょうどダージリンに来ていたシッキムの国王に会ったことなどで、かなり簡単に入国できました。

首都ガントクに着くや否や、警察へ行って、カンチェンジュンガのよく見えるもう少し奥地へ行きたいと頼みこんだのですが、ぜんぜん受けつけないんですね。カンチェンジュンガが見たいんなら、インドのダージリンの方がよく見えるって言われましたよ。事実そうなんですがね。そこで今度は、国王がダージリンに行って留守なのはわかっていましたが、王室の秘書官に会って、こういうわけなのでもう少し奥へ行きたいと交渉してみたんですが、やはり態よく断られた。ホテルの玄関には、いつもお巡さんが見張っていて、なんとも動きのとれないところですね。しかたなしに、町中を歩いてみたんですが、汚ないことといったらネパールもそうですが、悪臭がたちこめ、ずいぶん苦労させられました。

内山　でも、最近の七カ年計画で、だいぶ近代化され、衛生状態もよくなったという話ですが、たしかシッキムは、岡山県程度の広さですから、改革し

族構成などはどうなっているんですか。

三田　はっきりしたことはいえませんが、レプチャという純粋のシッキム人と、あとはチベット系とブータンの人間で、インド系はごくわずかです。みんな日本人に非常によく似ています。

内山　国王とか有力者の親類は、チベットの国王の何番目の娘をもらったとかいう話が多いですが、人種的にはチベットに近いんですね。

三田　近いですよ。ブータンなんか特にね。

辰沼　シッキム、ブータンにかぎらずネパールもそうなんですが、チベットの影響が大きいですね。

内山　植物がおもしろいらしいですね。

三田　大変な宝庫ですよ。百年以上も前に、英国のジョセフ・フーカー（一八一七—一九一一。著書に『ヒマラヤン・ジャーナル』がある。）という植物学者がかなりつっこんだ研究をしてましてね。

内山　貿易なんかはどうなんですか。日本の品物は入っておりますか。

三田　ほとんどインドに依存しています。直接の貿易はどこの国ともしていないでしょう。あればチベットぐらいでね。日本の品物はインドを通じて多少入ってくる程度でしょう。

木村　ところで、われわれにとってシッキムに一番興味があるのは、なんといってもカンチェンジュンガをはじめとするヒマラヤなんですが、ヒマラヤ登山をするにはシッキムが一番便利だそうですね。

辰沼　そうです。交通費が安いこと、つまり山のふもとまで車で行けるんです。それに人夫賃もいらない。ネパールから行くとなるとかなり迂回するので、一ケ月も余計にかかりますね。

内山　そうすると、ヒマラヤ登山の鍵といってはいいすぎですが、シッキムは非常に重要なポイントなわけですね。

三田　政治情勢さえうまく行けば、ここから登っていくのが一番ですよ。

辰沼　そうですね。安くあがりますからね。

内山　そういうこともあるでしょうが、登る困難の度合はどうなんですか、ネパールから登るのとシッキムから登るのと……。

辰沼　やっぱり、シッキム側のほうがちょっとき

よ。高い所での戦争は経験がないわけですよ。高山病というのは実際に登って研究しなきゃわからないですしね。ですから、各国のヒマラヤ登山隊のドクターを集めたわけですよ。

内山 そうすると、高山病という方向感覚がなくなったり、力が抜けたりした場合、どういうふうにすれば防げるかということが、主題になったわけですか。

辰沼 そうですね。もともと英国圏ですから、インドにも英国の指導を仰いだ生理学者がおりますが実際に高い所で動いたり登ったりするということになると、彼らの理論とは少しかけはなれてくるわけですよ。ですから今回の会議では、私たちの話の方が性に合ったわけですよ。たとえば、細胞の中にある酸素のパーセントが、何パーセント違うと生理的にこういう違いがあるということよりも、むしろ七千メートル、八千メートルというところで一歩あるけばこのくらいくたびれるということの方が役立つわけですよ。

内山 シッキムの土はスレートみたいに滑りやすいといいますけど、シッキムで少しトレーニングしていくとエヴェレスト等に登る時、非常に役に立つような、そんな地質ですか。

三田 地質は、ちょっとわからないんですが、高い所にいけばどこも共通していますね。それより、シッキムは非常に雪が多い国なんですよ、ヒマラヤのなかでも、雪で苦労するんですよ。

内山 何月においでになったのですか。

三田 一月でしたがね。だけどスキーなんかできるほど雪が積もらないところですよ。スキーを持っていったんですが、ぜんぜん使えなかった。

内山 シッキムの人たちは、とても温和で人柄がいいといわれますが……。

辰沼 そうですね。なんというんでしょうか、人柄はいいけれども貧困ですね。貧すれば鈍するというのか……。むかしの日本のお百姓といった感じじゃないでしょうか。

三田 純朴であることにはちがいないですね。でも、だんだんモラルが乱れてきていますね。

内山 人口は十二、三万ていどらしいですが、種

シッキムへの憧れ
僕のシッキム地図
シッキムの或る夜

三田幸夫

ついと思いますね。

三田　シッキムという国は山ばかりですからね、カンチェが主になりますが。インドの一番北の端にあるダージリンが、高度にして七千フィートぐらいでしょうか。そこからグンと下りていき、ほとんどシー・レベルまで下りると、そこにティスタ川という川が流れている。カンチェのほうから流れてくるんですが、そこが国境になっています。インドとシッキムのね。そこに監視所があってなかなか入れないんですが、そこからまた山がどんどん高くなってカンチェンジュンガまで行けば一番高いのです。つまり、ダージリンからはカンチェンジュンガが真正面に、なんにも途中の邪魔物がなく見えるんですよ。距離にして四十五マイルぐらいですね。日本だと東京から大磯ぐらいのところぐらいかなあ。

内山　相手が大きいからものすごくよく見えるでしょうね。

三田　それはもう。雲がかかっている時には、はじめこのへんにでてくるのかなあと思っているわけですよ、頂上が。ところが、雲がなくなるととんでもない高いところに感じるんですねえ。ヒマラヤの一番大きな景観でしょうね。こんな人間の住んでいるところから見える山としては……。

辰沼　しかし、シッキムにはカンチェンジュンガでなくとも、いい山というのはたくさんあります。

シッキムへの憧れ

塾の山岳部時代、一九二〇年の前後、私達仲間の数人は、よくドウグラス・フレッシフィールドのラウンド・カンチェンジュンガ（原文のものであったが）をひもどいては興奮していた。手の届かぬ、夢の世界とは思いながら、あの写真や地図を眺め、記述を読み返し、世界の第三高峯をめぐるヒマラヤの山や谷がどんなものか、といろいろ想像し、その主な山名や谷の名まで覚え込んでしまった。

その頃、鹿子木先生のヒマラヤ行を読み、先生から直接その山行の話を聞き、なおさらのことヒマラヤというものは頭にこびりついてしまった。今の若い時代の登高会員や、山岳部の学生は、鹿子木先生のことについてはほとんど知らないだろうが、私達の層はかなり〝山〟というものについて、直接間接先生の影響を受けていると思われる。今度の〝登高行〟には、鹿子木先生の遺稿——私はまだ拝見していないが、塾の連中のことにも触れているとのことで——が載せられるというので、何となく先生のことを思い出してこんなことを書き綴って見る気になったわけである。

槇、内田、田村その他の山岳部の先輩連を通じ、当時の私達若い層の者達も、色々な山行や、集り等に先生に接する機会が多くなった。私にとっては、先生からシッキムの話を聞くのが一番楽しみだった。先生のお宅に伺ったり、あるいはスキー登山や涸沢の岩小舎へお伴したりしてはそんな話を伺った。岩小舎へは、シッキムから持ち帰られたククリ（ネパール人の持つ山刀）を携行され、大いにご自慢のもので私達を羨しがらせたが、これを途中で紛失されて大騒ぎを演じたことも思い返される。鎌倉の円覚寺へ先生を訪ねた時、シッキムで使われたという折畳み寝台を部屋の隅に備えておられたのも印象に残っている。そんな事柄が、その後の私のヒマラヤへ関心を持つようになったことにも因縁がある

生が登ってみたいといっていたグイチャラ（五〇〇八メートル—パンディム西北の鞍部）ならもちろん行ける。その峠を越せばタルン氷河で、更にカンチに近づける。が、私としては、そのコルの右側のパンディム（六七〇八メートル）に一番惹かれた。難かしそうだが美事な兜状の魅惑的な山だ。揃った仲間が二三人いたなら相当なところまでやれそうな気がした。かなり離れてはいるが、実物を眼の前にしながら、あの支稜は、あの氷河はどうだ等と相談し合える仲間のいなかったのは本当に寂しかった。

カブルーの左には、ジャヌー（七七一〇メートル）がすぐくっついて見える。しかしこれはもうネパール領の山である。そしてこの山群では最も怪奇な難しそうな山貌を呈している。もし八千メートル級が登られたならば、第一に試みられる価値のある山と思っていた。いやが上にも登高欲をそそられる姿である。

これらの山々は皆、印度の避暑地ダージリンからもよく見える。そしてアプローチも他のヒマラヤの大きな山々に較べればはなはだ近い、にもかかわらず、主峯のカンチが登られたのはようやく一昨年のことであった。今ではジャヌーが残っているに過ぎない。これもカンチを登った英国隊が見逃すはずはない。カンチの主峯から西西南、ヤルン氷河を隔てて、直線的距離僅か五・六キロの近さだ。相当の調査がされているに違いない。英国に限らず、どこの国の連中も、シッキムを知っている手合なら、遅かれ早かれ何等かの手を打つ山であろう。

私も、一九五四年のマナスル隊が登頂に成功したならば、一部の隊員に、カンチのヤルン氷河地帯を偵察してくれと依頼してあったのだが、この機会を得られなかったのは残念だった。

八千メートル未踏峯はもうほんのわずかな数になってしまった。七千メートルの残された山々への時代がきたようだ。日本も、もっと、マナスル隊のような大がかりな隊でなくても、もっと、小人数のより少い費用で相当な登山隊を出し得る段階にきているのではないか。外貨の問題とか色々なネックもあるだろうが、努力の仕方ではまた道のひらきようもありそう

といえるだろう。
シッキム・ヒマラヤの最初の開拓者は、あの不朽の名著〝ヒマラヤン・ジャーナル〟を残した英国の植物学者ジョセフ・フーカー（一八一七—一九一一）である。そのジョセフ・フーカーが最初に訪ねたところが、カンチェンジュンガ山群の南側にある、シッキム最古のラマ僧院で有名なパミオンチである。私も、一九二八年の冬、この僧院を訪ね、すぐ近くのダーク・バンガロウに一夜を過ごし、夢に抱いていたカンチの山群を眼の当りに眺め、興奮に若い血をたぎらせたのを昨日のことのように思い出す。その時、ラマ僧正の差出す訪問者名簿に署名した後、前に訪れた人達の名前を繰ってゆく内、漢字で認めた鹿子木先生の署名を発見してなつかしさに胸を躍らせたことも思い出される。
私にとって、カンチェンジュンガを始め、その山群は、大それた望みかも知れなかったが、いつかはそのどれかに、仲間とパーティーをつくって、登攀を試みたいと思い続けていた。残念なことに、私にも、また、日本の仲間達にも、その実現の機会はやって来なかった。しかし、あの頃から三十余年を経た今日、私達の仲間はネパールで八千メートル級の登頂に成功した。私の夢も、一応実現の域に到達したものといえよう。しかしながら、それまでに余り長い年月を費してしまった。私自身には、恐らくまたとそんな機会は訪れることもないだろう。が憧れの灯は今でもなお消えることなく胸の奥に燃え続けてはいる。

* * *

今、私はもう秋に近い冷い雨が降りしきる蓼科の山小舎で、独りカンチェンジュンガ周辺の地図を按じながら、学生の頃の情熱に立ち還り、幸福なヒマラヤの回想に耽り、また、限りない新しい夢を追っている。
カンチの南に続く山稜の末端がシンガリラ山稜である。その山稜からのカンチ山群の眺めはまったく素晴らしい。自分だけで眺めるのはまことに惜しくもまた残念であった。カンチは難し過ぎるとしてもナーシング（五八三〇メートル）やジュボンヌ（五九五二メートル）ならやれそうに見えた。鹿子木先

僕のシッキム地図

終戦後まもなくある新聞社を通じ、カナダ山岳会のカーター君が東京にやってきていて、僕を探していることが解った。そしてうまく連絡がつき、丸ノ内の三菱商事ビルにあった天然資源局水産課の一室で会うことができた。アルバータ登山の帰途、バンクーバー近くの海岸山脈（コーストレンジ）を案内して貰って以来二十年振りの再会だったが余り年もとって見えなかった。おたがいに変らないねえという挨拶に始まって話はなかなかつきなかったが、事務所内は米国の軍人や軍属の出入りが激しく、あまり忙しそうなのでいずれ暇をみてどこかで食事でもしながらゆっくり話そうということになった。そして、帰りしなに、僕の家の住所と簡単な略図を渡して別れを告げた。

それから数日して、僕の会社に電話があり、次の日曜日に鶴見の僕の家を訪ねるという連絡があった。その日、何かの都合で、彼を駅まで迎えにいけなかったので、うまく道が分ればと案じながら待つことにした。

軍服を脱ぎ、水色の背広姿の彼が、玄関に現われたのは約束の時間をわずか過ぎただけであった。僕の家は丘の上で中々解り難いので、日本の友人でも初めての人は、僕の地図だけでは大分迷う者が多い。で、よくうまく独りで来られたねえと聞くと、彼はしわくちゃになった僕の鉛筆書きの略図をとり出し「この完全な地図が僕を安全に君の家に送り届けてくれたんだ。とにかく、僕は登山家だからねえ地図を見るのはうまいよ」といたずらそうに笑った。彼は当時バンクーバーの水産研究所長であったが、米軍総司令部の天然資源局水産課の嘱託として日本沿岸の漁場調査にやってきていたのだ。膨大な報告書作成のため、忙がしくて好きな山登りをやる暇もないとこぼしていた。が、幸運なことに、事務所には日本の地図がたくさん保管されていて、所員はそんなものに余り興味がないらしいので、日本アルプス地帯のものも一通りは手に入ると思う、そう

な気がする。学校単位でも、個々の山岳会単位でもやり得る山は幾らでもある。そういった小規模な登山隊をリードし、あるいはそんな隊に参加できるヒマラヤの経験者も今は相当数手持のある日本である。塾の山岳部あたりでも、もう独自の立場で真剣な計画を立ててもいいのじゃあないか。先輩連もできるだけの相談にはのってくれるだろう。

＊　＊　＊

雨の晴れ間を見て、この高原のあちこちに散策を試みた。澄んだ清涼な空気と、八子ケ峯、霧ケ峯に続く車山のなだらかな線がまことになごやかな高原を形ち造っている。ただ近年できた白樺湖をめぐって建ち並んだ旅舎やバンガロウがこの高原を俗化させたことはまことに残念だ。十何年か前に、この辺に山岳部の天幕行が催され、私も中学生の末弟と、やはり中学生の近藤等君等をつれて参加した。

その時はもちろんここには湖もなかったし、人家もなかった。白樺を混えた濶葉樹林が本当に美しかった。雨に降られて、私達は炭焼小舎に一夜を明したが、その夜の茶話会で、一人の若い胴のませた坊チャン型の学生が、昔縁日でよく見聞きした〝からくり〟の八百屋お七を歌ったのが妙に印象に残っている。その学生が辰沼廣吉君であった。同君が私とマナスル登山を共にし、その後の第二次、第三次の隊に参加する運命を持とうとはどうして想像できたろう。

そして今度のマナスル登頂に、酸素の面でたてた同君の手柄は、成功をもたらした原因の最高のものの一つであろう。今や、辰沼君は私達関係の仲間内でも、立派にリーダー役をつとめ得る一人と信じている。その時のもう一人の少年、近藤君は、その後早稲田の山岳部の重鎮となり、私がマナスルへ旅立つ時、同君の著書としての最初の〝ヒマラヤ〟を羽田の空港に届けてくれた。同君が昨今、ヒマラヤあるいは西欧の山に関するものを続けて翻訳しているのは読者もすでにご承知のことと思う。

蓼科山麓の南平が俗化したのを嘆きながら、一方その時の学生や少年達が、今は、実際面にあるいは文学を通し、私達の永遠の憧れであったヒマラヤに繋る運命を思い、感無量ならざるを得ない。

（一九五六年夏蓼科高原にて）

ム・ヒマラヤ、ネパール・ヒマラヤと高峯群を追っていく。カンチェンジュンガ山群やエヴェレスト付近にはすでになじみの山名がたくさん出てくる。更に西から西北にかけて、クマオン・ヒマラヤ、パンジャブ・ヒマラヤそれから一番西北端のカラコラムへと続く。カラコラムにはナンガパルバートを初め大物がうようよと集まっている。

ちょうどその頃、ヒマラヤの山名や地名に特別な関心を抱いていた僕は、その地図を通して、限りない興味をいよいよつのらせられることになった。

そのうち、マップ・オフィスのインド人書記とも顔なじみになり、先方からとっておきのものまで見せてくれるようになり、ある日シッキムを中心にした色刷りのまことに美しい地図を手に入れることができた。当時の僕にとっては、それはどんな名画にも優る芸術品であった。

スケールは 1 inch 1 mile で、約二十五万三千分の一に当るが、そのスケールの割になかなか豊富な内容を持ったものであった。特に僕の嬉しかったことは、チベットやネパールとの国境辺の高峯群や、それを取り巻く水色に彩られた氷河の美しさである。僕にとって、シッキム・ヒマラヤの大観が、この地図を通してはっきりと頭の中に描き出されてくるのだ。

五百フィート間隔の等高線がその山岳地帯の大体の険峻な模様を教えてくれる。氷河地帯に達するまでの谷に沿った点線は歩道の限界を示し、更にその下流には駄馬の通れる路も示されている。その路に沿ってところどころに部落や、ゴンパ（ラマ教の僧院）、モスク（回教寺院）、レスト・ハウス、ダーク・バンガロウ等の記号も親切に記されている。

そこで、僕の頭の中には、それ等の山岳地帯に入る色々なプランが後から後から限りなく湧いてくる。たった一人では余り高い山への挑戦は無理だろう。それなら谷をつめてせめてチベットやネパールの国境までも行ってみたい。それから先は絶対に入ることは禁止されているから止むを得ないとしてもシッキムでさえ余り長い期間は入国は難しい。それならその許された入国の期間内にどれだけ奥へ入ることができるだろう。そしてどのくらいの高さまで登る

したら何とか記念に故国へ持ち帰るつもりだといっていた。その後事務所で見せられた地図は、陸測五万分の一で、地名には英字も正確に印刷されていた。米軍もなかなか早手回しに準備していたものらしい。

地図の話に一刻花が咲く。部屋一杯に地図を拡げあの山この山と、空想の山行を楽しむ時、カーター夫人もよく参加して夜を徹するとのことだ。僕達が彼の案内でコースト・レンジのキャメルという岩峯を登った時、三人の娘さんが同行した。その中の一人が後のカーター夫人で、その後も夫婦で相当な山をものにしている。コースト・レンジでは、彼が時々小さな経緯儀をとり出して測量していたのを覚えている。彼は当時からその辺の地図を作っていたのだ。

僕がインドにいた頃、シッキムから旅の便りを出したことがある。カンチェンジュンガの絵葉書だったと記憶している。彼から早速返事がきて、インドにいられる君が羨ましい。が、僕もアラスカ境の大物を覗って精進を続けている。それから、君と歩いたコースト・レンジで作った僕の地図が政府で採用されることになった。と結んであった。彼の地図作りもとうとう本物になったわけである。

山へ登るものにとって、僕もその一人だが、地図の魅力は確かに一種独特のものがあると思う。僕がインドに渡ってまず初めに手に入れたかったものはヒマラヤの地図であった。当時（一九二〇年代の終り頃）、カルカッタ政府直営のマップ・オフィスではまだかなり自由に地図を手に入れることができた。ヒマラヤ全体の、布地で裏うちした折たたみ式の地図を注文して、そのでき上った時の嬉しかったことを忘れない。

その地図は百万分の一のスケールであったと記憶している。青色を主とした美しい色刷りで、ヒマラヤの主脈に沿った氷河地帯は白く浮き上って眼を惹いた。

九十度を越える部屋の暑さも忘れ、生温い大理石の床にそれを拡げて毎夜のように大ヒマラヤの展望を心に描いて楽しんだ。

東端のアッサム・ヒマラヤから西へ順に、シッキ

山旅につながる思い出の数々の歌を口ずさむ。一月というのに、茶園の白い花や、部落の菜の畑は眼の覚めるような黄一色で、遠い故国の長閑な田舎の春を思い出させる。が、遠く霞む空の代わりに、そこにはいつも、思いもかけぬ高い空に氷壁の輝くカンチの山々が立ち並んでいた。

一日の旅を終えた泊り場は、どれもこれも、見晴らしのいい丘の上に建てられた瀟洒なダーク・バンガロウであった。ベランダの軒端には珍しい花をつけた蘭が幾つも吊り下げられ前庭には美しい花壇がよく手入れされ、とりどりの花がその妍を競い、旅の疲れを慰めてくれる。あるバンガロウの庭には桜の木が数本、さくらんぼうをつけ、少年の頃のその甘酸っぱい郷愁を誘う。

しかしそういった、シッキムの亜熱帯の溪谷や峠を越える旅は、晩春や初秋の秩父の山行を思い出させる長閑なものであったが、カンチ山稜の南端に続くシンガリラ山稜の朝晩はさすがに寒かった。が、幸運にも僕のその時の旅は毎日快晴に恵まれ通しであった。

そこは、インドとシッキム、それからネパールにも接する国境山脈で、カンチの山群や遠くエヴェレストまで一望の下に眺め得る最も優れた展望地帯の一つであろう。

北に進むにつれ、カンチの偉容はますます大きくなってくる。二万フィート級の雪峯を左右に従えて立ちはだかる巨大な氷の壁は、朝と夕に、筆舌につくせぬ美しいモルゲンロートとアーベントグリューに燃え上る。そんな豪華なヒマラヤの大観を朝な夕な、僕はこの山稜上のどのダーク・バンガロウでも満喫させて貰った。

このダーク・バンガロウは皆、簡素だが、がっちりした木造漆喰塗の建物で、二重の硝子窓は、一二、〇〇〇フィートの山稜の激しい風と寒気から宿泊者を親切に護ってくれる。冬のこととて訪れる人もなく、全居室は僕の独占する贅沢さであった。

夕食後の数刻、ふんだんに薪のくべられた暖炉の前に揺椅子(ロッキング・チェヤー)を持ち出し、故国の山の仲間への便りを認めた。その便りは、僕と一緒にダージリンまで帰って投函され、二カ月近くかかって仲間達に届

ことができるだろう、そんな楽しい想像を語り合う相手となってくれたのはこの一枚の地図であった。

この地図のカンチェンジュンガを取り巻く無名の氷河に、色々な記録や情報を基にトンション氷河、タルン氷河、パッサンラム氷河、シンブ氷河とかいった名前が書き入れられていった。ネパール側にはカンチェンジュンガ氷河、ジョンソン氷河の名前も記入された。カンチの主峯の北に続く山稜には、二万フィートを起える無名峯にトウィン（二三、三五〇フィート）、テントピーク（二四、〇八九フィート）、ランゴピーク（二二、八〇〇フィート）、ピラミッド（二三、四〇〇フィート）、ジョンソンピーク（二四、三四四フィート）といった名前が入れられた。ちょうどドイツの登山隊がカンチに果敢な挑戦を試み始めた頃であった。

僕のこの地図はだんだん賑やかになっていった。カンチの主峯から西南六、七マイル離れたところに地図の上では余り目立たぬジャヌー（二五、二九四フィート）がある。僕の一番気にしていた山の一つである。ここはすでにネパール領で、この地図はここで切れてしまっている。そこで、僕はまたマップ・オフィスに駆けつけてこれに続く同じスケールのネパールの地図を見付け出して貼り合わせた。が、この地図は、大分ずさんで心もとないが、それから西へ続くネパール・ヒマラヤへの僕の関心をかき立てる一つの動機となった。

今、僕はこの二枚貼り合わせた、ぼろぼろになった地図を拡げて色々な思いに耽っている。三十年も前に、この地図を按じながら昂奮した情熱を心の奥に呼び戻すことができる。その時の数々の夢に描いたプランは、ほとんど果すことができなかったが、それ等の憧れの山々や氷河を、遙かかなたからこの眼で親しく眺め得る機会を持つことができただけでも幸福と思わねばならないだろう。

シッキムでは、氷雪の山懐ろ深く入って、冒険と登高の激情を満足させることこそできなかったが、そこでの旅の楽しさは一生忘れることはできないであろう。

ヒマラヤ・ポニーの背に揺られながら、かつての

それは、彼と共にマカルー（二七五、一二〇フィート）の初登頂をした時のフランス隊の隊長ジーン・フランコからのもので、秋にはジャヌーをやり度いからぜひ参加してくれという意味のものであった。さすがにフランコだ、八千メートル級の次に狙われると僕も信じていた大物を逃すはずはなかった。この計画は予定通り、ギャルツェンも参加して、その秋決行されたが失敗に終わった。しかし必ず近い将来再挙されることは疑いもないことだろう。ネパール領にある巨峯だが、カンチの主峯にくっついたような位置にあり、ダージリンからはいつも見える山だけに、むしろシッキム・ヒマラヤの山といいたいくらいだ。

僕のシッキムの地図に記載されているヒマラヤの巨人達（ジャイアンツ）はほとんど登られてしまった。今日もなお未踏の誇りを持ち続けているのはジャヌーのみとなった。いつの日か、またダージリンを訪れる機会もあろう。いやぜひとも機会はつくることに努力しよう。しかしその時は、僕の地図には恐らく一つも未踏の山の名前は見出せないだろう。ただギャルツェンに、マカルー、マナスルとともに、ジャヌー初登頂の栄冠をも獲ち得させてやりたいものだ。ヒマラヤの大物を三つものにするシェルパは彼をおいて他にないだろう。彼はそれに充分値する資格と人柄を持ち合わせた優れたシェルパだと思っている。

地図のことから、話はそれからそれへつきそうもない。それよりも、こんな機会に古い地図でも整理しようと思いたったが、机や本箱の引き出し、あるいは戸棚の奥で埃にまみれて隠れていたり、一通りではない厄介な仕事になりそうなことを発見した。地図と一緒に、忘れていた古いノートやスケッチ、色々な手紙等が出てくる。それを見始めるとそっちの方が面白くなってきて、どうにもやりかけた方の始末がつかなくなってしまう。やはり思いたったの が吉日で、まず第一番にこのシッキムの地図がこれ以上痛むといよいよ折目の辺がすっかり擦り切れて解らなくなるから、商売人にでも頼んでていねいな裏打ちでもして貰うことにしよう。そう決心してこのきりのない話の切り目にする。

くわけだが、僕はそれでも、遙か隔ったシッキムの山から、彼等に親しく話しかける幸福を味わった。その後穂高で死んだ大島亮吉への僕の便りもその一つが最後のものになってしまった。

その時からちょうど三十年振りの去年の春、僕は多忙の旅程を二日ばかりさいてダージリンを訪ねた。そして丸一日、ゆっくりとカンチ山群を眺め暮した。しかしその時は、ほとんど終日なじみのシェルパ達と一緒であったのは楽しかった。

ダージリンの町も山々の姿も、もちろん昔と少しも変りなかった。しかしたった二日の訪問も、僕にとっては、今は何か、久し振りに故郷を訪ねるようななつかしさと身近さとを感じさせられた。それはマナスルで永い間起居を共にした家人のような親しい間柄になったシェルパ達に温かく迎えられたからでもあろう。

かつて、ダージリンと日本とは大変なへだたりがあった。しかし今は大分違う。距離こそもちろん変りはないが、航空路の発達した今日、羽田からカルカッタを経て、ダージリン山麓のホグドグラまで空を飛び、自動車で山を登れば三日目には着いてしまう。それもあるが、そこに住むシェルパ達と僕達との間に結ばれた心のつながりがあらゆる距離をなくしてしまった。

そのダージリン滞在中の半日程、僕はギャルツェン・ノルブの家の客となった。数カ月前東京でたびたび会ったばかりの彼のことなので、まだ東京のどこかで会っているような気さえする。神田の山ノ上ホテルでは話相手もなく寂しそうにしていた妻君も、さすがに自分の家のこととてすっかり寛いだ様子で、あの時の坊やを抱いてお茶を入れたり、僕達の好物だったジャン(どぶろく)を運んだりかいがいしく動き回っていた。先輩格のギャルツェン・ミッチェン(一九五四年以前のマナスル隊のシェルパ頭)と、マナスルではいつも高所で手柄をたてたグンディも同席して、日本の話、仲間の話に身がはいって時間のたつのが惜しかった。

話がちょっと切れた時、ギャルツェンは机の引き出しから二通の手紙を出して僕に見てくれという。

いつの間にか、部屋にはランプが灯されていた。暖炉にはすでに薪がパチパチと威勢のいい音を立てている。この夜の食事も例によりカレーの御馳走である。しかし食器も一通り小綺麗なものが揃っている。日本の歳末、銀座の雑沓を想う。ずいぶんとはるばるやって来たものである。しかしながら私にとっては、何だか秩父あたりの辺を歩いているような気がしてならない。

栃本（とちもと）あたりの宿屋へ落ちついて記録の整理でもやっている心持である。ただ食器を片づけにくるチベット人の顔を見たり、うしろの小舎から聞えてくる苦力たちの高い話声などを聞くと不意に環境のいちじるしい違いに気がつく。

スウェーターの襟をかき立て、暖炉のそばにいるとはいえ、十二月末の、この高度の小舎とは受けとれぬ暖かさである。二日前のパルート（一一、八一六フィート）の小舎の寒さからくらべると大した差である。

緯度からいうと、北緯二十七度十八分ちょっとになるから、琉球の沖縄島附近にあたろうか。経度からいえば、東経八十八度十五分ほどのところで、ちょうどカルカッタの真北あたりになろう。シッキム国の西南隅に近く、ネパールとシッキムの国境シンガリラ山脈のゲリ峯（一二、八〇八フィート）から東に派出した山稜の一端、六、九二〇フィートの地点眺望のもっともいいところにある。

シッキムのバンガローとしては小さい方ではあるが、寝室二、食堂一、ベッド四を備えたきわめて簡素なしかし感じのいい小舎である。こんな小舎の一つでもが日本の山にあったらどんなにすばらしいだろうと思う。こういう小舎を泊って歩けるこの辺の旅行者は実際幸福である。

私は、バンガローに泊るごとに、食事の後、暖炉の前のソファに腰をおろし、故国の仲間へ山の便りをすることが大きな楽しみの一つである。

この夜はHへの便りに大いに興奮した。せっかくこんな巨人連が手を広げて待っているのに日本の連中はなにをしているのだろう？　自分のやきもきしている気持が手紙の文字に変ってゆくことによりようやく多少の鬱憤が晴れてゆく。

シッキムの或る夜

パミオンチのバンガローは、その日もまた幸運な私にカンチェンジュンガ山群の全容を惜し気もなくすぐ眼前に展開させてくれた。

前夜の宿場、デンタムからの十一マイルは、路がよかったせいか、楽なのどかな旅であった。馬も機嫌好く終始元気に坂を登ってくれた。愛すべきヒマラヤ・ポニーである。三時過ぎにはバンガローのヴェランダにあぐらをかいて、ルックサックも投げ出したままでさっそく展望にふける。十二月も末だというのに、太陽があまり低くならぬうちは小春のような暖かさである。

地図を前の芝生に広げて、山の皺の一つも見落すまいとスケッチになかなか多忙である。ダージリンから六十マイルも来ただけのかいがある。正面のカブル（二四、〇〇二フィート）が断然大きい。前にかかる大きな氷河がたまらぬ魅力を持っている。小カブル（一五、八一四フィート）がずっと谷低く沈んで、小さな瘤のよう。ずっと左のほうはるかに、ネパールのジャヌー（二五、二九四フィート）があの凄い東南面の氷壁を前山の稜線の上に覗かせている。しかしながら、シンガリラ山脈の上から眺めていたときのような恐ろしさは感じられない。おそらく山容の下部大半を隠しているせいであろう。

スケッチの手を休めては眺める。眺めあかぬ大観である。どんどん太陽が西に傾いてゆく。カブルの右奥はるかにカンチェンジュンガの峯頭が黄金色に輝き始めている。峯々が、氷河の面が、黄金色の輝きを増してゆくのにつれ、眼下の谷々は暗さを増してゆく。ヒマラヤの夕映の色の変化を誰がよく表現できるだろうか？　絵具をもって、文字をもって、言葉によって、それはもちろん不可能なことである。

陽が西に没すると急に寒さを増してくる。そして黄金色に輝いた部分は突然暗い灰色に、他は黒に、谷々はその蔭を暗黒に深めてゆく。

るあのたくさんの教典の版木を思いだした。そして欲しいものだと思った。しかし、あるヨーロッパ人の旅行者がかつてこの版木を欺して持ちだし、チベット人に殺害されたという話を思いだした。

私はしきりにすすめる彼女の贈物を少なからぬ未練を持ちながら辞退した。

私は馬をまた、クルハイトの谷へ向けた。彼女はたどたどしいヒンドスタニーで礼をくりかえし、いつまでも私たちの一行を見送っていた。

（一九二八年シッキム行日記の一節より）

そろそろ寝室へ引き上げようとする頃、ヴェランダに黒い人影が映った。じっと動かない。苦力も寝てしまったはずといぶかりながら扉をあけてヴェランダに出てみると、そこには大きな、法衣をまとったラマ僧が黙って立っている。今時分なんの用だと聞くと、数日前、二階の梯子から落ちて手を痛めたのだが何か薬はないかという。広い袖口から手首を出してみせる。だいぶ腫れ上っている。

適当な薬もないので、オゾを腫れた部分一面に塗りつけてやった。声の優しい調子が変なのでよく見ると、身体は馬鹿に大きいが女のラマ僧であった。

彼女は残りのオゾを懐に入れて、なんべんも頭を下げながら闇の坂路の下へ消えていった。

私は彼女を送り出してしばらくヴェランダの前へ下り立ち、灰色に静まり返ったカンチェンジュンガ山群の夜の姿に見入った。

小舎の下方周囲の丈低い樹々は、葉擦れの音一つ立てぬ静寂さ。この小さな丘陵に覆いかぶさるように高く大きく聳立するヒマラヤの巨人の深夜の姿は、あまりにも凄く身に迫るものがある。前の谷へズルズルと引きずり込まれてゆくような気がする。

かつてダージリンに駐屯していた英国の兵隊の中に、毎夜、この巨峯のあまりにも大きな姿に接して、幾人かの発狂者、自殺者を出したことがあるという話を思いだした。

私は、そっとヴェランダの床を踏んで寝室に入った。新しい薪をくべてベッドにもぐり込んだが、薪の撥ねる音が耳についてなかなか寝つかれなかった。

＊　＊　＊

翌朝、小舎から少しばかり離れた丘上にあるシッキムでもっとも大きなラマ寺をおとずれた。そしてその帰途、パミオンチの部落からだいぶ離れた坂路の途中で突然昨夜の尼僧に出くわした。

彼女は私の馬に近づいてきて昨夜の礼をいいながら、四辺を見まわし、薄汚ない布に包んだものを私に差し出した。中には大きな算盤ほどの形のラマ教典の版木が二枚はいっていた。これをくれるというのだ。

私は寺院の部屋の内部にぎっしりとしまわれてあ

にも知られなかった国である。このシッキムには、かつて四〇数年前私も足をふみ入れたことがあり、爾来その強烈な印象は消え去らないまま今日に至っている。

シッキム、ブータンといっても、すぐにそれはアルプス山麓のスイスのように、その位置や国柄が頭に浮かぶ人は少ないであろう。しかも、「乞食も失業者もいない花園のような国」といったならば、なおさらそんな国は一体あるのかといぶかる人が多いであろう。しかし、そういう国が今日現実にあるのである。それはヒマラヤ山脈のふところ奥ふかく抱かれたシッキムである。ブータンはといえば、この方は数年前国連に加盟した独立国で、日本人も観光客として訪れた人もすでにあるであろうが、シッキムについては、ここに行ったことのある人は今まで数えるほどしかないであろう。シッキムが話題になったのは、若い女王がアメリカ人だということと位しかないインドの保護国である。

この二国がなぜ問題になるかというと、それがチベットに接した中印国境の要衝に位している戦略的重要性からであって、とりわけシッキムは、インドの最前線基地である以上、入国することと自体が容易なことではないのである。それは山また山の峨々たる連峰に遮ぎられた自然的障碍以上に、インド政府による隔絶政策から、シッキムの詳しい地図一つ手に入れることも仲々困難な現状である。それにもかかわらず、いまここにこの二国を対象にとりあげたのは、エベレスト山麓の知られざる二国の現状をわが国に紹介したいという意図にほかならない。

シッキム、ブータンは、文字通り孤高な山国で、中世紀から二〇世紀の世界に突如一足とびに

あとがき

本書は、Vincent Herbert Coelho 著 Sikkim and Bhutan (1970年), Indian Council For Cultural Relations (Vikas Publications) の全訳である。著者コエロ氏は、一九一七年、インドのマンガロールに生れ、現在スリランカ駐在高等弁務官(大使)の地位にあるインド外交官である。著者は、マドラス大学で物理学を専攻した理学博士の称号をもつ異色の外交官である。故ネルー首相の秘書を勤めて後、外務省に転じ、スイス、アラブ連合、トルコ、ブラジル等に駐在して、かつて駐日大使も勤めたことのある知日派で現在は外交第一線にあるコエロ氏は、その有能さが買われて、シッキム、ゴアなどの問題多いところにも派遣され、国際会議の体験も豊富である。このコエロ氏がシッキム駐在の折の体験から生れたドキュメンタリーが本書である。

シッキムは、世界第三高峰カンチェンジュンガを盟主とする巨峰群(ジャイアンツ)を包蔵する山岳王国であり、ブータンにいたっては、人界から見られない高い山々の存在がかなり近年まで世界の岳人達

厄介になったことを深く御礼申上げねばならない。OB丹部節雄君は遠くスリランカのコエロ大使との橋渡しに尽力し、山岳部の木村泰助監督は、多忙中にかかわらず本書編集作業を調整して、出版社との折衝連絡に当たってくれた。原地の語の発音表現がきわめてむずかしいため、これについては、外務省アジア局西南アジア課の馬淵睦夫氏、近年度々ブータンを訪れている小方全弘氏に御教示頂き、写真、地図については、山と溪谷社の川崎吉光氏、鈴木肇氏、とりわけ註解資料関係については山岳部OB神戸常雄氏の御助力を頂いたことをここに深謝している。本書が成ったのは、これら諸氏の御協力の賜であって、この知られざる二国の紹介がわが国にひろめられることになれば望外の幸いである。

一九七三年一〇月二五日　　三田幸夫

現われ出てきたような珍しい国である。その未知の魅力にあふれた興趣豊かな国を紹介したのが本書である。ただ本書の著者コエロ氏は、インド外交官であり、その立場からの見解には、われわれは関与するものではなく、あくまで著者個人のものであることは注意すべきところである。たまたま同大使が日本山岳会幹事の丹部節雄氏と親しく、同氏を通じて邦訳を依頼され、その翻訳権を慶大山岳部に委ねることを快諾されたことから、この訳書が生れるに至ったのである。

本書の上梓には、何よりもまず集英社編集部長若菜正氏のなみなみならぬ御厚意と、それを促進されて実現の道を開いた石坂洋次郎氏の熱心な御好意とに対して、心から感謝しなければならない。このような地ならしが出来てからは、慶大山岳部関係者の熱心な協力により、この夏休を犠牲にして突貫工事の翻訳を完成した。それは、慶大山岳部創立六〇周年が本年一二月一日にきまったので、それに間に合わせる必要が生じたからである。はじめ、山岳部員が分担翻訳する予定であったところ、夏休みは部員の山行シーズンで不在のため、在京の山岳部関係者が実際の仕事に当たることになった。邦訳には、序文を丹部節雄君、本文を内山正熊君、付録を木村泰助君、註は在京山岳部員が担当し、全体を私がまとめた。ただ原書は何といっても外交官のドキュメンタリーであり、ヒマラヤ山行には無関係な書物であるので、この点を補うために、私と辰沼廣吉君とがシッキムに行った経験に基づいて座談会形式で山に関する思い出や私の旧稿を末尾につけて、シッキムに関する認識を新たなものにしようと試みた次第である。

最後に、この出版については、集英社の鈴木啓介氏、綜合社の篠勇氏、平橋憲和氏には特に御

シッキムとブータン

訳 者 三田幸夫
内山正熊

昭和48年11月20日 印刷
昭和48年12月15日 発行

編 集 株式会社 綜 合 社
101 東京都千代田区神田錦町3の19
電話東京（294）3811
発行者 陶山 巌
発行所 株式会社 集 英 社
101 東京都千代田区一ツ橋2の5の10
電話東京（265）6111 振替 東京15653
印 刷 株式会社常磐印刷所 株式会社美松堂印刷所

落丁・乱丁本はお取りかえいたします。
定価はケースまたは帯に表示されています。

0075—771048—3041